仙台市文化財調査報告書第246集

欠ノ上Ⅱ遺跡

発掘調査報告書

2000年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第246集

欠ノ上Ⅱ遺跡

発掘調査報告書

2000年3月

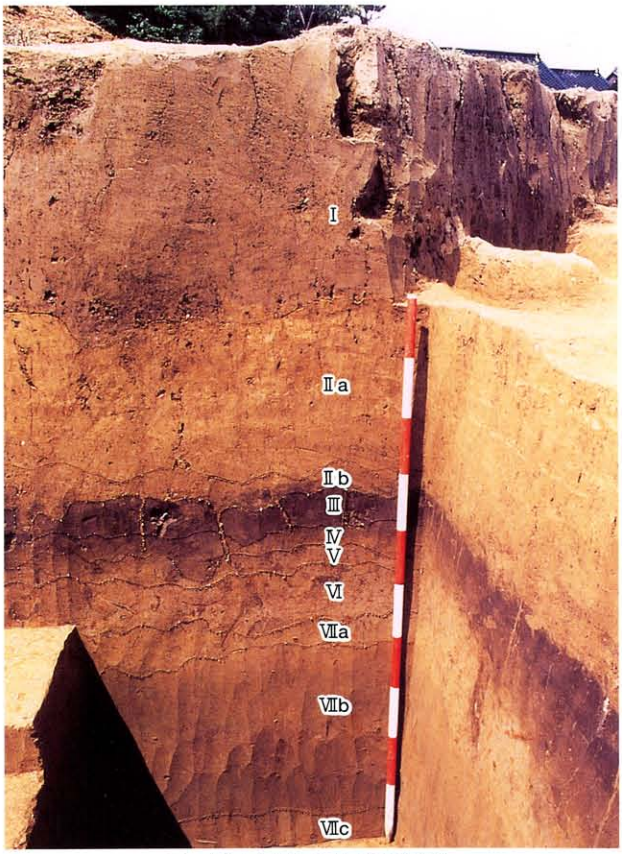
仙台市教育委員会

1．遺構検出状況（東より）

2．SE-1 井戸跡下部（西より）

3．調査区全景（南より）

4．下層調査区の状況（南より）



5．基本層断面（西部北壁）

6．7世紀末～8世紀初頭の遺物
①羽口 ②トリベ ③高坏 ④坏 ⑤関東系土師器坏

序　文

仙台市内には、旧石器時代と縄文時代の山田上ノ台遺跡・弥生時代の富沢遺跡・全長110mを誇る遠見塚古墳・全国的にも最古の地方官衙の一つである郡山遺跡・国分寺として最北の陸奥国分寺跡・伊達政宗が築城した仙台城跡など全国的にも著名な各時代の遺跡をはじめ、約700ヶ所もの遺跡があります。おりしも今年は西暦2000年にあたり、仙台平野で稲作が開始され、現代文明へとつながる農耕社会に移行してから約2000年の歳月が流れたことになります。この間に多くの遺跡を残し、郷土に暮らした幾多の祖先の努力により、社会は急速に発展し、現在の私たちは、豊かな生活を実感することができるようになりました。しかしながらその一方で、消費社会・情報化社会などと呼ばれてめまぐるしく変化する生活の中で、環境問題や将来の社会生活への不安が話題となっております。こうした情勢のなかで、新たな創造力と調和に基づくゆとりある社会への変革が求められています。ゆとりあふれるふるさとの創造にあたって、郷土の深みある歴史的環境を形作っている遺跡をはじめとする様々な文化財は、調査・研究・学習という市民それぞれの体験のなかで、私たちの将来への展望を開くうえで大きな役割を果たしてくれるものと期待されます。このような可能性を秘めた遺跡や文化財を、先人の残した遺産として護りながら活用し、未来に受け継いでいくことは、市民と行政にとって大切なことと思われます。

今回行われた欠ノ上Ⅱ遺跡の調査は、遺跡に係る事業主体者の多大なる理解と協力によって実施されました。その結果、郡山遺跡と同時代の遺構や、関東地方からの移民との関連が考えられる遺物の発見など、東北地方の歴史時代における黎明期の解明に関る多くの調査成果をあげることができました。

本発掘調査報告書の刊行にあたり、事業主体者をはじめ、調査にご協力・ご指導いただきました多くの方々に深く感謝申し上げるとともに、本書が研究者のみならず各方面に活用され、また出土遺物や調査記録が郷土史の資料として活かされることを期待いたしまして刊行のご挨拶といたします。

平成12年３月

仙台市教育委員会

教育長　**小　松　弥　生**

例　言

1　本書は、宅地造成工事に伴う宮城県仙台市欠ノ上Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。

2　本書の本文執筆と編集は、竹田幸司と協議のうえ工藤哲司が担当した。

3　報告書作成にあたり、以下のとおり作業を分担した。

遺物接合・復元	：庄子・菅井・杉舩・高橋美香・中里・深瀬
遺物写真撮影	：今野・安部
遺構図面整理	：竹田
遺　物　実　測	：相沢・高橋朝子・中里・工藤
遺構図・遺物実測図トレース	：工藤

4　報告にあたり、出土した陶器・磁器の年代観については本課の佐藤洋の、縄文の施された土器については赤澤靖章の助言を得た。

5　本調査で出土した溶解物付着土師器については、郡山遺跡出土品とともに国立歴史民俗博物館に科学分析をお願いし、分析の結果については仙台市文化財調査報告書第244集郡山遺跡XXに収録されている。

6　調査と報告書の刊行にあたり、次の方々に協力を賜った。記して感謝の意を表す次第である。

国立歴史民俗博物館・福仙興業株式会社・桂島建設株式会社

7　本書に関る資料の全ては、仙台市教育委員会が保管している。

凡　例

1　本書で使用した土色は、「新版標準土色帖」（小山・竹原：1976）に準拠している。

2　本文・図版で使用した方位は、全て真北で統一してある。

3　図中の座標値は、平面座標系Xを基準とし、単位はkmである。

4　標高値は、海抜高度を示している。

5　遺構名の略号として、次の略号を使用した。

SB：掘立柱建物跡　SD：溝跡　SE：井戸跡　SI：竪穴住居跡及び竪穴遺構　SK：土坑跡　P：ピット

6　報告書中の全体図および遺構平面図においては、撹乱と新しい重複遺構は、省略または簡略化している。

7　遺物の登録には、以下の分類と略号を使用した。

B：弥生土器　C：土師器（非ロクロ）　D：土師器（ロクロ）　E：須恵器　I：陶器

J：磁器　K：石器・石製品　L：木製品　N：金属製品　P：土製品

8　竪穴住居跡床面の濃いスクリーントーン（網）は強い焼け面を、薄いスクリーントーン（網）は弱い焼け面を示している。また、柱穴内のスクリーントーン（網）は柱痕跡の位置を示している。

9　土師器実測図内面のスクリーントーン（網）は黒色処理されていることを示している。

10　礫石器実測図のスクリーントーン（網）は、磨り面の範囲を示す。

11　羽口実測図の　は溶解部分を、　は還元して灰色に変色した部分を表している。また、前者はトリベの溶解物付着部分も表現している。

12　遺物観察表の（　）内の法量は、残存値を示している。

13　本文中の灰白色火山灰（庄子・山田：1980）については、現在、十和田a火山灰（To-a）と同定されており、降下年代は西暦915年初夏とされている（町田：1981、1996）。

目　次

序　　文
例言・凡例
目　　次

第1章　遺跡の立地と環境 …… **1**
1　地理的環境 …… 1
2　歴史的環境 …… 1

第2章　調査の経緯と体制 …… **4**
1　調査に至る経緯と経過 …… 4
2　調 査 要 項 …… 5

第3章　調査概要 …… **6**
1　遺跡の状況 …… 6
2　基本層位と発見遺構 …… 6

第4章　検出遺構と出土遺物 …… **7**
1　掘立柱建物跡 …… 7
2　溝　　跡 …… 13
3　井　戸　跡 …… 15
4　土　坑　跡 …… 16
5　竪穴住居跡 …… 20
6　Ⅲ・Ⅳ層出土遺物 …… 47
7　その他の出土遺物 …… 49

第5章　考察と調査のまとめ …… **49**
1　遺構の時期と性格 …… 49
2　遺物の総括 …… 56

写真図版 …… **59**
遺 構 写 真 …… 61
遺 物 写 真 …… 71

第１章　遺跡の立地と環境

１　地理的環境

欠ノ上Ⅱ遺跡は宮城県仙台市の東部、仙台市太白区郡山字欠ノ上に所在する。JR長町駅の南東約1.8kmの地点にあたる。

仙台市の地形は、西側から東側にかけて大きく３段階の変化する。西部は東北地方の背梁をなして南北にのびる奥羽山脈から派生する七北田丘陵・青葉山丘陵・高館丘陵など、標高300～100m級の山地とその周辺の丘陵地帯となっている。山地・丘陵地帯の東側、高層ビルの立ち並ぶ仙台市街地は、広瀬・名取川により５面の段丘地形が形成されている。段丘面の標高は、上位（古期）段丘では200～100m、低位段丘では20～50mである。

丘陵段・段丘地形の東側は、宮城郡七ケ浜町から亘理郡山元町まで、最大約10kmの幅で南北約40kmに渡って形成された「仙台平野」となる。この沖積平野は、北から順に七北田川・広瀬川・名取川・阿武隈川などの運搬物によって形成されたもので、流域は扇状地・自然堤防・後背湿地・旧河道など沖積地特有の微地形が複雑に入り組んでいる。また砂浜海岸からなる現海岸線付近の沿岸部には、幅約３kmの範囲に３列の浜堤とその間に堤間湿地が形成されている。

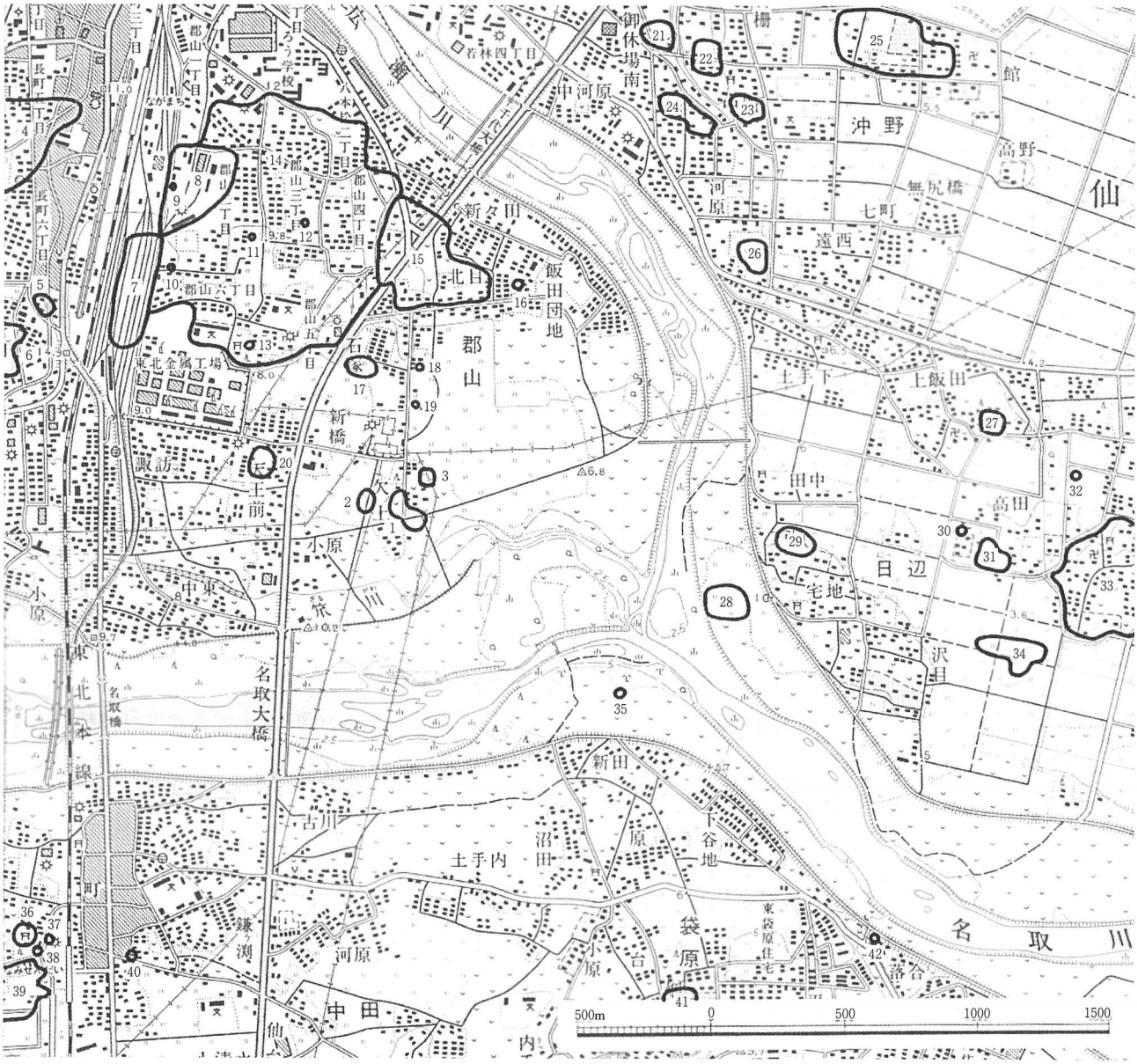
欠ノ上Ⅱ遺跡は、名取川と広瀬川に挟まれた仙台平野の中央付近に位置し、遺跡の東南方約１kmの地点で両河川及び名取川支流の旧笊川が合流している。遺跡周辺はこれらの河川とその旧河道により複雑な微地形が形成されている。遺跡は、標高約８mの自然堤防上に立地し、現在南北200m・東西150mの比較的狭い範囲が遺跡として登録されている。遺跡の西側には、郡山遺跡の方向から蛇行しながら現３河川合流地点方向に向って南北方向にのびる旧河道が存在する。旧河道の幅は80m前後ある。遺跡の立地する自然堤防上面と、現在水田となっている旧河道面との比高差は約2.5mあり、自然堤防面から旧河道面にかけては急な傾斜面となっている。

２　歴史的環境

宮城県では、築館町上高森遺跡において約60万年前の前期旧石器が発見され、さらにその下の地層からの石器の発見が続いている。仙台市内においても、上位段丘の青葉山段丘に形成された青葉山Ｂ遺跡で前期旧石器時代に所属する石器が発見されている。以降、山田上ノ台遺跡・北前遺跡・住吉遺跡などで中期旧石器時代及び後期旧石器時代の石器が層位的に発見されている。また、欠ノ上Ⅱ遺跡の北西2.5kmの沖積地に位置する富沢遺跡では、現水田面の約５m下から約２万年前の後期旧石器時代の焚き火跡を伴う石器製作跡と森林跡が発見され、注目を集めた。

縄文時代になると、富沢遺跡周辺で早期の遺物や落し穴が発見されている。前期には富沢遺跡を望む段丘上に位置する三神峯遺跡に集落が形成されている。中期には、段丘面に集落が継続的に形成されるだけでなく、再び沖積地への進出が活発になり、六反田遺跡・下ノ内遺跡・王ノ壇遺跡・伊古田遺跡など、笊川流域の自然堤防上に多くの遺跡が形成されるようになる。後期には、沖積地の遺跡は笊川下流へとさらに拡大し、西台畑遺跡・郡山遺跡・北目城跡で遺構・遺物が発見され、さらに名取川と広瀬川の合流地点から1.5km下った高田Ｂ遺跡においても竪穴住居跡が発見されている。しかしこの時期、丘陵部の遺跡は相対的に縮小していく。晩期には、名取川上流の茂庭地区の門野山囲遺跡・梨野Ａ遺跡・沼原Ａ遺跡などの丘陵地帯及び富沢遺跡周辺や郡山遺跡・南小泉遺跡・今泉遺跡・高田Ｂ遺跡などの沖積地に立地する遺跡で遺物が散見されるが、集落等の遺跡の実態は不明である。

弥生時代も晩期に引き続き集落の実態は不明な点が多い。前期段階は、富沢遺跡・南小泉遺跡・船渡前遺跡等の遺跡で土器などが発見されているだけであるが、中期には富沢遺跡や高田Ｂ遺跡で大規模な水田跡や農具などが発見され、農耕社会への急速な発展を伺うことができる。後期は、富沢遺跡における水田の規模は縮小するが、遺物の散布は市内各地で認められている。



No	遺跡名	種別	立地	時代	No	遺跡名	種別	立地	時代
1	欠ノ上Ⅱ遺跡	集落跡	自然堤防	弥生？～中世	22	神柵遺跡	官衙？・散布地	自然堤防	古代
2	欠ノ上Ⅰ遺跡	水田跡	後背湿地	古墳・古代・中世	23	中柵西遺跡	散布地	自然堤防	弥生・古墳・古代
3	欠ノ上Ⅲ遺跡	散布地	自然堤防	古墳～古代	24	砂押Ⅱ遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
4	富沢遺跡	散布地・水田跡	後背湿地	旧石器～縄文・弥生～近世	25	沖野城跡	城館跡	自然堤防	中世
5	長町六丁目遺跡	散布地	自然堤防	古代	26	河原越遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
6	長町南遺跡	散布地	自然堤防	古代	27	上屋敷遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
7	長町駅東遺跡	集落跡	自然堤防	弥生・古墳・古代	28	日辺遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
8	西台畑遺跡	集落跡	自然堤防	縄文・弥生～古代	29	日辺館跡	城館跡	自然堤防	中世
9	西台畑板碑群	板碑		中世	30	上飯田３丁目板碑	板碑		中世
10	長町駅裏古碑群	板碑		中世	31	高田Ａ遺跡	散布地	自然堤防	古代
11	八幡社古碑群	板碑		中世	32	梅塚古墳	円墳？	自然堤防	古墳？
12	郡山三丁目古碑群	板碑		中世	33	今泉遺跡	集落跡・城館跡	自然堤防	縄文～古代・中世～近世
13	諏訪社古碑群	板碑		中世	34	高田Ｂ遺跡	集落跡・水田跡	沖積平野	縄文～近世
14	郡山遺跡	集落跡・官衙跡	自然堤防	縄文～古墳・古代	35	大塚山古墳	円墳（径18m）	自然堤防	古墳
15	北目城跡	集落跡・城館跡	自然堤防	縄文～古代・中世～近世	36	中田神社裏遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
16	古峯神社板碑	板碑		中世	37	伊豆野権現古墳	円墳・板碑	自然堤防	古墳・中世
17	矢来遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代	38	中田神社板碑群	板碑		中世
18	北目古碑群	板碑		中世	39	安久東遺跡	集落跡・古墳	自然堤防	弥生～中世
19	穴田東古碑群	板碑		中世	40	中田三丁目板碑	板碑		中世
20	籠ノ瀬遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代	41	中田畑中遺跡	集落跡	自然堤防	古墳・古代
21	砂押Ⅰ遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代	42	落合観音堂古碑群	板碑		中世

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡（国土地理院１：25,000・仙台東南部を複製）

古墳時代になると、前期の戸ノ内遺跡・安久東遺跡の方形周溝墓に続き、南小泉遺跡のなかに全長110mの前方後円墳である遠見塚古墳が造営され、首長権の拡大した社会の成立を知ることができる。以後、中期には裏町古墳・兜塚古墳が、後期には一塚古墳や二塚古墳が作られ、欠ノ上Ⅱ遺跡の西方約1.5kmの笊川北岸には中期・後期を通じて大野田古墳群が形成されている。また、名取川を挟んで対岸の河岸上には大塚山古墳がある。終末期になると、富沢遺跡・郡山遺跡北側の広瀬川に沿った丘陵斜面に、向山横穴墓群と総称される墳墓群が作られる。古墳時代を通じ、笊川流域の自然堤防上には連続的に集落が形成されている。

古墳時代の終末、飛鳥時代と呼ばれる７世紀中頃から７世紀末にかけての時期、欠ノ上Ⅱ遺跡の北西1kmの郡山遺跡に東北最古の官衙（Ⅰ期官衙）が形成される。官衙は７世紀末から８世紀初頭に寺院を伴う施設に大きく改変（Ⅱ期官衙）され、多賀城造営以前の陸奥国府として機能していたことが考えられている。官衙域及び西台畑遺跡など周辺地域には官衙と同時期の竪穴住居跡も多数発見されている。

奈良・平安時代には、笊川流域の遺跡をはじめ、各自然堤防上に集落跡が形成され、その周辺の低地には水田跡が発見されている。また、神柵遺跡では官衙に関係すると考えられる掘立柱建物跡群が発見されている。

中世の遺跡としては、沖野城跡・今泉遺跡・王ノ壇遺跡などの城館があり、次第にその実態が明らかになりつつ

第２図　調査地点の位置と周辺の地形

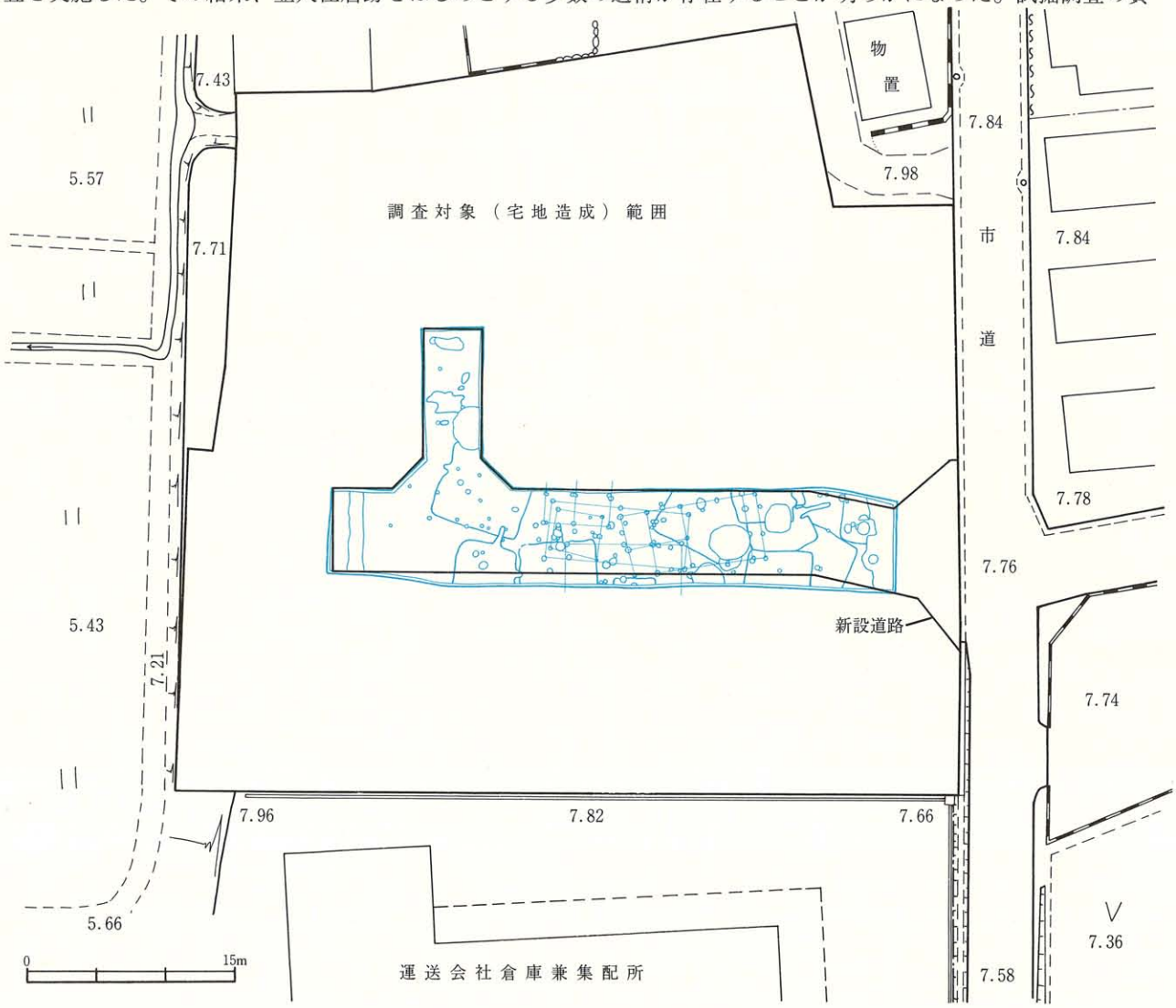
あるが、遺跡周辺では、郡山遺跡で掘立柱建物跡や欠ノ上Ⅰ遺跡で中世の水田跡が発見されている以外は、その状況は明らかでない。郡山遺跡から欠ノ上Ⅱ遺跡にかけての地区には多くの板碑が存在することから、同地区は中世においても活発な生活が営まれていたことをを伺い知ることができる。

中世末から近世初頭には北目城跡が造られ、天正年間までは粟野大膳の居城として機能し、その後関ケ原の戦いの前後から仙台城完成まで伊達政宗が居住している。北目城跡の廃城以降、欠ノ上Ⅱ遺跡周辺は城下及び都市部の近郊農業地帯として近年にいたっている。

第２章　調査の経緯と体制

１　調査に至る経緯と経過

本件に関る発掘調査は、平成10年６月17日仙台市若林区石名坂７番地　福仙興業株式会社　代表取締役加藤正文より、欠ノ上Ⅱ遺跡における宅地造成工事に関る協議書が提出されたことに起因する。本遺跡はこれまで発掘調査実績がなっかったことから、仙台市教育委員会は発掘届に基づき、原因者と協議のうえ平成10年８月25日に試掘調査を実施した。その結果、竪穴住居跡をはじめとする多数の遺構が存在することが明らかになった。試掘調査の資



第３図　調査対象範囲と調査区配置

料を基に、仙台市教育委員会と原因者のと再協議の結果、本調査を平成11年４月から約３ヶ月間実施することで協議が成立した。

協議を基に平成11年４月６日に「発掘調査委託契約」を締結し、４月７日から６月30日まで調査を実施した。発掘調査にあたっては、調査事務所関係・表土排除業務関係・測量基準点設置の各業務については調査委託者の直接負担として調査準備の円滑化を図った。

調査途中、遺構の検出された面（Ⅱ層上部）より下位の地層において遺構・遺物が存在するかどうかの確認のため、深掘り調査を実施した。深掘り調査区は、耕作による削平により残存遺構の希薄な調査区西部において、東西５m・南北６m・約30m²の範囲とした。その結果、現地表面から約1.5m、遺構確認面から約１m下がったⅢ層中およびⅣ層上面において縄文の施された数点の土器片が発見された。またⅤ層以下からは、遺構・遺物は発見されず、Ⅶ層下部に至ると水が染み出す状況となった。

深掘り調査の状況から、Ⅲ層については、遺物包含層の可能性が高いと考えられたので、調査区中央部から東部の地域では、SK－３・４・５土坑、SE－１井戸跡等の掘削深度が深い遺構の壁面で、同層における遺物の包含状況を観察した。しかし、遺構壁面では遺物を発見することができなかった。深掘り調査区の希薄な遺物散布状況と、遺構壁面の観察結果から、本調査区におけるⅢ層に包含される遺物は少量で、その分布範囲も限られた狭い範囲と判断されたので、調査区全面に及ぶⅢ層の調査は実施しないこととした。

SE－１井戸跡は、現地表面から約2.5m、遺構確認面から約1.8mまで人力により調査を実施したが、石組を有する遺構で崩落の危険があるため、そこから下は重機を使用して調査を行った。重機では地表下約3.5m、標高6.2mまで下げたが、重機の作業限界と安全面からそれ以下の調査を断念し、調査記録も写真撮影だけに留めた。また、SK－３・４・５土坑も、確認面から約１m下げると、降水により水が溜まるたびに壁面が著しい崩落を起こしたので、確認面から約1.5mまで下げたところで調査を打ち切った。

原因者の協力を得て、野外調査は予定期日の６月30日に終了した。

2　調査要項

1）遺　跡　名　　欠ノ上Ⅱ遺跡
2）所　在　地　　仙台市太白区郡山字欠ノ上２－10
3）調査理由　　宅地造成
4）調査面積　　340m²
5）調査期間　　平成11年４月12日～６月30日
6）調査主体　　仙台市教育委員会
7）調査担当　　仙台市教育委員会文化財課調査第二係
　　課長　大越裕光　調査第二係長　結城慎一
　　調査担当職員　工藤哲司　竹田幸司
8）調査参加者　　青木吉次　浅見禮子　阿部みのる　伊藤清子　伊深みつ子　小野寺達重　加嶋みえ子
　　斎藤慶子　庄子弘子　須賀栄子　菅井民子　高橋美香　竹森光子　田中さと子　千田タイ子
　　畠中真知子　三浦貢　山田千代子　横尾由記子
9）整理参加者　　相沢せい子　安部文子　今野順子　庄子善昭　菅井民子　杉舩比佐子　高橋朝子　高橋美香
　　中里とわ子　深瀬嶺子

第３章　調査概要

1　遺跡と調査区の位置

欠ノ上Ⅱ遺跡は先に述べたように、南北150m・東西200mの範囲で広がり、名取川・広瀬川・笊川の形成した標高約８mの自然堤防に立地している。遺跡の西側から南側にかけては、幅80m、自然堤防面との比高差約2.5mの旧河道による急斜面により区画され、北側と東側は旧河道または後背湿地へと緩やかに移行する。旧河道を挟んだ西側の後背湿地に立地する欠ノ上Ⅰ遺跡では、平安時代後半以降の水田跡が２面検出されている。また、北側に近接する欠ノ上Ⅲ遺跡からは、土師器・須恵器が採集されている。

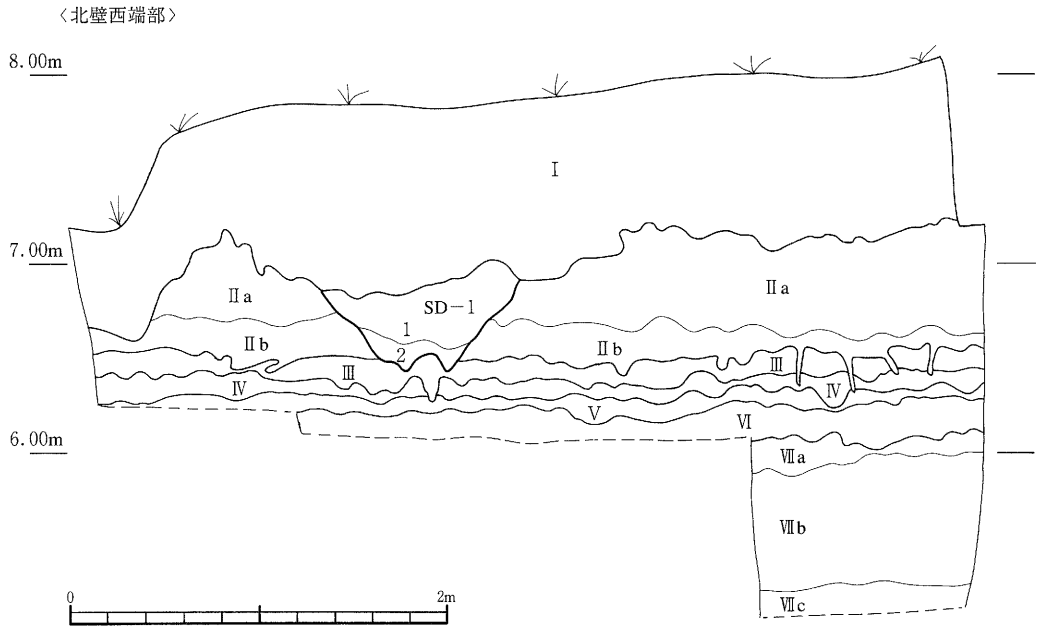
調査地点は、遺跡の北西部に位置する。調査区は、宅地造成に伴う道路に合わせて、自然堤防の中央部から自然堤防の西端にかけて東西長40.5m・南北幅約７mと、この調査区の西側で北側に幅約4.5m・長さ12mに渡って北側にＴ字状に交差する部分からなる。約340m²を調査した。地目は畑地である。遺構面は耕作によりかなり削平を受けている。特に自然堤防の肩部にあたる調査区西部の削平が著しい。

2　基本層位と発見遺構の概要

1）基本層位

本調査においては、調査区西端部の深掘り調査の状況から基本層位を大別７層・細別10層に分けて調査を実施した。

Ⅰ　層　暗褐色のシルト質粘土からなる耕作土層である。層厚は60～90cmあり、西部ほど厚い。土色の濃淡により上下２層に細分が可能であるが、両層ともビニールシートの断裂片を含む新しい耕作土である。Ⅱａ層上部を削平している。土層中には耕作により遺構から巻き上げられた遺物が含まれている。



土層No	土　色	土　質	備　考
Ⅰ	10YR ¾ 暗褐色	シルト質粘土	耕　作　土
SD-1-1	10YR ¾ 褐　色	シルト	下部に黄褐色土粒を多く含む
SD-1-2	10YR ¾ 暗褐色	シルト質粘土	褐色土粒を含む
Ⅱa	10YR ⅝ 黄褐色	シルト質粘土	浅黄色シルトの薄層を縞状に含む
Ⅱb	10YR ⅝ にぶい黄褐色	シルト質粘土	暗褐色土粒を霜降状に含む・浅黄色シルトを縞状及びブロック状に含む
Ⅲ	10YR ⅔ 黒褐色	粘　土	土器片(縄文あり)を含む・上面にひび割れ痕あり

土層No	土　色	土　質	備　考
Ⅳ	10YR ¾ 暗褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色粘土のブロックを含む、炭化物粒を少量含む
Ⅴ	10YR ½ 灰黄褐色	粘　土	酸化鉄を霜降状に含む、炭化物を粒状に少量含む
Ⅵ	10YR ⅝ にぶい黄褐色	シルト質粘土	酸化鉄を霜降状に含む
Ⅶa	10YR ⅝ 黄褐色	砂質粘土	酸化鉄を斑状に含む
Ⅶb	10YR ¼ 褐　色	砂	層中央部は幅10～20cmで、酸化したように赤変する
Ⅶc	10YR ⅝ にぶい黄褐色	砂	酸化鉄を斑状に含む

第４図　基本層断面図

Ⅱａ層　黄褐色のシルト質粘土を基調とする土層で、層厚は40～60cm。現存の上面で７世紀後半以降の遺構が検出されている。層中には浅黄色シルトの薄い層を縞状に含んでいる。含有物の状況により細分も可能である。

Ⅱｂ層　にぶい黄褐色のシルト質粘土を基調とする土層で、層厚は、20cm前後。暗褐色土粒を霜降状に含むほか、浅黄色シルトを縞状または所によってブロック状に含んでいる。

Ⅱａ層・Ⅱｂ層とも、調査区の場所によって土色・含有物に若干の相違が観察される。

Ⅲ　層　黒褐色の粘土層で、層厚は10～15cm前後。層中から縄文の付された土器片が数点出土している。上面では亀甲状の干割れが観察され、クラック内にはⅡｂ層が落ち込んでいる。底面には細かな凹凸が認められるが、水田耕作が行われたような下層の巻き上げは観察されない。

Ⅳ　層　暗褐色のシルト質粘土層で、層厚は５～10cm。にぶい黄褐色粘土のブロックや炭化物粒を含んでいる。上面から縄文の付された土器片が出土している。

Ⅴ　層　灰黄褐色粘土を基調とする土層で、層厚は５～15cm。酸化鉄を霜降状に含む。また炭化物を粒状に少量含んでいる。

Ⅵ　層　にぶい黄褐色のシルト質粘土層で、層厚は15～25cm。酸化鉄を霜降状に含む。

Ⅶａ層　黄褐色の砂質粘土で、層厚は10～20cm。酸化鉄を斑状に含む。

Ⅶｂ層　褐色の砂層で、層厚は約65cm。層中央部は幅10～20cmの範囲が酸化したようにの赤く変色している。

Ⅶｃ層　にぶい黄褐色の砂層で、層厚は10cm以上である。酸化鉄を斑状ないし雲状に含む。

Ⅶｂ層・Ⅶｃ層からは滲むような湧水がある。

２）発見遺構の概要

上述のように、本調査においてはⅡａ層で遺構が検出され、Ⅲ層及びⅣ層上面から土器片が数点出土している。

Ⅱａ層上面において検出された遺構には、竪穴住居跡11軒（竪穴遺構を含む）・掘立柱建物跡５棟を含むピット125個・井戸跡１基・土坑10基（井戸跡の可能性のあるもの３基を含む）・溝跡２条がある。遺構間で切り合いがある場合、いずれの場合も掘立柱建物跡・井戸跡・土坑・溝跡は、竪穴住居跡よりも新しい。このことから欠ノ上Ⅱ遺跡で検出された遺構ににについては、第５図①・②のように、掘立柱建物跡・井戸跡・土坑・溝跡などの遺構が組み合わさって構成される時期と、主に竪穴住居跡だけで構成される時期の大きく２時期の変遷が考えられる。前者の時期は、後述のように出土遺物が少ないために時期を特定できるものは少ないが、出土遺物全体としては中世から近世の長期に渡る遺構群である。竪穴住居跡の時期は、古墳時代終末期頃から奈良・平安時代である。

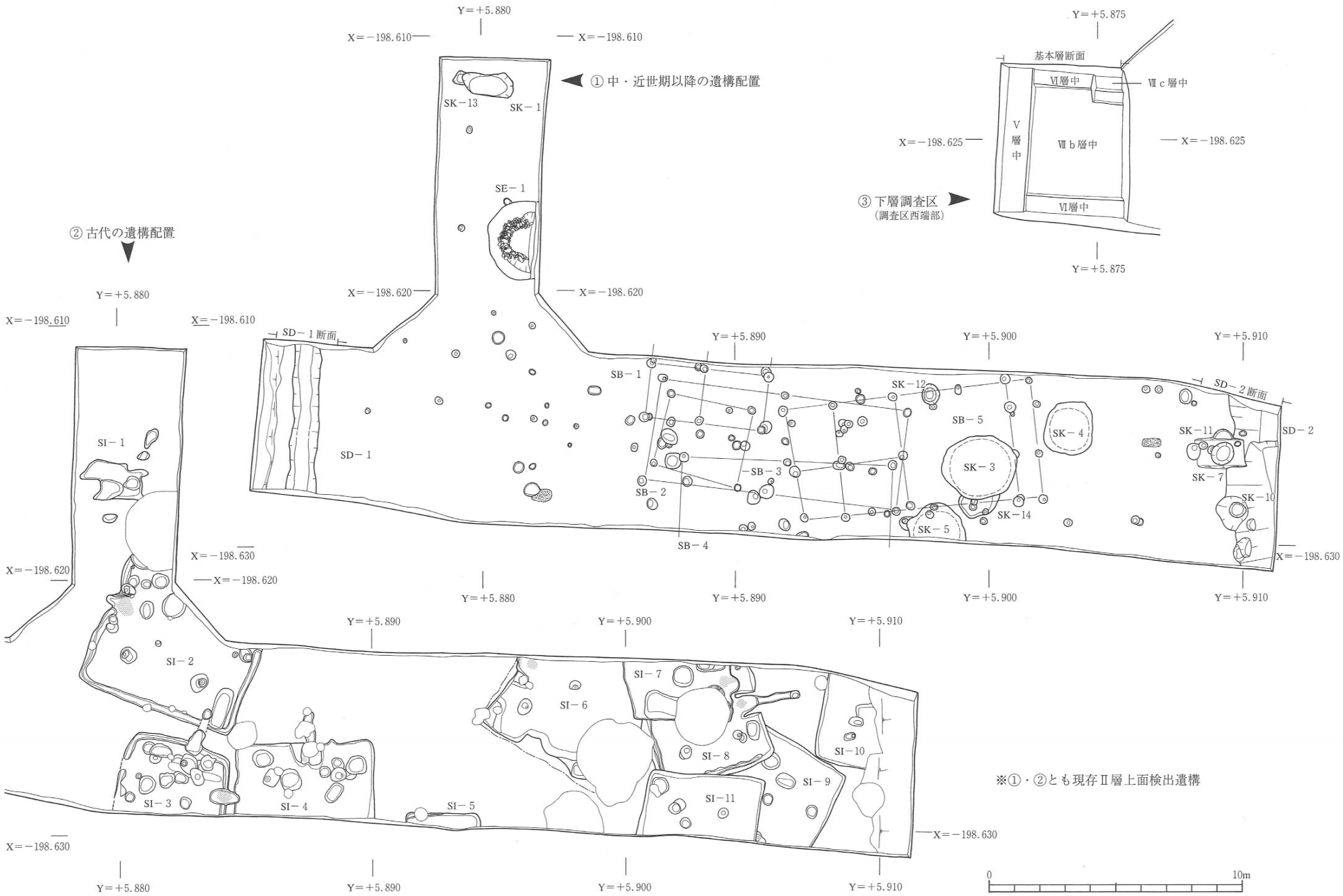
Ⅲ層中及びⅣ層上面では土器片が数点出土しが、これに伴う遺構は発見されなかった。

第４章　発見遺構と出土遺物

１　掘立柱建物跡

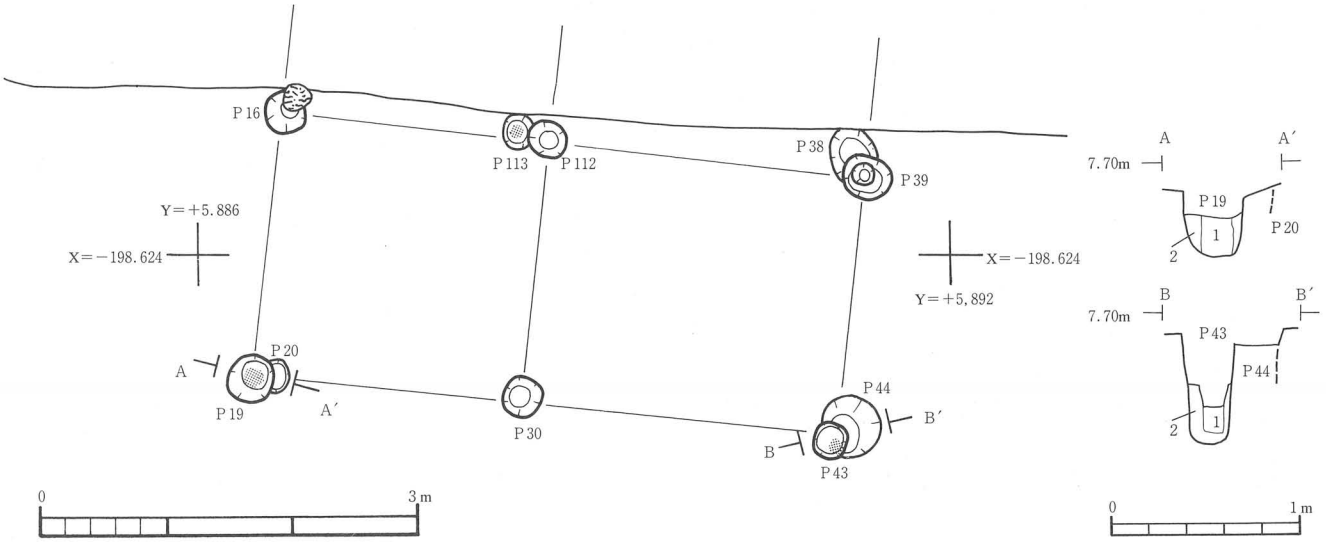
掘立柱建物跡は、ピットの多数検出された調査区の中央付近で、５棟分を推定復元した。調査区の幅が狭いので、全容の不明なものもある。また、推定復元した５棟以外に、柱痕跡の検出されているピットも存在することから、他にも建物が存在した可能性もある。

SB－１掘立柱建物跡　東西２間・南北１間分が検出されたが、北側にのびる可能性がある。検出部の東西長は4.7m（柱間寸法は西から220cm・250cm）、南北長は2.1m（東列）である。建物の方向は、南列でＥ－６°－Ｓ、西列でＮ－６°－Ｅである。SB－２・３掘立柱建物跡とプランが重複しているが、遺構には直接の切り合いは無く、前後関係は不明である。またSB－４・５掘立柱建物跡についても、近接した位置関係にあることから同時に存在し



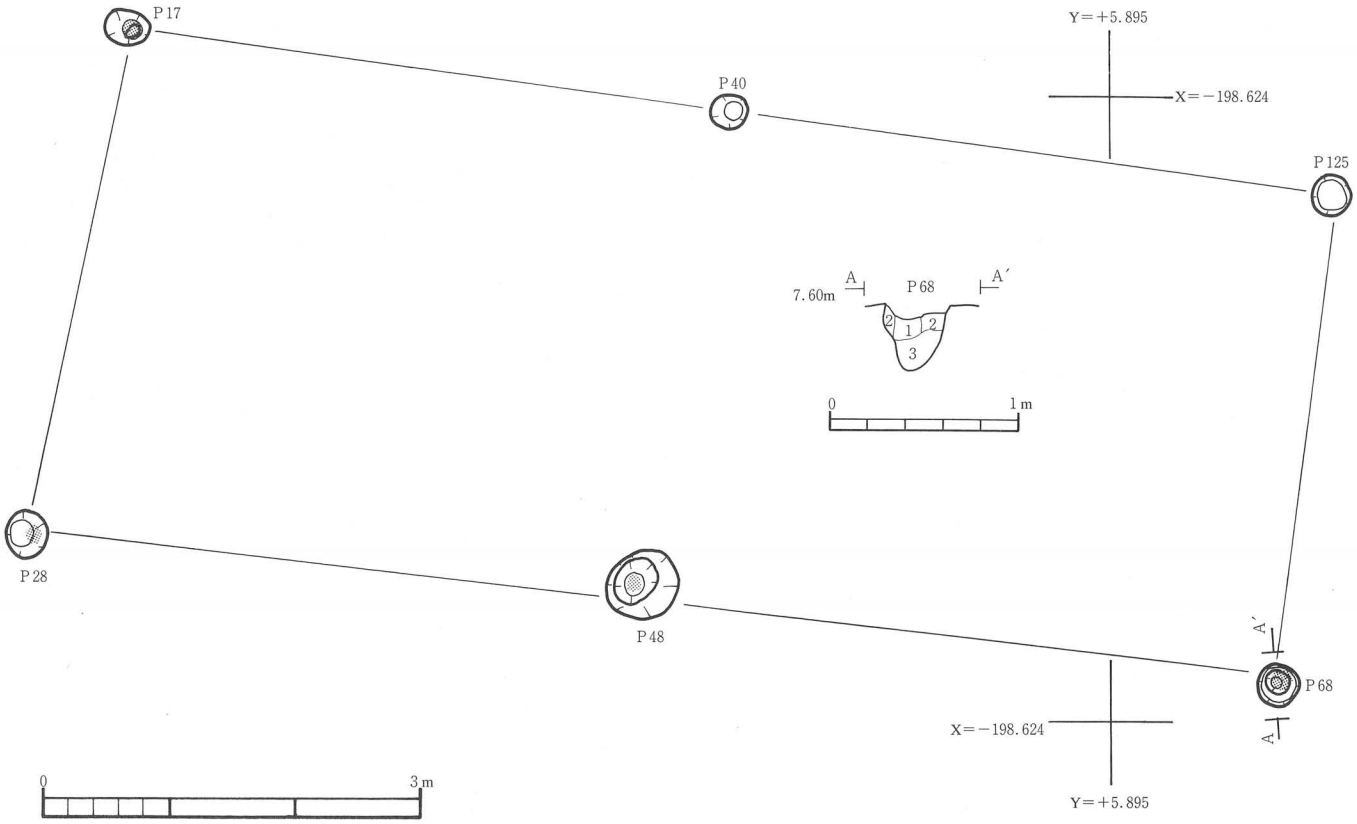
※①・②とも現存Ⅱ層上面検出遺構

第5図　遺　構　配　置　図



ピットNo	P16	P112	P39	P19		P30	P43	
部　位	掘り方	掘り方	掘り方	掘り方2	柱痕跡1	掘り方	掘り方2	柱痕跡1
形　状	円　形	円　形	円　形	円　形	円　形	円　形	円　形	円　形
大きさ	34×30cm以上	31×26cm	37×36cm	37×35cm	16×15cm	32×30cm	28×26cm	12×10cm
深　さ	17.5cm	30cm	44cm	37cm	37cm	20.5cm	41cm	41cm
土　色	10YR3/3 暗褐色	10YR3/4 暗褐色	10YR3/3 暗褐色	10YR5/4 褐　色	10YR3/3 暗褐色	10YR5/4 にぶい黄褐色	10YR6/3 にぶい黄褐色	10YR3/3 暗褐色
土　質	シルト	シルト	シルト質粘土	粘土質シルト	粘　土	粘土質シルト	粘　土	粘　土
備　考	明黄褐色土のブロックを含む	黄褐色土を粒状に含む	明黄褐色土・暗褐色土のブロックを含む	明黄褐色土・炭化物焼土を含む	底面に浅黄色粘土あり	明黄褐色土の小ブロックを多量に含む	明黄褐色土のブロックを含む	

第６図　SB－１掘立柱建物跡

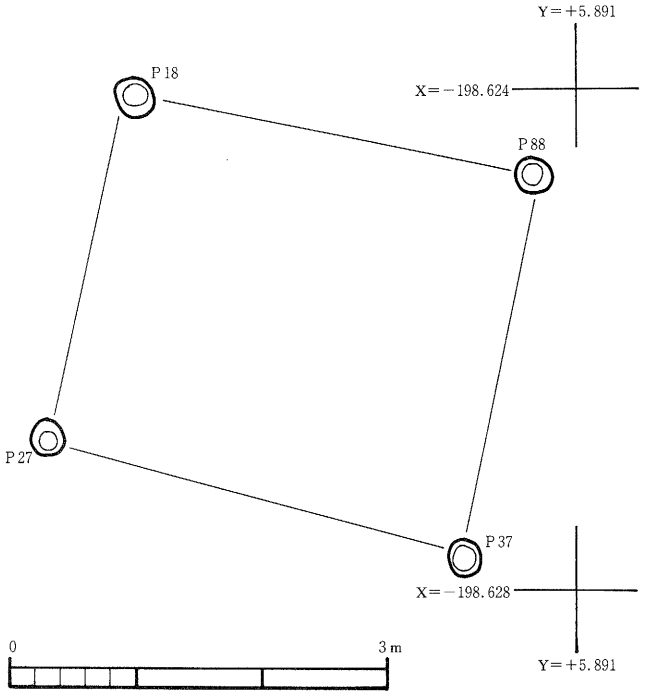


第７図　SB－２掘立柱建物跡

SB－２掘立柱建物跡

ピットNo	P17		P40		P125	P28	
部　位	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	掘り方	柱痕跡
形　状	楕円形	円　形	円　形	?	円　形	楕円形	円　形
大きさ	38×28cm	16×14cm	30×28cm	?	32×32cm	40×33cm	14×13cm
深　さ	16cm	11cm	12cm	?	20cm	41.5cm	41.5cm
土　色	10YR4/4 褐　色	10YR3/4 暗褐色	10YR5/6 明黄褐色	10YR3/3 暗褐色	10YR4/3 にぶい黄褐色	10YR4/4 褐　色	10YR3/2 黒褐色
土　質	シルト質粘土	粘　土	粘　土	粘　土	粘土質シルト	粘土質シルト	粘　土
備　考	明黄褐色土の小ブロックを多く含む	根石あり	暗褐色土の小ブロックを少量含む		明黄褐色土・炭化物を含む	明黄褐色土の小ブロックを少量含む	

ピットNo	P48		P68		
部　位	掘り方	柱痕跡	掘り方２	掘り方３	柱痕跡１
形　状	略円形	円　形	円　形	－	円　形
大きさ	61×52cm	10×10cm	33×30cm	－	16×15cm
深　さ	58cm	58cm	31cm	－	37.5cm
土　色	10YR3/3 暗褐色	10YR3/3 暗褐色	10YR3/3 暗褐色	10YR3/3 暗褐色	10YR3/2 黒褐色
土　質	粘土質シルト	粘　土	粘土質シルト	粘土質シルト	粘　土
備　考	明黄褐色土及び褐色のブロックを多く含む	炭化物片を含む	明黄褐色土の小ブロックを多く含む	明黄褐色土を帯状に含む	



ピットNo	P18	P88
部　位	掘り方	掘り方
形　状	略円形	円　形
大きさ	32×28cm	32×27cm
深　さ	26cm	9.5cm
土　色	10YR5/3 にぶい黄褐色	10YR5/6 明黄褐色
土　質	粘土質シルト	粘　土
備　考	明黄褐色土のブロック・炭化物を含む	暗褐色土の小ブロックを少量含む

ピットNo	P27	P37
部　位	掘り方	掘り方
形　状	円　形	円　形
大きさ	28×26cm	29×24cm
深　さ	26cm	11cm
土　色	10YR4/4 褐　色	10YR4/3 にぶい黄褐色
土　質	粘土質シルト	粘土質シルト
備　考	明黄褐色土の小ブロック・炭化物・焼土を含む	明黄褐色土の小ブロック・炭化物・焼土を含む

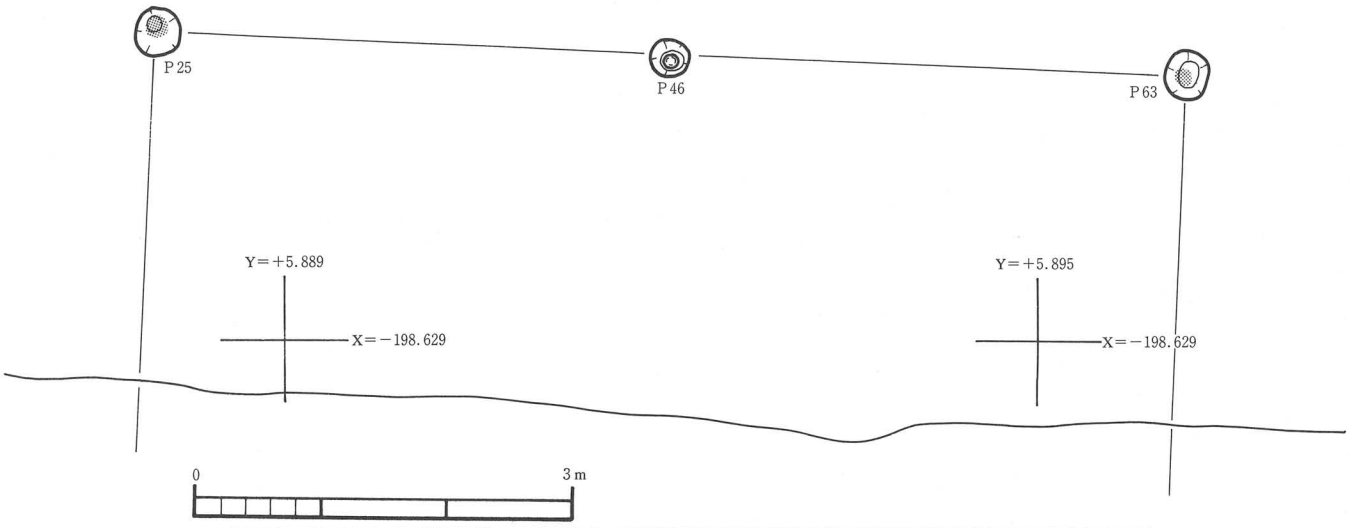
第８図　SB－３掘立柱建物跡

た可能性は低いと考えられる。柱穴（掘り方）は、直径28～37cmの円形で、柱痕跡は直径12～16cmの円形である。遺物は、P.16から須恵器片１点・土師器片２点、P.19から土師器片４点、P.39から土師器片５点、P.43から須恵器片４点、P.112から刀子の破片と考えられる鉄製品が１点出土している。

P.112・39・19・43は、それぞれ対応する位置に、これに切られる状況でP.113・38・20・44が存在していることから、SB－１掘立柱建物跡は建替えられている可能性も考えられる。

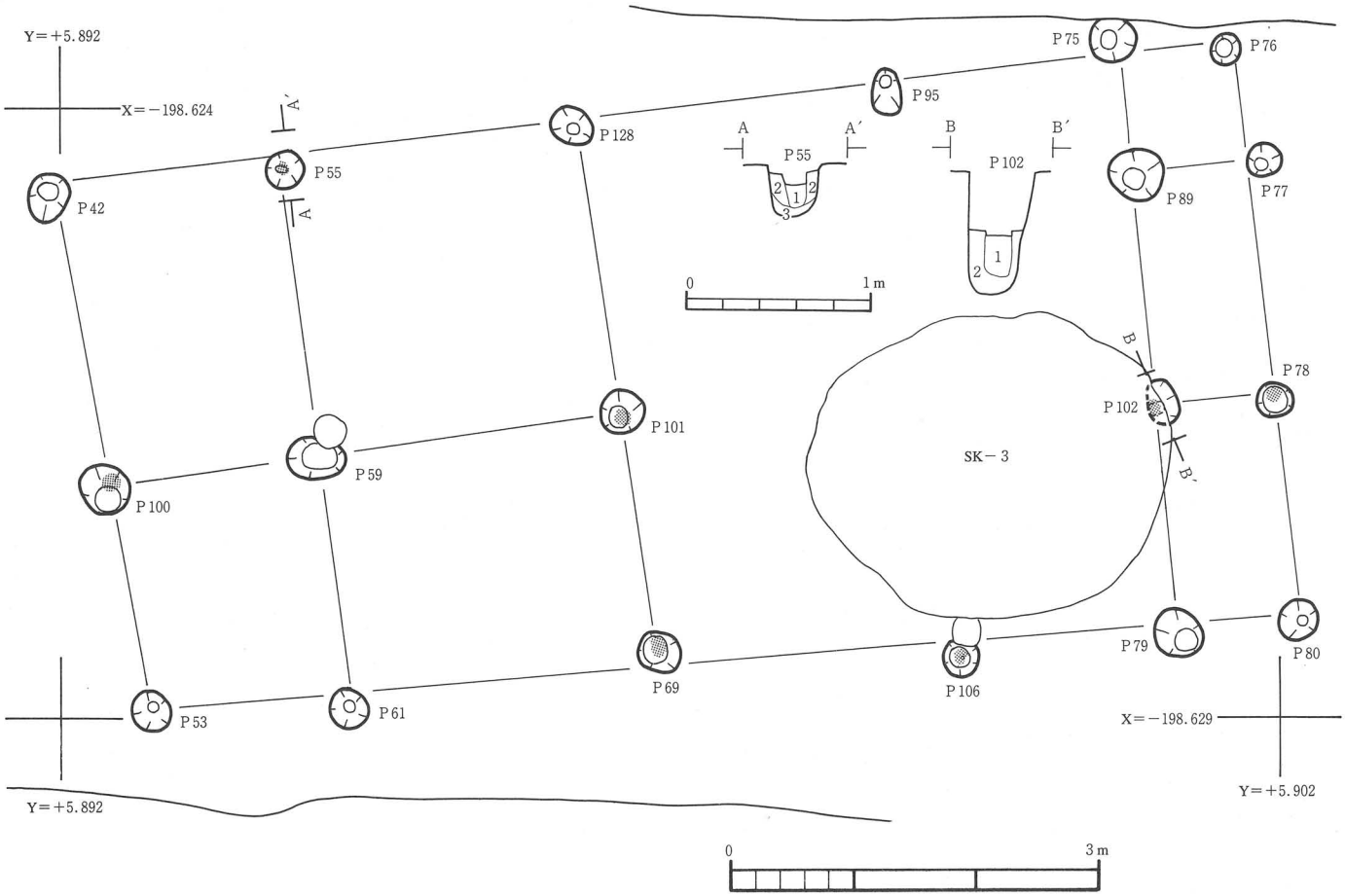
SB－２掘立柱建物跡　東西２間・南北１間の南北棟建物である。桁行総長は10.1m（柱間寸法は南列で西から485cm・525cm）、梁行総長は4.1m（東列）である。建物の方向は、南列でE－6°－S、（西列はN－6°－E）である。柱穴は、直径32～61cmの円形で、柱痕跡は直径10～16cmの円形である。遺物は、P.17から土師器片２点、P.48から土師器片13点が出土している。

SB－３掘立柱建物跡　東西１間・南北１間の比較的小規模な建物である。東西長は3.4m（南列）、南北長は3.1m（東列）である。建物の方向は、南列でE－15°－S、東列でN－11°－Eである。柱穴は、直径30cm前後の円形で



ピットNo	P25		P46	P63	
部　位	掘り方	柱痕跡	掘り方	掘り方	柱痕跡
形　状	円　形	円　形	略円形	略円形	円　形
大きさ	36×36cm	17×16cm	30×26cm	40×34cm	13×12cm
深　さ	41cm	45cm	20cm	51.5cm	51.5cm
土　色	10YR4/3 にぶい黄褐色	－	10YR5/3 にぶい黄褐色	10YR4/3 にぶい黄褐色	10YR7/4 にぶい黄橙色
土　質	粘土質シルト	－	粘土質シルト	粘　土	粘土質シルト
備　考	明黄褐色土のブロック炭化物・焼土を含む	－	明黄褐色土の小ブロックを少量含む・根石	にぶい黄橙色土の小ブロックを含む	

第９図　SB－４掘立柱建物跡



第10図　SB－５掘立柱建物跡

ピットNo	P42	P55			P128	P95
部　位	掘り方	掘り方2	掘り方3	柱痕跡1	掘り方	掘り方
形　状	楕円形	円　形	－	円　形	楕円形	隅丸長方形
大きさ	40×34cm	32×32cm	－	13×12cm	38×30cm	35×24cm
深　さ	38.5cm	37cm	－	33cm	22cm	29.5cm
土　色	10YR2/2 黒褐色	10YR3/2 黒褐色	10YR3/3 暗褐色	10YR3/4 褐　色	2.5Y4/3 オリーブ褐色	10YR3/2 黒褐色
土　質	シルト質粘土	シルト質粘土	粘土質シルト	粘　土	粘　土	シルト質粘土
備　考	明黄褐色土及び暗褐色土のブロックを含む	明黄褐色土の小ブロックを含む	炭化物・焼土・黄褐色土を帯状に含む		明黄褐色土の小ブロックを多く含む	焼土・炭化物・にぶい黄褐色土を粒状に含む

ピットNo	P75	P76	P89	P77	P100		P59
部　位	掘り方	掘り方	掘り方	掘り方	掘り方	柱痕跡	掘り方
形　状	円　形	円　形	略円形	円　形	略円形	円　形	楕円形
大きさ	38×36cm	26×24cm	44×40cm	28×27cm	44×40cm	14×14cm	48×32cm
深　さ	49.5cm	13.5cm	35.5cm	24cm	47cm	47cm	12cm
土　色	10YR2/3 黒褐色	10YR3/3 暗褐色	10YR3/3 暗褐色	10YR3/2 黒褐色	10YR 4/4 褐　色	10YR3/3 暗褐色	10YR3/3 暗褐色
土　質	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土	粘土質シルト	粘　土	粘　土
備　考	黄褐色土の小ブロックを少量含む	褐色粘土のブロックを含む	褐色土ブロック・炭化物粒を含む	黄褐色土のブロックを少量含む	明黄褐色土・黒褐色土のブロックを含む		にぶい黄橙

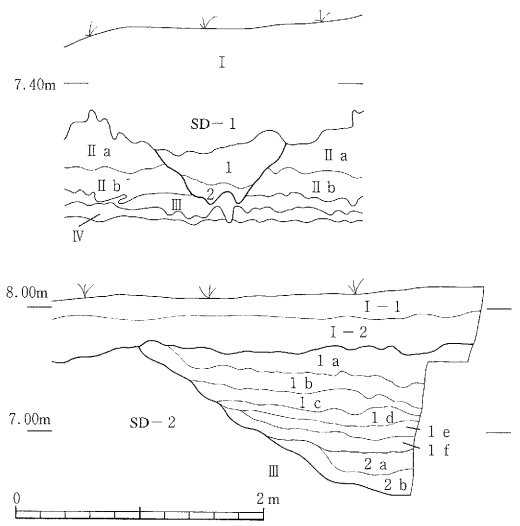
ピットNo	P101		P102		P78		P53
部　位	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方
形　状	円　形	円　形	－	円形？	円　形	円　形	円　形
大きさ	36×35cm	14×14cm	(36) × (26) cm	15×（15？）cm	28×28cm	11×11cm	32×32cm
深　さ	38.5cm	38.5cm	69.5cm	61cm	25cm	25cm	37.5cm
土　色	10YR 4/4 褐　色	10YR3/3 暗褐色	10YR 4/4 褐　色	10YR3/3 暗褐色	10YR2/3 黒褐色	10YR3/3 暗褐色	10YR3/2 黒褐色
土　質	粘土質シルト	粘　土	粘土質シルト	粘　土	シルト質粘土	シルト質粘土	シルト質粘土
備　考	暗褐色土のブロックを多量に含む	炭化物・焼土を含む	暗褐色土粒を少量含む		褐色土のブロックを含む	底面に浅黄色粘土あり	明黄褐色土のブロックを少量含む

ピットNo	P61		P69		P106		P79	P80
部　位	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	掘り方
形　状	円　形	－	略円形	楕円形	円　形	円　形	略円形	円　形
大きさ	32×29cm	－	35×33cm	18×15cm	28×28cm	11×11cm	40×38cm	36×33cm
深　さ	34.5cm	－	54cm	54cm	39.5cm	39.5cm	50.5cm	15cm
土　色	10YR4/3 にぶい黄褐色	10YR3/3 暗褐色	10YR3/3 暗褐色	10YR7/6 明黄褐色	10YR4/3 にぶい黄褐色	10YR6/6 明黄褐色	10YR3/2 黒褐色	10YR2/2 黒褐色
土　質	粘土質シルト	粘　土	シルト質粘土	粘　土	シルト質粘土	粘　土	シルト質粘土	シルト質粘土
備　考	にぶい黄橙色土のブロックを含む		明黄褐色土のブロックを多く含む		暗褐色土の小ブロックを多量に含む		褐色土の小ブロックを多量に含む	褐色土を霜降状に含む

ある。柱痕跡は検出されていない。遺物は、P.27から土師器片が６点出土しているだけである。

SB－４掘立柱建物跡　東西410cmの等間隔で直線的に並び、柱痕跡も検出されたことからSB－４建物跡を想定した。南側の調査区外に展開すると考えられ、東側もSK－３土坑の位置までのびている可能性もある。東西長は8.2mで、柱列の方向はE－２°－Sである。柱穴は、直径30～40cmの円形で、柱痕跡は直径13～17cmの円形である。遺物は、P.25から土師器片４点、P.63から須恵器片２点・羽口片１点、鉄滓１点が出土している。

SB－５掘立柱建物跡　東西桁行４間・南北梁行２間（東辺は３間）の変則的な南北棟建物で、東面に廂が付く。桁行総長は北列で8.85m（柱間寸法は西から192cm・235cm・258cm・180cm）、梁行総長は西列で4.3m（柱間寸法は北から245cm・185cm）、東列で4.85cm（柱間寸法は北から115cm・190cm・180cm）である。建物の方向は、南列でE－６°－S、（西列はN－６°－E）である。西から２間分は中央に柄柱と考えられる柱穴がある。東側２間分の中央はSK－３土坑に切られているので総柱の建物であったかどうかは不明である。柱穴は、直径28～44cmの円形を基調とし、柱痕跡は直径11～18cmまで不均一な円形である。遺物は、P.42から土師器片５点、P.59から須恵器片２点・土師器片１点、P.69から須恵器片２点・土師器片２点、P.75から須恵器片１点・土師器片４点、P.76から土師器片１点、P.77から土師器片６点、P.78から土師器片７点、P.80から土師器片が12点、P.89から須恵器片３点・土師器片７点、P.95から陶器片１点・土師器片５点、P.100から土師器片４点、P.101から土師器片４点・羽口片１点・鉄滓１点、P.102から須恵器片１点・土師器片７点、P.106から須恵器片１点・土師器片２点が出土している。出土遺物のうち、P.95から出土した陶器片は、唐津産の刷毛目文の碗または皿（図版17―17）で、17世紀後半から18世紀前半頃の年代に位置付けられ、SB―５掘立柱建物跡の年代と近い時期のものと考えられる。



〈SD－１〉

土層No	土　色	土　質	備　考
SD－1・1	10YR 3/4 褐　色	シルト	下部に黄褐色土粒を多く含む
SD－1・2	10YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	褐色土粒を含む
Ⅰ	10YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	畑耕作土
Ⅱa	10YR 5/6 黄褐色	シルト質粘土	浅黄色シルトの薄層を縞状に含む
Ⅱb	10YR 5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	暗褐色土粒を霜降状に含む・浅黄色シルトを縞状及びブロック状に含む
Ⅲ	10YR 3/3 黒褐色	粘　土	土器片（縄文あり）を含む
Ⅳ	10YR 4/2 灰黄褐色	粘　土	酸化鉄を霜降状に含む・炭化物粒を少量含む

〈SD－２〉

土層No	土　色	土　質	備　考	
Ⅰ－1	10YR 3/4 暗褐色	粘土質シルト	ビニールを含む	畑耕作土
Ⅰ－2	10YR 3/4 暗褐色	粘土質シルト	ビニールを含む・炭化物を少量含む	畑耕作土
1a	10YR 3/4 暗褐色	シルト	鉄滓を含む	
1b	10YR 4/6 黄褐色	シルト	黄褐色土をブロック状に含む	
1c	10YR 3/4 暗褐色	粘土質シルト		
1d	10YR 5/6 褐　色	粘土質シルト	黄褐色土を少量ブロック状に含む	
1e	10YR 3/4 暗褐色	粘土質シルト		
1f	10YR 5/6 褐　色	粘土質シルト	黄褐色土をブロック状に少量含む	
2a	10YR 3/4 暗褐色	粘土質シルト		グライ化
2b	10YR 5/6 褐　色	粘土質シルト	黄褐色土をブロック状に含む	グライ化

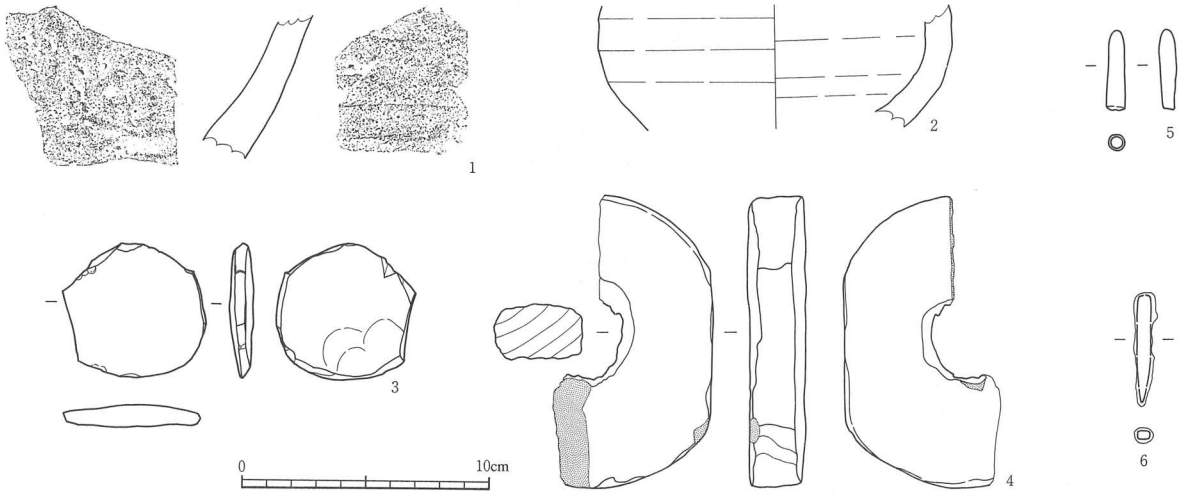
第11図　溝 跡 断 面 図

2　溝　跡

溝跡は、調査区の西端と東端で１条ずつ２条が検出されている。

SD－１溝跡　調査区西端の自然堤防の肩部から斜面にかかるところで検出された。上面は耕作によってかなり削平を受けている。検出面での幅は上面で100cm前後で、方向はＮ－３°－Ｅで直線的にのびている。断面形は逆台形を呈し、深さ60cm・底面幅40～50cmを測る。底面の北端と南端とでは、高低差は認められない。堆積土は上部が褐色シルト、下部が暗褐色シルト質粘土からなる自然堆積層である。両層から出土した遺物は、ロクロ使用を含む土師器片106点、須恵器片８点があるが、そのほとんどが摩滅した小破片であることから、これらの遺物は遺構の時期を反映しているものではないと考えられる。

SD－２溝跡　調査区東端で、西岸の上端から底面の一部が検出された。ＳＩ－11竪穴住居跡を切り、溝の堆積土除去後にSK－10土坑を検出した。検出部分の最大幅は約２mである。断面形は台形を呈するものと考えられる。溝底面の北側には、溝を横断する方向で段差があり、南側が20cm前後低くなっている。溝の検出面からの深さは、段の北側は95cm・南側は122cmである。溝の方向は不明確であるが、Ｎ－５°－Ｗ前後である。SK－10土坑より南側の西岸斜面には、壁面が２地点・３段に抉られている部分がある。各段は略平坦になっており、昇り降りの際の足場であった可能性がある。堆積土は、人為的堆積層と考えられる黄褐色土ブロックを含む褐色の粘土質シルトないしシルト層と、自然堆積層と観察される暗褐色の粘土質シルトないしシルト層が交互に堆積している。層下部はグライ化している。遺物は、第12図及び図版17に図示した陶器片４点・磁器片２点・木製品１点・須恵器の甕の破片を転用した円盤１点のほか、各層から多数の土師器片と須恵器片が出土している。Ｉ－７は体部外面に横位の筋目をもち内外面に鉄釉の施された碗または壺の破片、Ｉ－８は県内産と考えられる中世陶器甕の破片、Ｉ－９は鉢型の瓦質陶器片、Ｉ－10は灰白色の釉薬施された長胴の壺の破片である。Ｊ－２は肥前産染付の皿の破片、Ｊ－３は摺絵の碗または皿の破片である。Ｌ－１は、長径約11.5cm・厚さ2.2cmの楕円形を呈する円盤状の木製品で、中央で縦に半分に折れている。残存する木目方向の側面は直線的に加工されている。中央には直径３cmの円孔が明けられている。図示した遺物は、SD－２溝跡の１層から出土したもので、掘削時の年代を示すものではないが、図示しなかった土師器・須恵器を含めると遺物の年代は古代から中世・近世にまで及ぶ。この中でＪ－２の肥前産染付皿は18世紀以降、Ｊ－３の摺絵磁器は19世紀後半以降の製品と考えられることから、この遺構の年代については近世以降と考えられる。

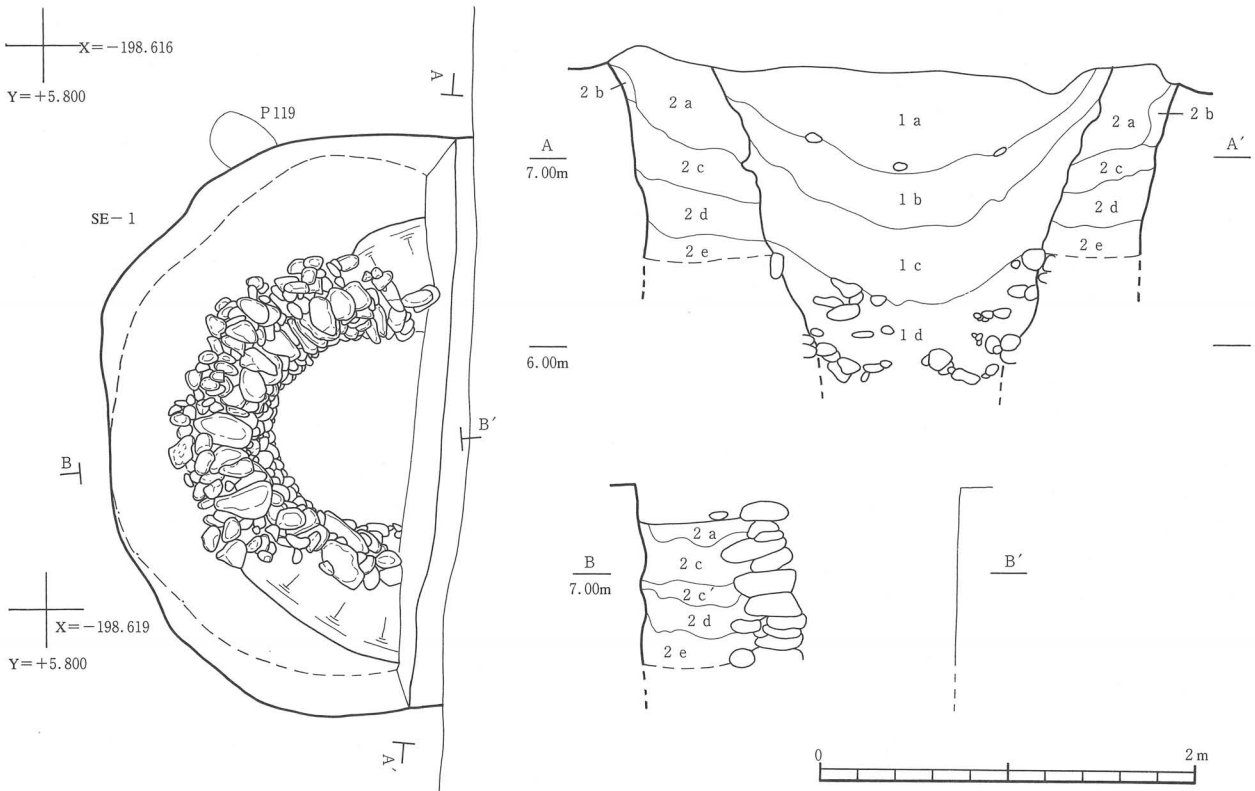


(cm・g)

番号	登録番号	種　別	器　種	遺構番号	出土位置	取上番号	器高	口径	底径	外　　面	内　　面	写真図版
1	Ｉ－８	陶器	甕	SD－２	１層		(5.8)			ナデ	ナデ　　県内産	17－11
2	Ｉ－９	瓦質陶器	鉢？	SD－２	１層		(5.0)			ロクロ・下半ケズリ	ロクロ	17－10

番号	登録番号	種　別	器　種	遺構番号	出土位置	取上番号	全長	幅	厚さ	重量	特　　徴	写真図版
3	Ｐ－８	土製品	円盤	SD－２	１層		5.9	5.7	0.9	27.0	須恵器甕の転用	19－11
4	Ｌ－１	木製品	不明	SD－２	１層		(12.8)	(6.3)	2.2		円盤状・中心に直径３cmの円孔あり	18－９
5	Ｎ－10	銅製品	不明	SD－２	１層		(3.2)	(0.8)	(0.7)	9.5	中空	20－21
6	Ｎ－11	鉄製品	不明	SD－２	１層		(4.6)	(1.0)	(0.7)	(4.0)	棒状	20－23

第12図　SD－２溝跡出土遺物



土層№	土　　色	土　質	備　　考	
１ａ	2.5Y5/3 黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄色砂質シルトを粒状に少量含む	自然流入土
１ｂ	2.5Y5/3 黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄色砂質シルトを粒状に多量に含む	
１ｃ	2.5Y7/4 浅黄色	粘土質シルト	浅黄色土・黒褐色土を含む	掘り方崩落土
１ｄ	2.5Y7/4 浅黄色	粘土質シルト	黒褐色土を含む・崩落石材を多量に含む	
２ａ	10YR5/6 明黄褐色	粘土質シルト	黒褐色土・にぶい黄色土のブロックを多く含む	掘り方埋土

土層№	土　　色	土　質	備　　考	
２ｂ	10YR5/6 明黄褐色	粘土質シルト	２ａ層より小さいブロックを含む	掘り方埋土
２ｃ	10YR5/6 明黄褐色	粘土質シルト	明黄褐色～黒色の土壌がブロック状に混合	
２ｃ′	10YR5/6 明黄褐色	粘土質シルト	２ｃ層に類似するが層間に層理面あり	
２ｄ	10YR5/6 明黄褐色	粘土質シルト	褐灰色粘土及び２ｃ類似土壌の大型ブロックを含む	
２ｅ	10YR5/6 明黄褐色	粘土質シルト	２ｄ層に類似するが層間に層理面あり	

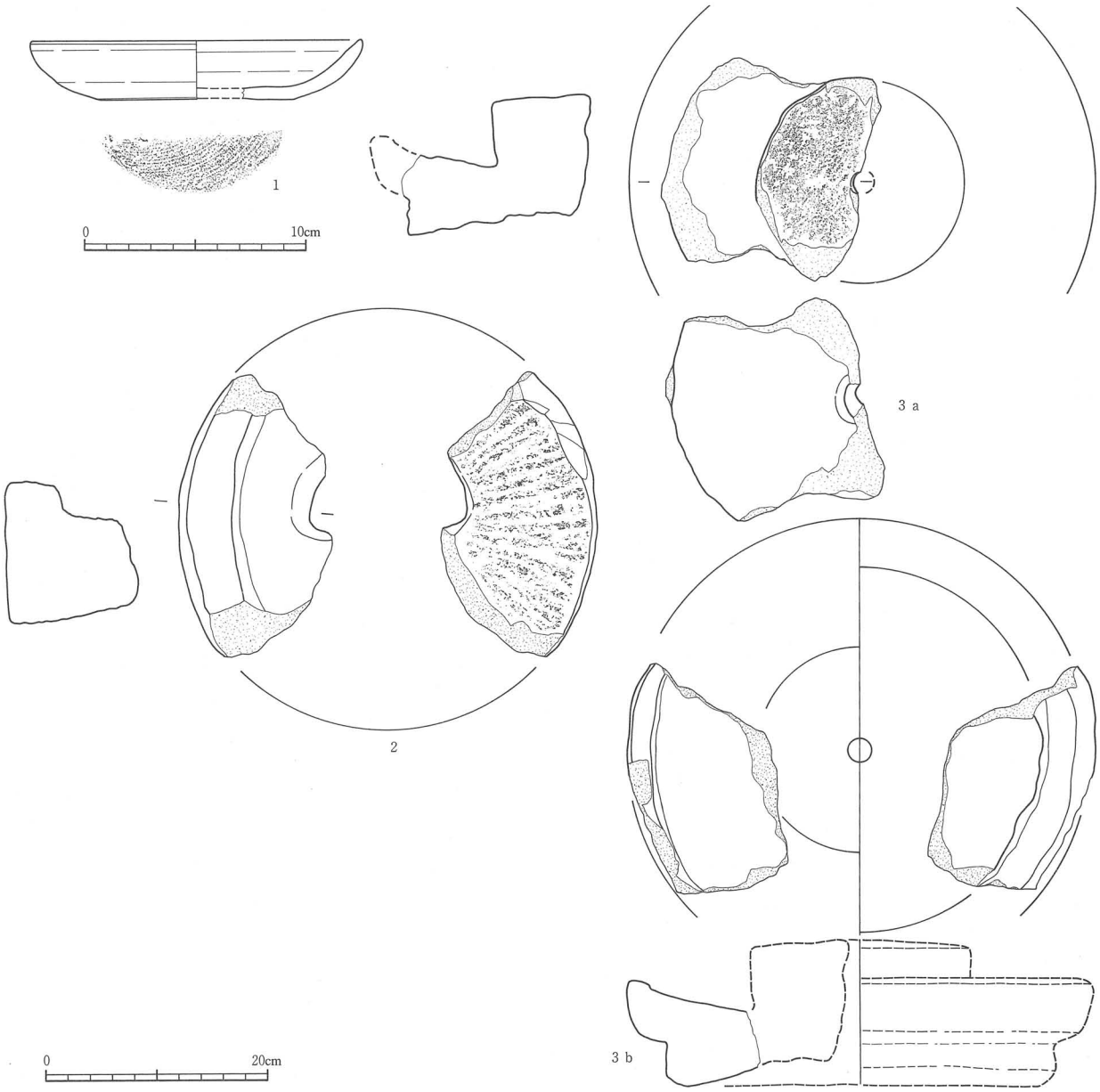
第13図　SE－１井戸跡

3　井戸跡

井戸跡として明確なものは、SE－１井戸跡（調査時はSK－２と呼称）１基だけであるが、後述するように調査区の中央部で検出されたSK－３・４・５土坑（安全のため完掘せず。）についても井戸跡の可能性がある。本項ではSE－１井戸跡について記述する。

SE－１井戸跡　調査区の北西部で検出され、東半部は調査区外となる。SI－２竪穴住居跡を切る。井戸跡周辺は調査区中央部と比較すると掘立柱建物跡・ピットが少ない。石組みの井戸枠を有する井戸である。現地表から3.5m、検出面から約2.8mまで掘り下げたが底面を検出することはできなかった。

＜堆積土＞井戸跡の堆積土は、黄褐色ないし浅黄色の粘土質シルトからなり、自然堆積の状況を呈している。検出



(cm・g)

番号	登録番号	種　別	器　種	遺構番号	出土位置	取上番号	器高	口径	底径	外　　面	内　　面	写真図版
1	Ⅰ－２	かわらけ	皿	SE－１	掘り方		2.7	15.0	8.7	ロクロ・回転糸切り	ロクロ	17－９

番号	登録番号	種　別	器　種	遺構番号	出土位置	取上番号	全長	幅	厚さ	重量	特　　徴		写真図版
2	K－８	粉挽き臼	上臼	SE－１	１・２層		(25.4)	(13.8)	12.7	4899	復元外径 38.0cm	安山岩	19－１
3	K－９	茶臼	下臼	SE－１	１・２層				12.8		復元外径 42.0cm	安山岩	19－２

第14図　SE－１井戸跡出土遺物

面から約1.2m下がった地点から下層には、井戸枠の石組みから崩落した石材が多数混入している。

＜掘り方＞井戸の掘り方は、直径3.1mの円形である。壁面は約85°前後の急角度をなす。石組みと壁面との間は30～50cmの間隔がある。掘り方の埋め土は、地山を起源とする明黄褐色の粘土質シルトのブロックを主体としているが、細かく観察すると、石の積み方に対応するように10～20cm間隔で積み手の違いが認められる。（第13図Ｂ－Ｂ′）石を１～２段積み上げる度に掘り上げた土を埋め戻し、さらに展圧を加える作業を繰り返したものと考えられる。

＜石組み井戸枠＞石組みは円形に組まれているが、東側の上部は崩落している。石組みの規模は、残存する上部の標高7.3m付近で外径約200cm・内径120cm、手掘り調査下端の標高5.8m付近で内径95cm程である。石組みの石材は、井戸枠の内側の表面に出るように比較的規則的に積まれた大型ものと、これらの石の裏側に掘り方の埋め土とともに不規則に埋めこまれた小型のものの２種類がある。前者は長径20～30cm・短径10～15cmの扁平な楕円形の石材（河原石）で、長軸を放射状に配して下段の石と石の間に次の段の石を積み上げている。これらの表面に配された石の間には、詰め石状に表面側から楔状に挟まれた石も存在している。後者の石は、長径が20cm程度から10cm以下の小さなものまであり、表面の石の隙間および裏込めとして20～30cmの幅で配置されている。

＜出土遺物＞井戸跡の堆積土及び掘り方からは、陶器・磁器等とともに多数の土師器片・須恵器片が出土しているが、第14図・図版17には、この遺構の年代に関ると考えられる陶器・磁器を図示した。Ｉ－２は掘り方埋め土出土のいわゆるカワラケの皿である。ロクロを使用し、底部外面には回転糸切り痕が残る。底部から口縁部に至るまで丸みをもって緩やかに立ち上がり、仕上げは丁寧である。Ｉ－４は、崩落土ないし流入土から出土した唐津の碗で、長石釉の上に魚文のような鉄絵が描かれる。内面見込みには目跡が残る。Ｉ－６は、Ｉ－４と同一個体と考えられる口縁部の破片である。Ｉ－５も崩落土または流入土から出土した志野皿の底部片である。Ｊ－１は、掘り方の埋め土から出土した肥前の染付または白磁で、器種は碗または皿と見られる。これ以外の遺物としては石臼が３点出土している。石臼の種別としては、粉引き臼の上臼片１点（Ｋ－８）と茶臼の下臼片２点（Ｋ－９ａ・９ｂ）がある。

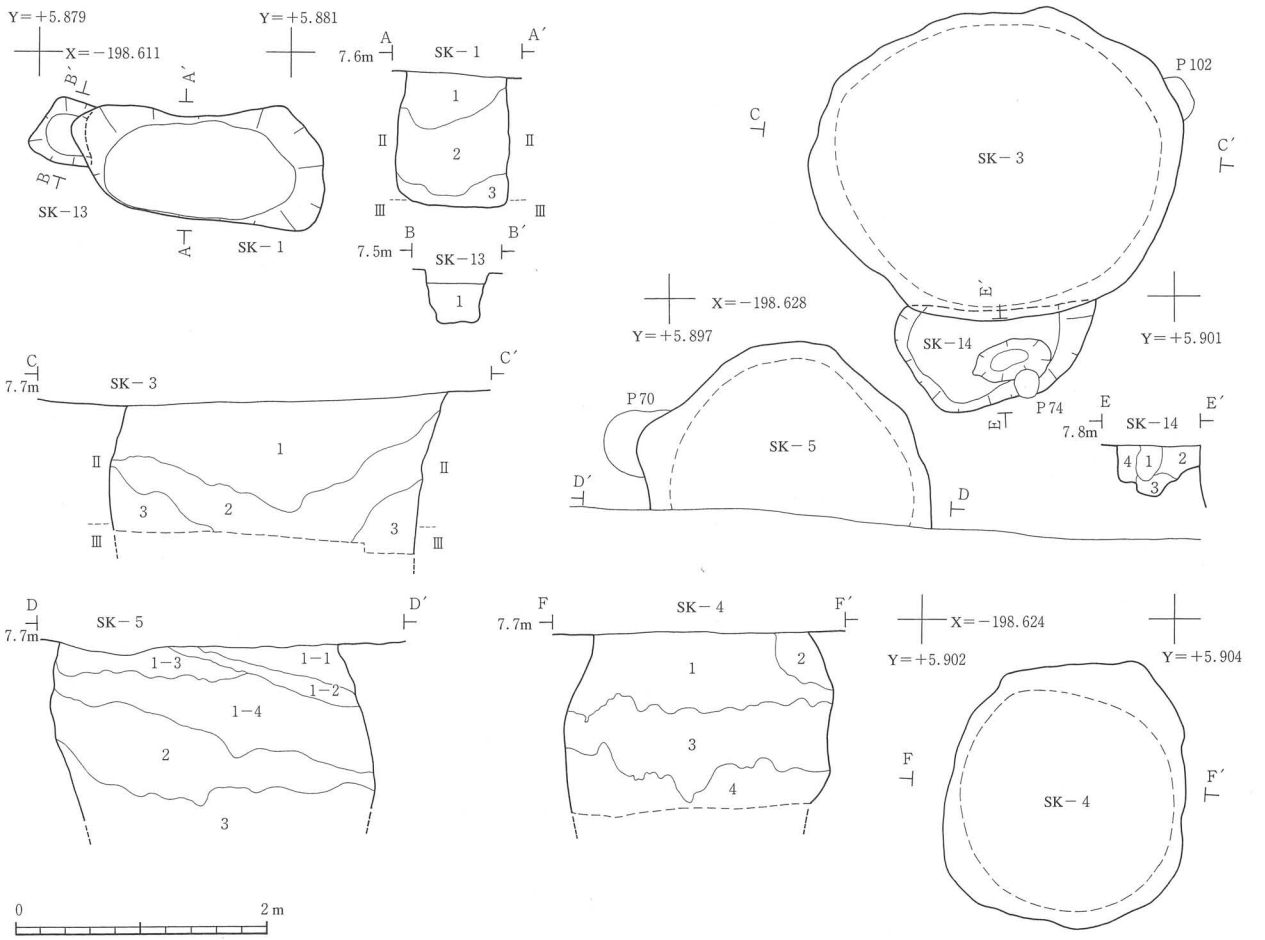
＜遺構の年代＞崩落土ないし流入土から出土した施釉陶器（Ｉ－４～６）については、16世紀末から17世紀代の年代に位置付けられるが、掘り方から出土した肥前磁器（Ｊ－１）は、17世紀後半以降のものと考えるのが妥当である。したがって、流入土からは江戸時代前期の遺物が出土しているが、遺構の年代は17世紀後半以降の江戸時代中期以降のものと考えられる。

４　土　坑

土坑は10基検出されている。土坑の分布は、調査区の北西端部と東部の2箇所に別れている。東部はさらに掘立柱建物跡の集中する中央寄りの部分と、SD－２溝跡の西岸部とに分かれ、前者には大型で深い土坑が優勢で、後者には小型で浅い土坑が分布している。

SK－１土坑　調査区の北端で検出されSK－13土坑を切っている。平面形は不整な長方形を呈し、長軸203cm・短軸99cmを測る。断面形は凹形で、深さは検出面から105cmである。壁面は、長辺側はほぼ垂直に掘られ、短辺側は傾斜をつけて掘られている。堆積土は、地山を起源とする褐色ないし黄橙色の粘土質シルト・シルト質粘土のブロックを主体とし、人為的な堆積状況を呈している。遺物は、１層から須恵器4点・土師器57点・溶解物付着土師器（トリベ）１点・鉄滓１点が、２層から須恵器片２点・土師器片20点・カワラケ片１点が出土している。カワラケは皿の破片で、底部外面には回転糸切り痕跡が残る。外面は底部と体部の境付近に角がついて急に立ち上がり、内面は底部から口縁部まで緩やかな弧状の立ち上がりとなる。

SK－３土坑　調査区の東部で検出され、SB－５掘立柱建物跡・SK－14土坑・SI－６・８竪穴住居跡を切ってい



〈SK－１〉

土層No	土　色	土　質	備　考
1	10YR 4/4 褐　色	粘土質シルト	しまりあり、炭化物・焼土を含む
2	10YR 4/4 褐　色	粘土質シルト	黄橙色シルト質粘土（Ⅱ層起源）をブロック状に含む
3	10YR 7/8 黄橙色	シルト質粘土	Ⅱ層起源のブロックを主体としⅢ層起源の褐色粒土を粒状に含む

〈SK－３〉

土層No	土　色	土　質	備　考
1	10YR 5/6 黄褐色	シルト	暗褐色粘土質シルトのブロックを上部に多量に含む、灰黄褐色土を縞状に含む
2	10YR 3/3 黒褐色	粘　土	上部に暗褐色粘土の大形のブロックを含む
3	10YR 4/6 褐　色	粘　土	大形のブロック状の堆積、暗褐色粘土の大形ブロックを含む

〈SK－４〉

土層No	土　色	土　質	備　考
1	2.5Y 5/4 黄褐色	シルト	暗褐色シルト質粘土の小ブロックを多く含む、全体がブロック状の堆積
2	10YR 3/3 黒褐色	粘土質シルト	大形のブロック状の堆積、暗褐色シルト質粘土の大形ブロックを含む
3	10YR 3/2 黒褐色	シルト質粘土	大形のブロック状の堆積、暗褐色シルト質粘土の大形ブロックを含む
4	10YR 5/6 黄褐色	粘　土	ブロック状の堆積

〈SK－５〉

土層No	土　色	土　質	備　考
1－1	10YR 5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	暗褐色土のブロックを多く含む
1－2	10YR 5/6 黄褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色土のブロックを含む
1－3	10YR 5/6 黄褐色	砂質シルト	にぶい黄褐色粘土のブロックを多量に含む
1－4	10YR 5/6 黄褐色	粘　土	暗褐色粘土とのブロック状の混合層
2	10YR 3/3 暗褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色シルト質粘土との大形ブロックの混合層
3	10YR 4/4 褐　色	粘　土	暗褐色土を部分的に少量含む

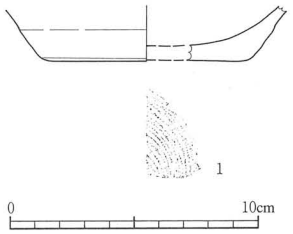
〈SK－13〉

土層No	土　色	土　質	備　考
1	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	明黄褐色粘土の小ブロックを含む

〈SK－14〉

土層No	土　色	土　質	備　考
1	10YR 5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	明黄褐色土、暗褐色土の小ブロックを多く含む、焼土・炭化物を含む
2	10YR 6/6 明黄褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色土のブロックを多く含む
3	10YR 5/4 にぶい黄褐色	粘　土	明黄褐色土粒を少量含む
4	10YR 6/6 明黄褐色	シルト質粘土	

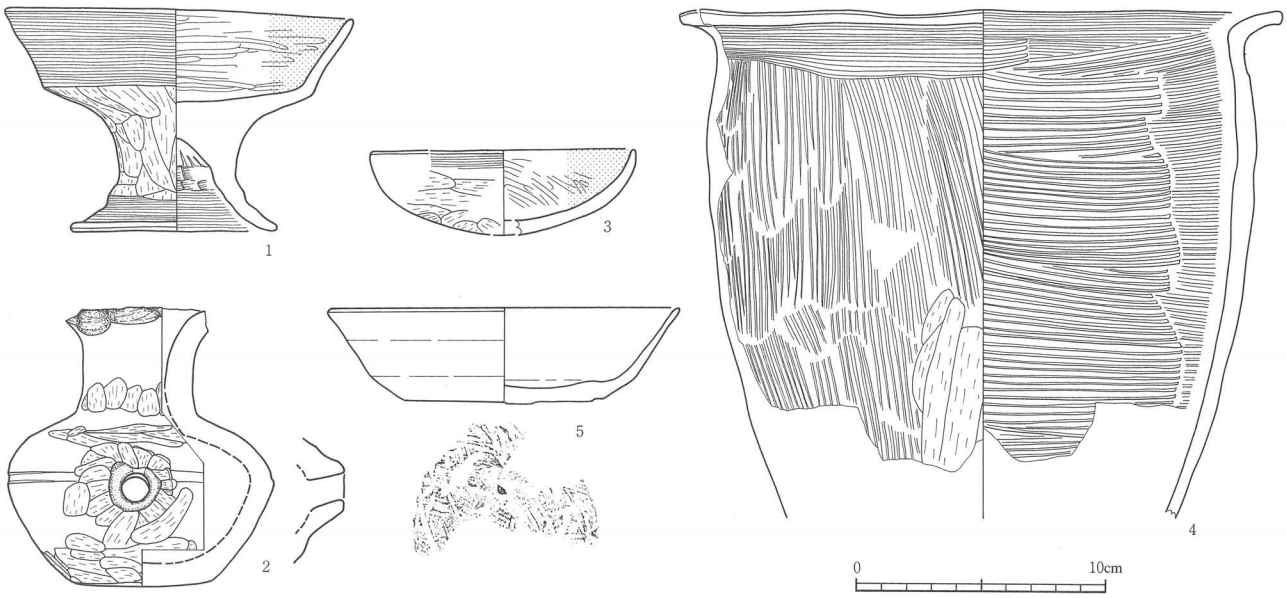
第15図　土坑跡１（SK－１・３・４・５・13・14）



(cm・g)

番号	登録番号	種　別	器　種	遺構番号	出土位置	取上番号	器高	口径	底径	外　面	内　面	写真図版
1	Ⅰ－1	かわらけ	Ⅲ	SK－1	2層		(2.2)		8.1	ロクロ・回転糸切り	ロクロ	17－8

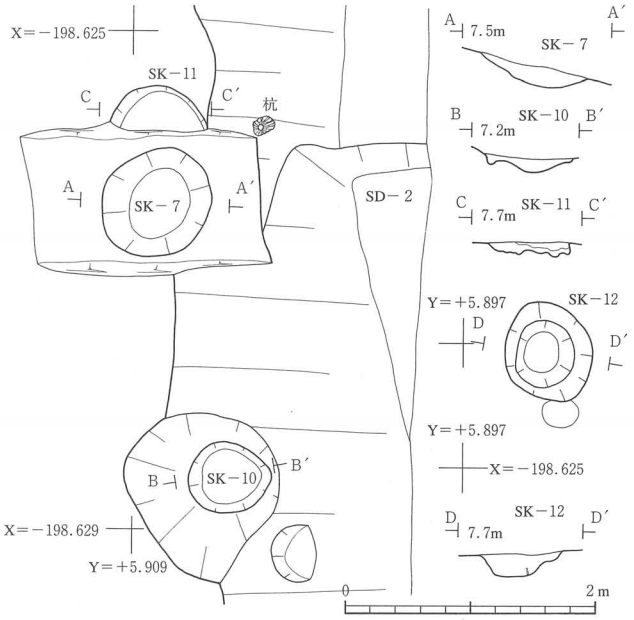
第16図　SK－１土坑跡出土遺物



(cm・g)

番号	登録番号	種　別	器　種	遺構番号	出土位置	取上番号	器高	口径	底径	外　　面	内　　面	写真図版
1	C－50	土師器	高坏	SK－３	１層		9.0	14.0	8.4	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・ナデ・ヨコナデ	14－５
2	E－15	須恵器	瓶	SK－３	３層		(11.3)	(5.8)	5.7	ロクロ・ヘラケズリ	ロクロ　　口縁再生	16－11
3	C－51	土師器	坏	SK－４	４層		3.4	10.6		ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ	12－16
4	C－52	土師器	甕	SK－４	３層		(20.5)	24.0		ヨコナデ・ハケメ・ヘラケズリ	ヘラナデ	14－６
5	E－16	須恵器	坏	SK－４	４中層		3.9	14.0	7.7	ロクロ・回転ヘラ切り・ヘラ傷	ロクロ	17－７

第17図　SK－３・４土坑跡出土遺物



〈SK－７〉

土層№	土　　色	土　質	備　　考
1	10YR3/3 暗褐色	粘　土	炭化物・礫を含む

〈SK－10〉

土層№	土　　色	土　質	備　　考
1	10YR5/1 灰　色	粘　土	堆積土にしまりなし　　自然堆積

〈SK－11〉

土層№	土　　色	土　質	備　　考
1	10YR3/4 暗褐色	シルト質粘土	
2	10YR5/4 褐　色	シルト質粘土	

〈SK－12〉

土層№	土　　色	土　質	備　　考
1	10YR 5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	層下部に褐色シルト質粘土のブロックを多く含む、焼土・炭化物を含む

第18図　土坑跡２（SK－７・10・11・12）

る。平面形は円形を呈し、東西軸297cm・南北軸248cmを測る。検出面から125cmの深さまで調査したが底面に達しなかった。調査部分の壁面はほぼ垂直で、一部の壁面はオーバーハングしているが、この部分については調査時の状況から壁面の崩落によるものと判断される。堆積土は、地山を起源とする褐色ないし黄褐色の粘土またはシルトのブロックを主体とし、人為的な堆積土または壁面の崩落土と観察される。堆積土中からは第17図の土師器高坏・須恵器瓶等の多数の土器片が出土しているが、これらの遺物はSK－３土坑が切っている竪穴住居跡に伴うものが壁面の崩落などによって流入したもので、遺構の時期とは直接関係していないと考えられる。

SK－４土坑　SK－３土坑の北東側1.2mのところで検出された。SI－７・８竪穴住居跡を切っている。平面形は円

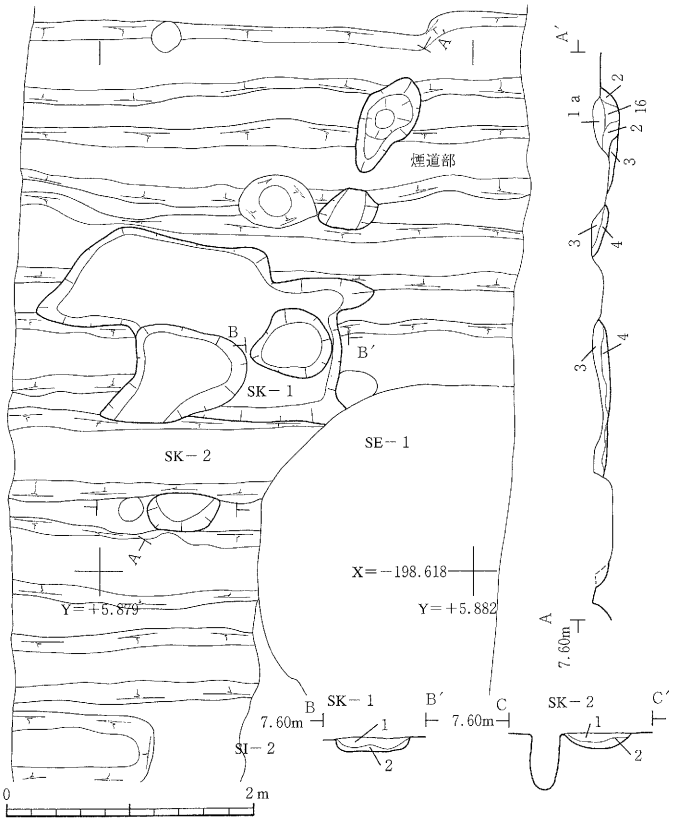
形を呈し東西軸189cm・南北軸223cmを測る。検出面から150cmの深さまで調査したが底面に至らなかった。調査部分の壁面は、上端部よりも中程が崩落によって抉れて広くなっている。堆積土は、黄褐色ないし黒褐色土のブロックを主体とし、SK－３土坑と同様に人為的な堆積土または壁面の崩落土である。堆積土中からは、第17図の土師器坏・甕、須恵器坏など多数の土器片が出土しているが、これらも重複する竪穴住居跡に伴う遺物の流入と考えられる。

SK－５土坑　SK－３土坑の南西70cmのところで検出された。掘立柱建物跡との関係の明らかでないピット70・71・72に切られている。南側は調査区の外にのびている。検出部の平面形は半円形を呈し、東西軸227cmを測る。検出面から140cmの深さまで調査したが底面に達しなかった。壁面はSK－４土坑同様に抉れて中膨らみとなっている。堆積土は、黄褐色のブロックを主体とし、SK－３・４土坑と同様に人為的堆積土及び壁面の崩落土によって埋っている。堆積土中からの出土遺物は土師器12点・鉄片１点があるだけで、SK－３・４土坑と比較すると少ない。竪穴住居跡との重複のないSK－５土坑からの出土遺物が少ないことは、SK－３・４土坑から出土した多数の遺物が、重複する竪穴住居跡に由来することを示しているものと解釈される。

SK－７土坑　SD－２溝跡の西岸部で検出された。SD－２溝跡・SI－10竪穴住居跡・SK－11土坑と重複する位置関係にあるが、試掘調査の掘削により各遺構の底面よりも下がった面で検出されたので、前後関係は不明である。平面形は円形を呈し、東西軸87cm・南北軸86cmを測る。断面形は緩やかな舟底形を呈し、検出面からの深さは15cm程である。堆積土は炭化物や礫を含む暗褐色の粘土層で、自然堆積と考えられる。堆積土中からは土師器片が５点出土している。

SK－10土坑　SD－２溝跡の西岸部で、同溝跡の堆積土除去後に検出された。平面形は円形を呈し、東西軸66cm・南北軸67cmを測る。断面形は緩やかな舟底形を呈し、検出面からの深さは15cm程である。堆積土は、灰色の粘土からなる自然堆積層1層である。遺物は堆積土中から土師器片が３点出土している。

SK－11土坑　SK－７土坑の北側で検出された。南側半分は試掘調査の際に削平されている。SI－11竪穴住居跡を切っている。残存部の平面形は半円形を呈し、東西残存軸78cmを測る。断面形は不整形で、底面も凹凸が著しい。検出面からの深さは８～12cm程である。堆積土は２層に分けられ、１層は暗褐色シルト質粘土、２層は褐色のシルト質粘土である。遺物は出土していない。



土層No.	土　色	土　質	備　考
1 a	7.5YR1.7/1 黒 色	粘　土	極暗褐色焼土・黄褐色土・明黄褐色土のブロックを多く含む
1 b	7.5YR1.7/1 黒 色	粘　土	１a層に比べて明黄褐色シルトのブロックを混入
2	2.5Y6/6 明黄褐色	シルト	炭化物・黄褐色土のブロックを多く含む
3	2.5Y5/4 黄褐色	シルト	明黄褐色土のブロックを少量含む　（掘り方埋土）
4	2.5Y5/6 明黄褐色	シルト	黄褐色土粒を少量含む　（掘り方埋土）
SK-1-1	10YR5/8 明黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色土・炭化物・焼土を含む
SK-1-2	10YR5/8 明黄褐色	粘土質シルト	暗褐色土粒を少量含む
SK-2-1	2.5Y7/4 浅黄色	シルト	上面に焼土及び黄褐色シルトを粒状に含む
SK-2-2	2.5Y5/6 明黄褐色	シルト	炭化物・焼土を帯状に含む

規　模	方向（カマド中心）	カマド位置	壁残存高	重　複	主柱穴	時　期
(2.6×2.4) m	(N－23°－E)	北東壁中央	0cm	SI－2 ⇦ ? ⇨ SI－1 ⇨ SE－1	不　明	

第19図　SI－１竪穴住居跡

SK－12土坑　調査区西部の中央よりで検出された。SI－６竪穴住居跡を切っている。平面形は略円形を呈し、東西軸69cm・南北軸77cmを測る。断面形は途中で傾斜の変わる逆台形を呈する。検出面からの深さは19cm程である。堆積土はにぶい黄褐色のシルト質粘土層である。遺物は堆積土中から須恵器片1点と土師器片33点・溶解物付着土師器片１点が出土している。

SK－13土坑　調査区北部でSK－１土坑に東部を切られた状態で検出された。残存部の平面形は略方形を呈し、南北軸53cmを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは40cm程である。堆積土は、褐色のシルト質粘土で、明黄褐色土のブロックを含む。人為的な堆積土と観察される。遺物は出土していない。

SK－14土坑　SK－４土坑に北半部を切られて検出された。残存部の平面形は略円形を呈し、東西軸141cm・残存南北軸75cmを測る。断面形は不整形で、底面には凹凸がある。深さは最深部で42cmである。堆積土はにぶい黄褐色および明黄褐色土層である。遺物は、堆積土中から須恵器片１点と土師器片５点が出土している。

5　竪穴住居跡

竪穴住居跡は住居跡と確定できない竪穴遺構を含めて11棟検出されている。竪穴住居跡は、調査区西端を除くほぼ全域から重複しながら検出されている。

SI－１竪穴住居跡　〔位置・遺存状況・重複〕調査区北西部で検出された。遺構は削平されてほとんど残っておらず、煙道の一部と土坑・掘り方の一部が残っているだけである。SE－１井戸跡に切られている。SI－２竪穴住居跡と重複する位置関係にあるが、削平のために新旧関係は不明である。

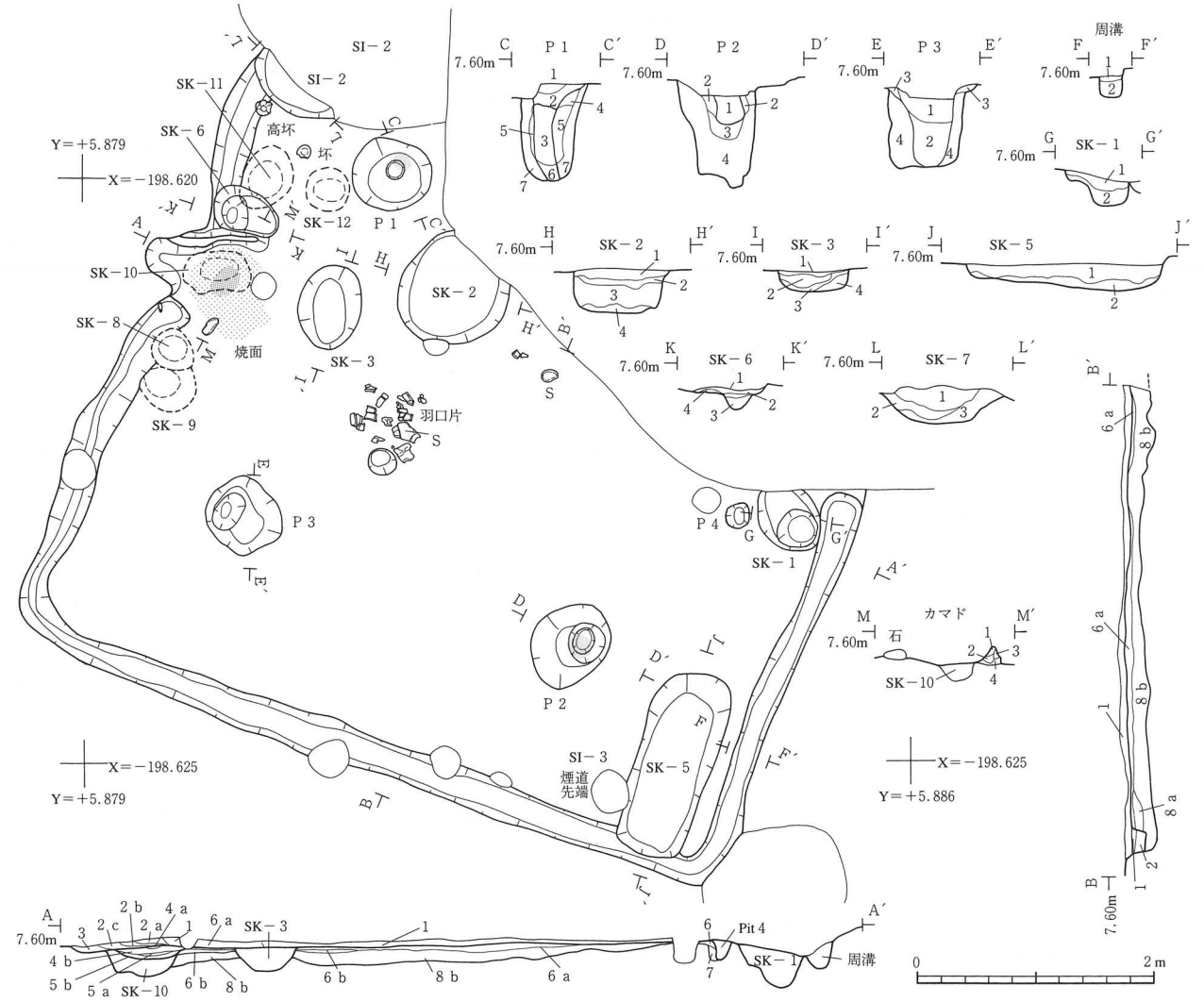
〔平面形・規模・方向〕削平のため平面形は不明である。残存範囲は東西2.6m・南北2.4m（煙道の長さは含まない）である。煙道から推定される軸方向はＮ－23°－Ｅである。

〔堆積土〕住居跡そのものの堆積土は残存しておらず、カマドの堆積土の一部と掘り方埋め土の一部が残っているだけである。

〈SI－２〉

土層No	土　色	土　質	備　考
1	10YR 5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	明黄褐色土・暗褐色土・炭化物焼土を含む
2 a	10YR 6/6 明黄褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土を含む、カマド崩落土
2 b	10YR 3/3 暗褐色	粘　土	にぶい黄橙色土を粒状に含む、炭化物・焼土を少量含む
2 c	10YR 3/3 暗褐色	粘　土	炭化物・焼土を多量に含む
3	10YR 5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	明黄褐色土を多く含む、炭化物・焼土を少量含む
4 a	2.5Y 4/3 オリーブ褐色	粘　土	焼土ブロックを多く含む
4 b	2.5Y 4/3 オリーブ褐色	粘　土	灰・炭化物・焼土を少量含む
5 a	5 YR 5/6 明赤褐色	焼　土	強く焼けた部分
5 b	10YR 5/6 黄褐色	焼　土	弱く焼けた部分
6 a	5 YR 7/4 浅黄色	粘　土	貼床・硬くしまりあり、特にカマド前面から東壁はしまりが強い
6 b	10YR 5/6 黄褐色	粘　土	浅黄色粘土を縞状に含む
7	2.5Y 5/3 にぶい黄色	粘　土	明黄褐色土粒を含む
8 a	2.5Y 7/6 明黄褐色	シルト質粘土	褐色土のブロックを含む　掘り方埋土
8 b	2.5Y 7/6 明黄褐色	シルト質粘土	浅黄色土粒・褐色土粒を少量含む　掘り方埋土
P1-1	2.5Y 7/6 明黄褐色	粘土質シルト	黄褐色土粒・炭化物を含む
P1-2	7.5YR 4/4 褐　色	粘　土	にぶい黄褐色土のブロック及び明黄褐色土粒・炭化物を含む
P1-3	10YR 6/6 にぶい黄褐色	粘　土	明黄褐色土粒を多量に含む　柱痕跡上部
P1-4	2.5Y 5/4 にぶい黄色	粘　土	黄褐色土をブロック状に少量含む
P1-5	2.5Y 5/4 にぶい黄色	粘　土	黄褐色土をブロック状に多量に含む
P1-6	5 G 7/1 明緑灰色	粘　土	柱痕跡下部
P1-7	10YR 6/4 明黄褐色	粘　土	褐色土粒を少量含む
P2-1	10YR 4/4 褐　色	粘　土	浅黄色粘土・明黄褐色土をブロック状に多く含む
P2-2	10YR 5/4 にぶい黄褐色	粘　土	浅黄色粘土・明黄褐色土をブロック状に多く含む
P2-3	2.5Y 7/6 明黄褐色	粘　土	にぶい黄褐色土を粒状に含む
P2-4	10YR 6/4 明黄褐色	粘　土	褐色土粒を少量含む
P3-1	10YR 4/4 褐　色	粘　土	浅黄色粘土・明黄褐色土のブロックを多量に含む
P3-2	2.5Y 7/6 明黄褐色	粘　土	にぶい黄褐色土を粒状に少量含む
P3-3	10YR 7/4 浅黄色	粘　土	褐色土を粒状に含む
P3-4	10YR 6/6 明黄褐色	粘　土	浅黄色土・褐色土を粒状に少量含む
P4-1	10YR 4/4 褐　色	粘土質シルト	明黄褐色土を粒状に含む、焼土・炭化物を含む

土層No	土　色	土　質	備　考
周溝1	10YR 5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	明黄褐色土・浅黄色粘土のブロックを少量含む
周溝2	10YR 6/6 明黄褐色	粘　土	明黄褐色土のブロックを少量含む
SK-1-1	2.5Y 5/4 黄褐色	粘　土	明黄褐色土を霜降状に含む
SK-1-2	2.5Y 7/4 浅黄色	粘　土	黄褐色土を粒状に含む、炭化物を少量含む
SK-2-1	10YR 4/4 褐　色	粘土質シルト	明黄褐色土粒・炭化物・焼土を少量含む
SK-2-2	2.5Y 7/4 浅黄色	粘　土	貼床層に類似
SK-2-3	10YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	炭化物・焼土を多量に含む
SK-2-4	2.5Y 7/4 浅黄色	粘　土	
SK-3-1	2.5Y 6/4 にぶい黄色	粘　土	褐色土をブロック状に含む、炭化物・焼土を含む
SK-3-2	2.5Y 6/4 にぶい黄色	粘　土	炭化物・焼土を含む
SK-3-3	2.5Y 6/4 にぶい黄色	粘　土	
SK-3-4	10YR 6/6 明黄褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土を多量に含む
SK-5-1	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	明黄褐色土のブロックを多く含む
SK-5-2	10YR 6/6 明黄褐色	粘　土	褐色土粒を少量含む
SK-6-1	10YR 7/6 明黄褐色	粘　土	炭化物・焼土を含む
SK-6-2	10YR 7/6 明黄褐色	粘　土	炭化物・焼土を多量に含む
SK-6-3	10YR 6/6 明黄褐色	粘　土	炭化物粒を少量含む
SK-6-4	10YR 7/4 にぶい黄橙色	粘　土	炭化物・焼土を含む
SK-7-1	2.5Y 7/4 浅黄色	粘　土	明黄褐色粘土と互層状に堆積
SK-7-2	2.5Y 7/4 浅黄色	粘　土	炭化物片を含む
SK-7-3	2.5Y 6/6 明黄褐色	粘　土	浅黄色粘土及び褐色土を粒状に多く含む
カマド1	7.5YR 7/6 橙　色	焼　土	
カマド2	7.5YR 5/6 明褐色	シルト質粘土	焼土化
カマド3	2.5Y 7/4 浅黄色	粘土質シルト	
カマド4	2.5Y 7/6 明黄褐色	粘　土	炭化物・焼土を含む
SK-8	2.5Y 7/6 明黄褐色	粘　土	炭化物・焼土を多量に含む
SK-9	10YR 1.7/1 黒　色	粘　土	炭化物・焼土粒・明黄色粘土粒をまばらに含む
SK-10	2.5Y 7/6 明黄褐色	粘　土	焼土を含む
SK-11	2.5Y 7/6 明黄褐色	粘　土	炭化物・焼土を含む、下部に炭化物を含む黒土分布
SK-12	2.5Y 7/6 明黄褐色	粘　土	炭化物・焼土を含む



規　模	方向（カマド中心）	カマド位置	壁残存高	重　複	主柱穴	時　期
6.3×（5.4）m	N－69°－W	北西壁	7～5cm	SI－2 ⇨ SI－3	P.1·2·3（+1）	Ⅰa期

ピットNo.	P 1	P 2	P 3	P 4
掘方形状	円　形	略楕円形	隅丸長方形	略円形
掘方規模	66×60cm	77×61cm	63×59cm	21×20cm
深　さ	83cm	90cm	85cm	22cm
柱痕形状	円　形	円　形	－	－
柱痕規模	17×（10）cm	20×（16）cm	－×－cm	－×－cm

第20図　SI－２竪穴住居跡

〔床面・壁面・柱穴〕床面・壁面は残存せず不明である。柱穴も検出できなかった。

〔カマド〕カマド自体は残存していないが、煙道の先端部と考えられる落ち込みが、残存する遺構の北東部で検出されたことから、カマドの位置は北東の壁面と考えられる。

〔周溝〕周溝は検出されていない。

〔掘り方〕掘り方の一部と考えられる不整形の落ち込みが検出されたほか、掘り方底面で堆積土に焼土や炭化物を含む小規模な土坑が2基検出されている。

〔遺物出土状況と出土遺物〕遺存状況が悪いため、出土遺物も少なく、掘り方の埋め土中から非ロクロ土師器片５点、SK－１土坑から非ロクロ土師器片５点、・須恵器片１点が出土しているだけである。図化した遺物はない。

第21図　SI－２竪穴住居跡出土遺物

〈SI－２〉　(cm・g)

番号	登録番号	種　別	器　種	遺構番号	出土位置	取上番号	器高	口径	底径	外　　面	内　　面	写真図版
1	C－59	土師器	坏	SI－２	１層・床面	№3·4	(3.1)	12.0		ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ	
2	C－３	土師器	坏	SI－２	床面	№３	2.7	12.6	9.0	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ	12－４
3	C－２	土師器	坏	SI－２	床面	№3·8	4.4	15.4	11.1	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ	12－３
4	C－５	土師器	坏	SI－２	６層		(3.2)	14.9	12.1	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ	
5	C－４	土師器	坏	SI－２	Ｐ３・６層		4.1	14.0	10.2	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ	12－５
6	C－６	土師器	坏	SI－２	SK－８埋土		(1.8)	10.5		ヨコナデ・ナデ	ヘラミガキ・非内黒	
7	C－７	土師器	埦	SI－２	周溝１層		5.6	9.6	3.4	ヨコナデ・ナデ	ナデ・指紋付着	14－１
8	C－１	土師器	高坏脚	SI－２	床面	№１	(11.3)		13.1	ヘラケズリ・ヨコナデ・３方透し	ヘラケズリ・ヨコナデ	14－４
9	C－８	土師器	甕	SI－２	SK－１　１層		(11.3)	16.6		ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ヘラナデ	14－７
10	C－９	土師器	甕	SI－２	SK－３埋土		(8.2)	23.8		ヨコナデ・ヘラナデ	ヘラナデ	14－８
11	E－１	須恵器	坏	SI－２	床面		(4.9)	12.7		ロクロ	ロクロ	17－１

番号	登録番号	種　別	器　種	遺構番号	出土位置	取上番号	全長	幅	厚さ	重量	特　　徴	写真図版
12	P－１	土製品	羽口	SI－２	６層周溝		5.9	(4.8)	1.5		ハケメ調整	19－４
13	P－２	土製品	羽口	SI－２	周溝１層		(7.3)	(4.5)	1.3		ナデ調整	19－５
14	P－３	土製品	羽口	SI－２	床面	№９	(21.3)	(9.7)	2.1	1193	ヘラナデ調整	19－３
15	K－２	石製品	不明	SI－２	カマド南ソデ		18.2	9.1	8.3	1269	磨面あり・工具による加工痕あり	18－４
16	K－１	石製品	砥石	SI－２	床面		7.8	2.2	1.0	30	孔径0.4cm	18－１
17	N－１	鉄製品	鏃	SI－２	６層		(2.9)	(1.3)	(1.2)	17.0	片刃鏃	20－１
18	N－３	鉄製品	鎌？	SI－２	周溝１層		(4.7)	(1.1)	(0.3)	3.5		20－９
19	N－２	鉄製品	不明	SI－２	貼床６層		(2.1)	(1.9)	(0.6)	5.5	方形板状	20－18

SI－２竪穴住居跡　〔位置・遺存状況・重複〕調査区北西部で検出された。耕作による削平が一部床面に及び、良好な遺存状態とは言い難いが、全体の輪郭は残っている。住居跡の北西部はSE－１井戸跡に切られ、北部から北東部は調査区の外にのびている。またSI－３竪穴住居跡の煙道に切られている。

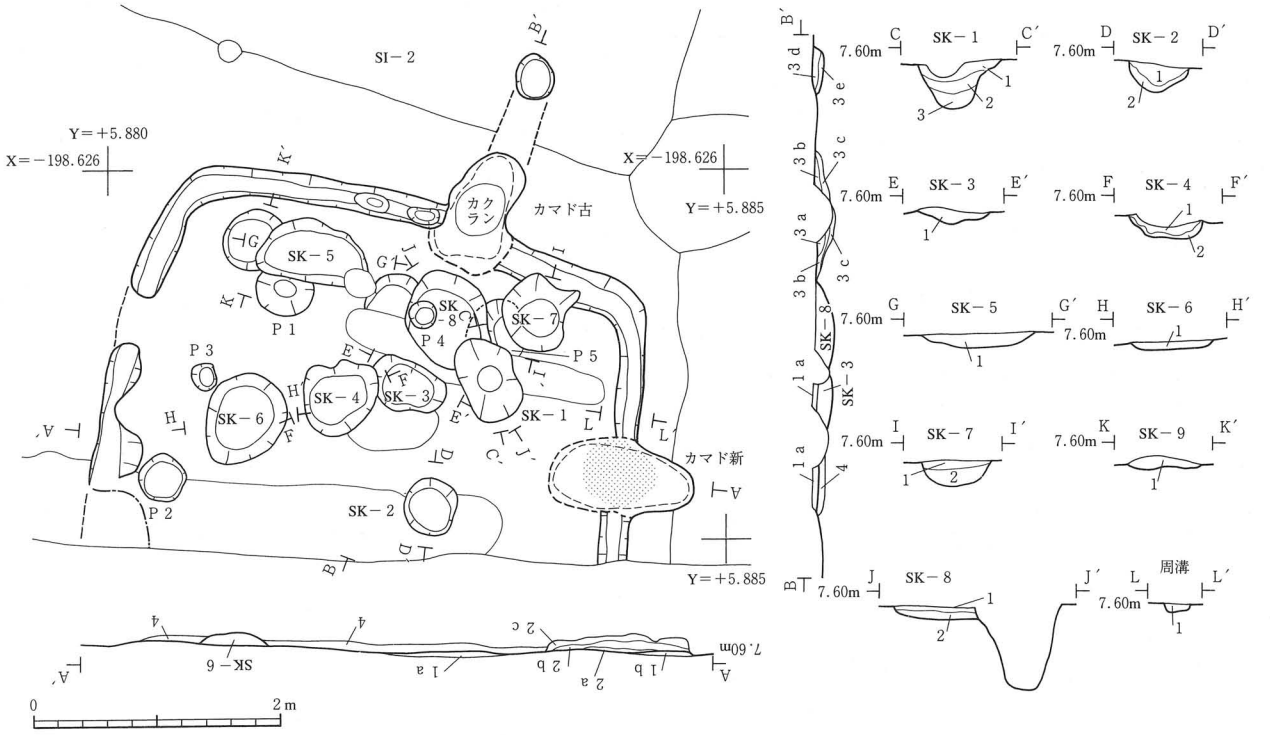
〔平面形・規模・方向〕平面形は、南北の大きさが不明であるため確定はできないが、柱穴の配置から東西・南北の長さのほぼ等しい正方形を呈するものと推定される。規模は、東西6.3m・検出部南北長5.4mを測る。方向はN－69°－Eである。

〔堆積土〕残存部の堆積土は、カマド付近を除くと、にぶい黄褐色の粘土質シルト１層からなり、残存する堆積土の層厚は２～５cm程度である。

〔床面・壁面〕床面はほぼ平坦であるが、全体に西側がやや低くなっている。床面には浅黄色の粘土による貼り床が施され、丁寧に床が仕上げられて締まっている。特に、カマド前面から反対側の壁面にかけての住居跡中央部は締まりが顕著である。カマド周辺の床面では多数の土坑が検出され、このうちSK－２・３・６・８・９・11土坑には焼土・炭化物が多く認められカマド内の堆積物（灰・消し炭・カマド崩落土等）の処理用に掘削された可能性が考えられる。壁面は、西壁についてはカマドの部分がやや内側に入り込むように掘られているが、他の辺はほぼ直線的である。壁の立ち上がりは緩やかであるが、周溝部分は急な立ち上がりである。

〔柱穴〕P.１・２・３が柱穴と考えられる。検出された3個の柱穴の配置から、主柱穴は4本であると推定される。各柱穴は長軸が60～70cmの円形ないし不整形の掘り方で、柱痕跡は直径20～30cmの円形である。柱間寸法は東西約3.2m・南北約3.3mである。柱穴列と壁面までの距離は東面が1.75m・西面が1.5m・南面が1.65mほどである。カマドの反対側の東壁面中央近くには、小型のピット（P.４）があるが、このピットについては、梯子の据え穴の可能性がある。

〔カマド〕カマドは西壁の中央に位置し、カマド奥部が住居の方形プランの外にわずかに張り出すように作られている。右袖の下端部・煙道の付け根部分・燃焼部の焼土面が残っている。右袖は、壁面から八字状に開いて、約55cmに渡って細長く残っていた。残存部の高さは約12cmある。焼け面は西壁から60～80cm離れた部分が強く焼け、



規　模	方向（カマド中心）	カマド位置	壁残存高	重　　複	主柱穴	時　期
4.4×（3.2）m	N-18°-E・N-75°-W	北東壁中央	6～0cm	SI2・4 ⇨ SI－3	P1・SK－1？	Ⅰb期

ピットNo	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5
掘方形状	円　形	円　形	略円形	円　形	楕円形？
掘方規模	45×（32）cm	38×37cm	24×21cm	23×22cm	（50）×（14）cm
深　さ	60cm	12.5cm	21.5cm	11cm	22cm
柱痕形状	－	－	－	－	－
柱痕規模	－×－cm	－×－cm	－×－cm	－×－cm	－×－cm

土層No	土　色	土　質	備　考
1 a	10YR 3/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	明黄褐色粘土を粒状に含む
1 b	10YR 3/3 暗褐色	粘土質シルト	焼土粒・炭化物を多量に含む、カマド内堆積土（新期）
2 a	5YR 5/4 にぶい赤褐色	焼　土	２～３cmの厚さで赤変
2 b	10YR 5/4 褐　色	シルト質粘土	明黄褐色土粒を少量含む
2 c	10YR 5/4 褐　色	シルト質粘土	明黄褐色土を多量に含む
3 a	10YR 5/4 褐　色	シルト	炭化物・焼土を少量含む、カマド内堆積土（古期）
3 b	10YR 5/4 褐　色	シルト	炭化物・焼土を多量に含む、カマド内堆積土（古期）
3 c	10YR 4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	明黄褐色土を粒状に含む
3 d	10YR 5/4 褐　色	シルト	炭化物・焼土を多量に含む
3 e	10YR 4/4 褐　色	シルト	明黄褐色土・暗褐色土を粒状に含む
4	10YR 5/6 明黄褐色	シルト質粘土	暗褐色土を粒状に含む、住居跡掘り方埋土
SK-1-1	10YR 5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	明黄褐色土粒を多く含む
SK-1-2	10YR 5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土・明黄褐色土を少量含む
SK-1-3	10YR 5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土を少量含む

土層No	土　色	土　質	備　考
SK-2-1	10YR 5/6 明黄褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色土を粒状に含む、炭化物・焼土を多量に含む
SK-2-2	10YR 5/6 明黄褐色	シルト質粘土	上面に炭化物・焼土を帯状に含む
SK-3-1	10YR 5/6 明黄褐色	シルト質粘土	炭化物・焼土を縞状に含む
SK-4-1	10YR 5/6 明黄褐色	粘土質シルト	底面に炭化物・焼土が集積する
SK-4-2	10YR 5/6 明黄褐色	シルト	浅黄色土をブロック状に含む
SK-5-1	10YR 5/6 明黄褐色	粘土質シルト	暗褐色土・炭化物・焼土を少量含む
SK-6-1	10YR 5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	暗褐色土・明黄褐色土・炭化物・焼土を多く含む
SK-7-1	10YR 3/3 暗褐色	シルト質粘土	焼土・炭化物・にぶい黄褐色土粒を多く含む
SK-7-2	10YR 3/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色土粒及び焼土を１層より多く含む
SK-8-1	2.5Y 5/4 黄褐色	シルト	上面に炭化物・焼土を帯状に含む
SK-8-2	2.5Y 5/6 明黄褐色	シルト質粘土	黄褐色土を粒状に含む
SK-8-1	10YR 5/6 黄褐色	シルト質粘土	炭化物・焼土・明黄褐色土を少量含む
周溝1	10YR 5/4 褐　色	シルト質粘土	明黄褐色土を粒状に含む

第22図　SI－３竪穴住居跡

110cm離れたところまで焼けている。カマド本体から煙道にかけては緩やかに立ち上がっている。

〔周溝〕周溝は、壁面に沿って各面で検出されているが、西壁部ではカマド部分は掘り残されている。周溝の規模は幅18～33cm、深さ12cm前後である。堆積土はブロック状の人為的な埋め土である。

〔掘り方〕本住居跡は、一度全体的に緩やかな凹凸が残る状態に掘った後、凹部を主として全体的に埋め戻しを行って平らな床面を形成し、さらに貼り床を施している。床面から掘り方底面までの深さは、深いところで15～20cmあり、全体としては西部が深く東部が浅い。掘り方の埋め土は、基本層Ⅱ層に由来する明黄褐色のシルト質粘土である。

〔遺物出土状況と出土遺物〕カマド周辺の床面から土師器と石製品がまばらに、住居跡中央付近から土師器と須恵器・土製品がまとまって出土している。また、東壁際の周溝から土師器の小型の埦が、正立の状態で出土している。遺物の種類としては、土師器・須恵器・砥石・石材・鉄製品・土製品がある。土師器は坏・埦・高坏・甕などの器種が出土している。いずれもロクロは使用されていない。坏は丸底で、底部体部の境の外面に段が形成され、内面は外面の段の位置に角が形成されるもの（Ｃ－２・３・４・５）と、底部から口縁部まで緩やかに立ち上がるもの（Ｃ－59）がある。須恵器は丸底の坏で、体部は直立する。砥石は所謂分銅形のもので片方の端部には円孔がある。石材としたものは、砂岩を長方形の柱状に加工したもので、表面には手斧状工具による加工の痕跡が残っている。鉄製品には鏃・鎌・不明品がある。土製品は、羽口が出土している。

SI－３竪穴住居跡　〔位置・遺存状況・重複〕SI－２竪穴住居跡の南側で検出され、南半部は調査区の外にのびる。東壁と北壁に新旧２時期のカマドがある。耕作による削平が床面のほぼ全域に及び、特に南西部における撹乱が著しく、掘り方の埋め土も失われているが、遺存する周溝によって全体の輪郭が推定できる。煙道部及びカマドがSI－２・４竪穴住居跡を切っている。

〔平面形・規模・方向〕平面形は、四隅がやや狭まる隅丸方形を呈するものと推定される。規模は、東西4.4m・検出部南北長3.2mを測る。方向は北カマドでＮ－18°－Ｅ、東カマドでＮ－75°－Ｗである。

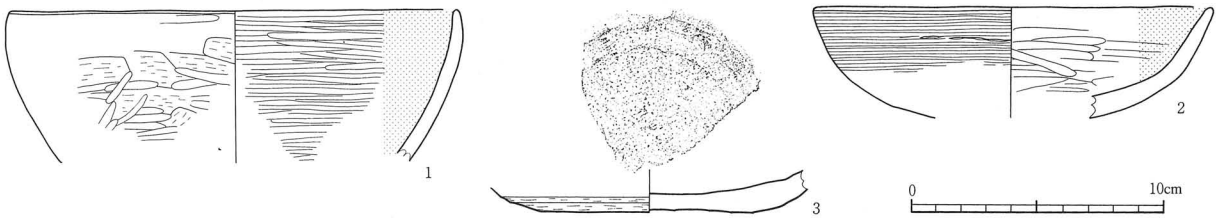
〔堆積土〕残存部の堆積土は、カマド内の凹部を除くと、住居跡の中央部に残るだけである。にぶい黄褐色の粘土質シルト１層からなり、残存する堆積土の層厚は、厚いところで４cm程度である。

〔床面・壁面〕床面は、耕作の削平による凹凸のため、本来の状況は不明である。撹乱を除去した面では、住居に伴うと考えられる多数の土坑・ピットが重複して検出された。土坑のうち、SK－２・４・７土坑には焼土・炭化物を多く混入する土壌が堆積している。壁面は、カマド部分がやや内側に湾入するように掘られているが、他の辺はほぼ直線的である。壁は残存していないので、壁面の立ち上がりは不明である。各壁面は周溝で観察すると中央が外側にわずかに膨らんでいる。

〔柱穴〕P.１・５が柱穴に関るピットと考えられる。また、SK－２土坑として調査した遺構も、カマドの位置を変更した段階での柱穴の可能性がある。

〔カマド〕カマドは北壁と西壁の2箇所で検出されているが、両方とも袖等のカマド本体の構築土は残存していない。燃焼部の焼け面の残存状態から、焼け面の残っていない北壁側のカマドが古く、焼け面の残存する東壁側のカマドが新しいと解釈される。両カマドともカマド本体の奥部が住居跡壁面の外側に張り出している。

北側のカマドは、北壁中央より東側に寄っており、北壁を三等分した場合、東寄りの１／３の所にカマド中軸が位置する。カマド本体中央付近は、住居跡床面よりやや窪んでいる。SI－２竪穴住居跡を切って煙道先端の落ち込みが検出され、北壁面から煙道の先端までは1.4mを測る。



(cm・g)

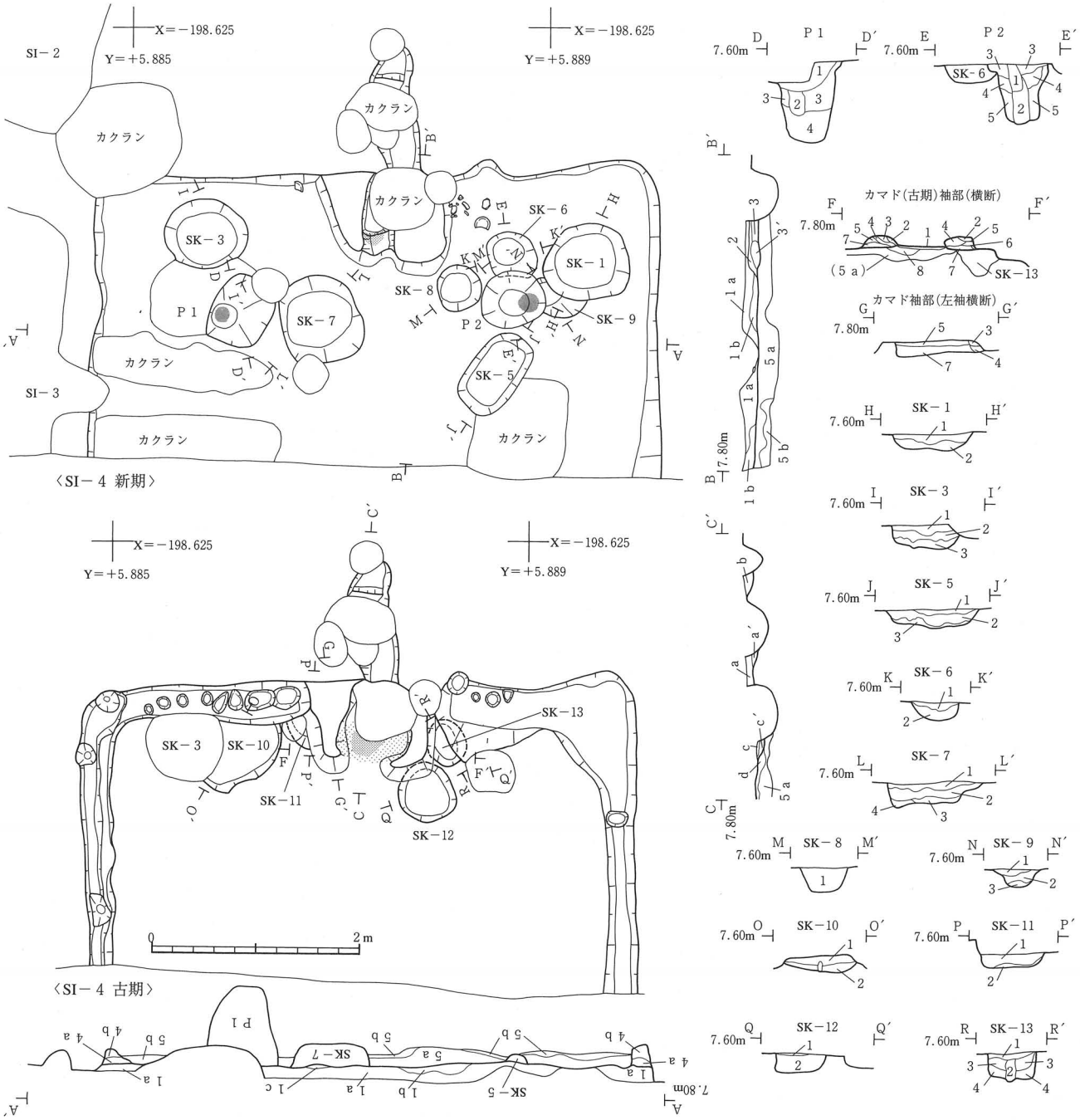
番号	登録番号	種　別	器　種	遺構番号	出土位置	取上番号	器高	口径	底径	外　　面	内　　面	写真図版
1	Ｃ－11	土師器	埦	SI－３	SK－５		(6.1)	18.0		ヘラケズリのちヘラミガキ	ヘラミガキ	14－２
2	Ｃ－10	土師器	坏	SI－３	SK－４		(4.4)	15.9		ヨコナデ	ヘラミガキ	12－６
3	Ｅ－19	須恵器	坏	SI－３	１層		(1.7)		11.7	回転ヘラケズリ	ロクロ	16－15

第23図　SI－３竪穴住居跡出土遺物

東側のカマドは、本住居跡がほぼ正方形のプランとした場合、東壁中央より北側に寄って位置している。カマドの本体にあたる部分は長軸（奥行き）118cm・短軸（幅）62cmの楕円形に窪んでおり、カマド全体の１／２～１／３が住居跡の外側に張り出している。カマド底面は、東壁のライン上を中心にして焼けている。

〔周溝〕周溝は、検出された各面に存在しているが、北壁面ではカマド部分は掘り残されていた可能性がある。周溝の規模は幅18～38cm、検出面からの深さは５cm前後である。堆積土はブロック状の人為的な埋め土である。

〔掘り方〕掘り方の埋め戻し土層の厚さは、床面の残存部で７cm前後で、掘り方の底面には緩やかな凹凸がある。掘り方の埋め土は、基本層Ⅱ層に由来する明黄褐色のシルト質粘土層である。



規　模	方向（カマド中心）	カマド位置	壁残存高	重　　複	主柱穴	時　期
5.4×（3.1）m	N－1°－E	北壁中央	10～3cm	SI－４ ⇨ SI－３	P１・２	Ⅰb期

第24図　SI－４竪穴住居跡

〈SI－４〉

土層No	土　色	土　質	備　考
1 a	10YR 4/4 褐　色	粘土質シルト	明黄褐色土・炭化物・焼土を少量含む
1 b	10YR 4/4 褐　色	粘土質シルト	明黄褐色土粒を縞状に含む
1 c	10YR 5/6 明黄褐色	シルト質粘土	褐色土粒を含む
2	10YR 5/6 明黄褐色	粘　土	褐色土のブロックを含む　新期カマド構築土
3	10YR 3/3 暗褐色	粘　土	炭化物・焼土粒を多量に含む　古期カマド内堆積土
3′	10YR 5/6 明黄褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土を多く含む　古期カマド構築土
4 a	10YR 4/4 褐　色	粘土質シルト	明黄褐色土を粒状に多く含む　周溝内堆積土
4 b	10YR 5/6 明黄褐色	粘　土	褐色土粒を少量含む　周溝内堆積土
a	10YR 5/4 にぶい黄褐色	粘　土	明黄褐色土粒を多く含む　煙道内堆積土
a′	10YR 5/4 にぶい黄褐色	粘　土	a層より粒子が細かい　煙道内堆積土
b	10YR 5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	明黄褐色土粒を含む、炭化物を少量含む　煙道内堆積土
c	7.5YR 5/4 にぶい褐色	粘土質シルト	カマド内堆積土
c′	10YR 5/6 明黄褐色	粘土質シルト	褐色土を粒状に含む　カマド内堆積土
d	2.5Y 7/4 浅黄色	粘　土	炭化物・焼土を少量含む
5 a	10YR 7/6 明黄褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色土のブロックを多く含む
5 b	10YR 7/6 明黄褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色土粒を少量含む
P1-1	10YR 5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	明黄褐色土を粒状に含む、炭化物・焼土を少量含む
P1-2	10YR 5/6 黄褐色	シルト質粘土	明黄褐色土をブロック状に含む　柱痕跡？
P1-3	10YR 5/6 明黄褐色	粘　土	褐色土粒を含む
P1-4	10YR 5/6 明黄褐色	シルト質粘土	暗褐色土を粒状に少量含む
P2-1	10YR 5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	炭化物を少量含む、しまりなし　柱痕跡
P2-2	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	明褐色土の少ブロックを含む　柱痕跡
P2-3	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	炭化物・焼土を少量含む
P2-4	10YR 4/4 褐　色	粘土質シルト	明黄褐色土粒を少量含む
P2-5	10YR 5/6 明黄褐色	粘土質シルト	褐色土粒・炭化物を少量含む
カマド面1	5Y 5/6 明赤褐色	焼　土	焼面
カマド面2	2.5Y 5/4 にぶい黄色	粘土質シルト	暗褐色土粒を多く含む
カマド面3	2.5Y 5/4 にぶい黄色	粘土質シルト	炭化物・焼土粒を多く含む
カマド面4	2.5Y 7/4 浅黄色	粘　土	炭化物・焼土粒を縞状に含む
カマド面5	2.5Y 7/4 浅黄色	粘　土	暗褐色土を粒状に含む
カマド面6	2.5Y 7/4 浅黄色	粘　土	炭化物・焼土を多量に含む
カマド面7	10YR 7/6 明黄褐色	粘土質シルト	褐色土を粒状に含む
カマド面8	2.5Y 7/4 浅黄色	粘　土	炭化物・焼土を少量含む
SK-1-1	2.5Y 5/6 明黄褐色	粘　土	炭化物・焼土を多量に含む、ブロック状に堆積
SK-1-2	2.5Y 5/6 明黄褐色	粘　土	炭化物・焼土を多量に含む、1層より大型のブロックが堆積
SK-3-1	2.5Y 5/4 にぶい黄色	シルト質粘土	明黄褐色土のブロックを含む、ブロック状の堆積
SK-3-2	2.5Y 5/6 明黄褐色	シルト質粘土	炭化物・焼土を含む、ブロック状の堆積
SK-3-3	2.5Y 5/4 にぶい黄色	シルト質粘土	焼土のブロックを多量に含む
SK-5-1	10YR 7/8 明黄褐色	粘土質シルト	褐色土粒を含む
SK-5-2	10YR 7/8 明黄褐色	粘土質シルト	焼土のブロックを多く含む
SK-5-3	10YR 5/6 明黄褐色	シルト	褐色土粒を少量含む
SK-6-1	10YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	褐色土粒・焼土粒を含む
SK-6-2	10YR 2/3 黒褐色	粘土質シルト	焼土粒・炭化物土粒を含む
SK-7-1	10YR 4/4 褐　色	粘土質シルト	暗褐色土のブロックを含む
SK-7-2	10YR 3/4 暗褐色	粘土質シルト	赤褐色・暗赤褐色の焼土粒を多量に含む
SK-7-3	10YR 4/4 褐　色	粘土質シルト	焼土粒を少量含む
SK-7-4	10YR 5/6 褐　色	シルト質粘土	焼土粒を多量に含む、褐色土のブロックを含む
SK-8-1	10YR 5/4 にぶい黄褐色	粘　土	明黄褐色土を粒状に含む
SK-9-1	10YR 5/4 褐　色	粘土質シルト	浅黄色土を粒状に多く含む
SK-9-2	2.5Y 7/4 浅黄色	粘土質シルト	褐色土を粒状に少量含む
SK-9-3	10YR 5/4 褐　色	粘土質シルト	炭化物・焼土を多量に含む
SK-D-1	2.5Y 7/4 浅黄色	粘土質シルト	炭化物・焼土粒を多く含む
SK-D-2	2.5Y 7/4 浅黄色	粘土質シルト	炭化物・焼土粒を少量含む
SK-E-1	10YR 5/4 褐　色	粘土質シルト	上面に炭化物・焼土が分布、明黄褐色土の少ブロックを含む
SK-E-2	10YR 5/6 明黄褐色	粘土質シルト	褐色土粒を少量含む
SK-B-1	10YR 5/6 明黄褐色	粘　土	炭化物・焼土を粒状に含む
SK-B-2	10YR 5/4 褐　色	粘土質シルト	明黄褐色土のブロックを多量に含む、炭化物・焼土を多量に含む
SK-B-3	10YR 5/4 褐　色	粘土質シルト	炭化物・焼土を多量に含む
SK-B-4	2.5Y 5/6 明黄褐色	粘　土	炭化物・焼土を多量に含む、2層より大型のブロックが堆積
SK-B-5	2.5Y 5/6 明黄褐色	粘　土	炭化物・焼土を多量に含む、ブロック状の堆積
SK-B-6	2.5Y 5/6 明黄褐色	シルト質粘土	炭化物・焼土を含む、ブロック状の堆積
SK-B-7	2.5Y 5/4 にぶい黄色	シルト質粘土	焼土のブロックを多量に含む
SK-B-8	10YR 7/8 明黄褐色	粘土質シルト	褐色土粒を含む
SK-B-9	10YR 7/8 明黄褐色	粘土質シルト	焼土のブロックを多く含む
SK-B-10	10YR 5/6 明黄褐色	シルト	褐色土粒を少量含む
SK-B-11	10YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	褐色土粒・焼土粒を含む
SK-B-12	10YR 2/3 黒褐色	粘土質シルト	焼土粒・炭化物土粒を含む
SK-B-13	10YR 4/4 褐　色	粘土質シルト	暗褐色土のブロックを含む
SK-B-14	10YR 3/4 暗褐色	粘土質シルト	赤褐色・暗赤褐色の焼土粒を多量に含む
SK-B-15	10YR 4/4 褐　色	粘土質シルト	焼土粒を少量含む
SK-B-16	10YR 5/6 褐　色	シルト質粘土	焼土粒を多量に含む、褐色土のブロックを含む
SK-B-17	10YR 5/4 にぶい黄褐色	粘　土	明黄褐色土を粒状に含む
SK-B-18	10YR 5/4 褐　色	粘土質シルト	浅黄色土を粒状に多く含む
SK-B-19	2.5Y 7/4 浅黄色	粘土質シルト	褐色土を粒状に少量含む
SK-B-20	10YR 5/4 褐　色	粘土質シルト	炭化物・焼土を多量に含む
SK-B-21	2.5Y 7/4 浅黄色	粘土質シルト	炭化物・焼土粒を多く含む
SK-B-22	2.5Y 7/4 浅黄色	粘土質シルト	炭化物・焼土粒を少量含む
SK-B-23	10YR 5/4 褐　色	粘土質シルト	上面に炭化物・焼土が分布、明黄褐色土の少ブロックを含む
SK-B-24	10YR 5/6 明黄褐色	粘土質シルト	褐色土粒を少量含む
SK-B-25	10YR 5/6 明黄褐色	粘　土	炭化物・焼土を粒状に含む
SK-B-26	10YR 5/4 褐　色	粘土質シルト	明黄褐色土のブロックを多量に含む、炭化物・焼土を多量に含む
SK-B-27	10YR 5/4 褐　色	粘土質シルト	炭化物・焼土を多量に含む
SK-B-28	10YR 5/4 褐　色	粘　土	炭化物・焼土を多量に含む
SK-B-29	2.5Y 5/6 明黄褐色	粘　土	炭化物・焼土を縞状に含む
SK-B-30	2.5Y 5/6 明黄褐色	粘　土	褐色粘土を粒状に含む

ピットNo	P 1	P 2
掘方形状	隅丸長方形	略 円 形
掘方規模	69×57cm	62×55cm
深　さ	83cm	60cm
柱痕形状	円　形	円　形
柱痕規模	14×13cm	18×17cm

〔遺物出土状況と出土遺物〕床面からの出土遺物はなく、堆積土・土坑から土師器・須恵器が少量出土しただけである。図化した土師器には坏と埦がある。坏は、やや平底化した丸みのある底部から湾曲しながら立ち上がり、外傾する口縁に至るものである。埦は浅鉢状のもので、体部が緩やかに湾曲して立ち上がり、口縁は直立気味になっている。須恵器は、坏の底部から体部にかけての破片で、丸底気味の平底の外面は丁寧に回転ヘラ削り調整がなされている。

SI－４竪穴住居跡　〔位置・遺存状況・重複〕調査区西部、SI－３竪穴住居跡の東側で検出され、南半部は調査区の外にのびる。耕作による掘削の深い部分は、床面も部分的に削平されている。特に検出部の西部の撹乱が著しい。西壁の一部はSI－３竪穴住居跡に切られている。

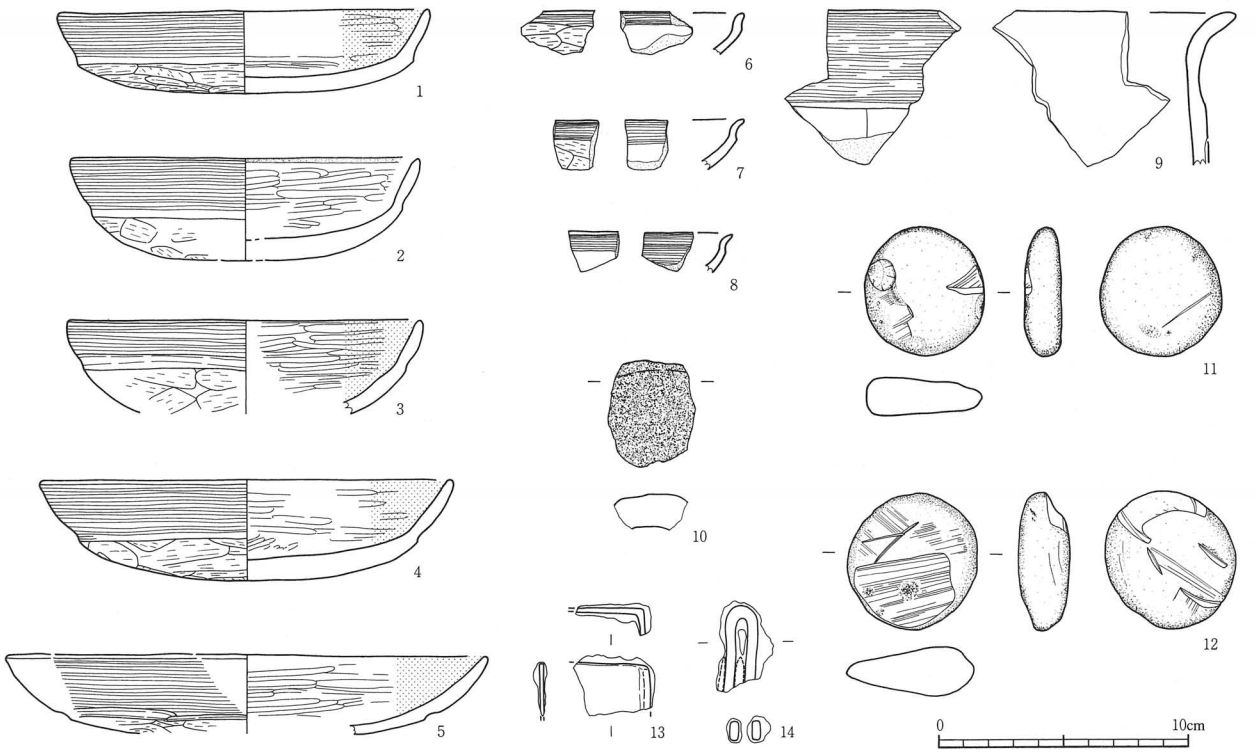
〔平面形・規模・方向〕平面形は、方形を呈するものと推定される。規模は、東西5.4m・検出部南北長3.1mを測る。方向はＮ－１°－Ｅである。

〔堆積土〕堆積土は、カマド部を除くと、褐色の粘土質シルトを主体とする。層厚は、厚いところで19cm程の覆土が残存する。

〔床面・壁面〕床面は、耕作の撹乱により部分的に失われているが、残存部は比較的平坦である。カマドのある北壁寄りには多数の土坑が重複して存在し、特にカマドに向って右側に多い。土坑のうちSK－２・６・７・９・10・13土坑の堆積土には焼土・炭化物が多く混入している。壁面は、ほぼ直線的で、立ち上がりは急である。

〔柱穴〕Ｐ．１・２が検出部の主柱穴で、円形の柱痕も確認されている。柱の間隔は295cmある。柱の北列と北壁との間隔は115cm、西壁とＰ．１間隔が105cm、東壁とＰ．２との間隔が110cmである。

〔カマド〕カマドは北壁の中央に位置している。焼け面と袖の状況から同位置で前後２時期の作り替えがある。新期のカマドは、前段階のカマドの燃焼部を、カマドの基部とともに数cmの厚さで粘土で覆い、カマド基底部を10cm程高くしてから本体を構築したと考えられる。（第24図上）



(cm・g)

番号	登録番号	種　別	器　種	遺構番号	出土位置	取上番号	器高	口径	底径	外　　面	内　　面	写真図版
1	C－12	土師器	坏	SI－４	床面	№１	3.3	14.8	13.4	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ	12－７
2	C－13	土師器	坏	SI－４	床面	№３	4.1	14.0	12.4	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ・非内黒	12－８
3	C－16	土師器	坏	SI－４	SK－6・埋土・2層		(3.7)	14.0		ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ	12－11
4	C－14	土師器	坏	SI－４	１層		4.0	16.6	13.4	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ	
5	C－15	土師器	坏	SI－４	SK－３・１層		(3.1)	19.2	14.0	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ	12－10
6	C－17	土師器	坏	SI－４	１層		(1.7)			ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・関東系	13－１
7	C－18	土師器	坏	SI－４	１層		(2.0)			ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・関東系	13－２
8	C－19	土師器	坏	SI－４	１層		(1.6)			ヨコナデ	ヨコナデ・関東系	13－３
9	C－20	土師器	甕	SI－４	床面		(6.1)			ヨコナデ・ヘラナデ		

番号	登録番号	種　別	器　種	遺構番号	出土位置	取上番号	全長	幅	厚さ	重量	特　　徴	写真図版
10	P－４	土製品	羽口	SI－４	１層		(4.3)	(3.5)	1.4		先端部破片	19－６
11	K－４	石製品	不明	SI－４	SK－７		5.3	4.9	1.6	29	金属器による擦痕・削り痕	18－７
12	K－３	石製品	不明	SI－４	SK－７		5.5	5.2	2.0	35.5	金属器による擦痕・削り痕	
13	N－４	鉄製品	不明	SI－４	１層		(1.9)	(3.3)	(0.6)	9.0	鎌？	20－10
14	N－５	鉄製品	不明	SI－４	SK－６・２層		(3.6)	(2.2)	(1.0)	11.0		20－12

第25図　SI－４竪穴住居跡出土遺物

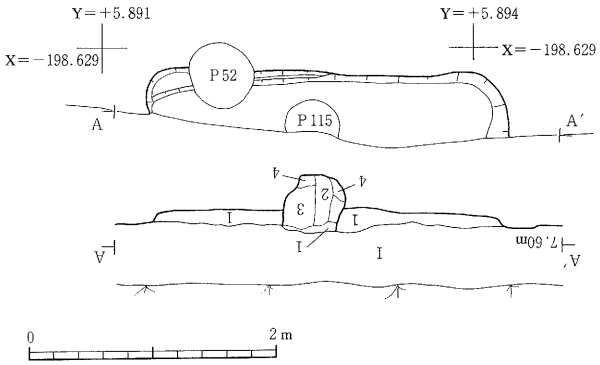
古期のカマドは床面上にカマド本体を構築している。カマド袖の基部は、左右対称でなく、右袖の焚き口側の端部が左袖に比べて大きく内側に折れ曲がり、袖の先端はカマドの中軸近くに位置している。これは、焚き口がカマド中央より左に寄って作られていたことを示すと考えられる。袖の変化と対応し、カマド内部も底面の強く焼けた部分が左側に寄っている。古期のカマドの袖の下からは土坑が検出され、SK－13土坑のように多量の焼土混じりの土壌が検出されていることから、古期としたカマド以前にも別のカマドが存在した可能性がある。

〔周溝〕周溝は、検出された各壁面下に存在しているが、北壁面のカマド部分は掘り残されている。周溝の幅は、平均的な部分でも22～45cmと開きがあり、北東角付近はさらに幅が広い。深さは15～20cm程で、断面形は逆台形を基本としているが、西壁部は周溝内側壁面の途中にテラス状の平坦部が形成されている。北壁の底面には、掘削の際の工具による痕跡と想定される小さな凹凸がある。

〔掘り方〕掘り方の埋め戻し土層の厚さは、10～20cm程で、掘り方の底面には緩やかな凹凸がある。掘り方の埋め土は、基本層Ⅱ層に由来する明黄褐色のシルト質粘土層である。

〔遺物出土状況と出土遺物〕カマド脇の床面から土師器坏が３個体出土したほか、住居跡堆積土及び床面検出遺構

中からも、土師器を主とする多数の遺物が出土している。図化した遺物には、土師器・石製品・鉄製品・土製品がある。土師器はいずれもロクロを使用していないもので、坏と甕がある。坏は、口径の割に器高の低い丸底のものである。底部と口縁部の境は、外面にはいずれも段が形成され、内面には角が形成されるものと、丸く緩やかに湾曲するものがある。また、「関東系土師器」と呼ばれている、内外面とも橙色を呈し、口縁部がＳ字状に屈曲する薄手で小型の坏片（Ｃ－17・18・19）も出土している。甕は小片が多いが、その中に頸部と口縁部の境の外面に軽い段が形成され、口縁が強く外反するものがある。石製品は、直径が５cm程の扁平な自然石で、表面に金属器によると観察される擦痕や削った跡が観察されるものが２個出土している。鉄製品は、鉄の棒を輪状に折り曲げたものと、片方の端部が折れ曲がっている板状の製品がある。土製品は羽口の破片が出土している。



土層No	土　色	土　質	備　考
Ⅰ	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色	シルト	耕作土
SI-5-1	10YR 5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	明黄褐色土粒を少量含む
P15-1	10YR 2/3 黒褐色	粘土質シルト	明黄褐色土・にぶい黄褐色土粒を含む
P15-2	10YR3/3 暗褐色	粘　土	にぶい黄褐色土粒を少量含む
P15-3	10YR 2/3 黒褐色	シルト質粘土	明黄褐色土・にぶい黄褐色土のブロックを多量に含む
P15-4	10YR7/6 明黄褐色	シルト質粘土	黒褐色土粒を少量含む

規　模	方向（カマド中心）	カマド位置	壁残存高	重　複	主柱穴	時　期
2.9×（0.6）m	（N－90°－E）		11～3cm	－		?

第26図　SI－５竪穴遺構

SI－５竪穴遺構　〔位置・遺存状況・重複〕調査区中央部、SI－４竪穴住居跡の東側で、遺構の北端部が検出された。南半部は調査区の外にのびる。P.52・115切られているが、竪穴住居跡との重複はない。

〔平面形・規模・方向〕平面形は、方形を呈するものと推定される。規模は、東西2.9m・検出部南北長0.6mを測る。一辺の長さが３mにも満たないことなどから、竪穴住居跡とは別の遺構の可能性が高い。北辺の方向はＮ－90°－Ｅである。

〔堆積土〕堆積土は、にぶい黄褐色の粘土質シルト層１層である。

〔床面・壁面〕床面は、ほぼ平坦である。壁面は直線的で、立ち上がりは比較的急であるが、北壁の西半分には、途中にテラス状の段がある。

〔柱穴・カマド・周溝〕いずれも検出されていない。

〔掘り方〕掘り方及びその埋め戻し土層はない。

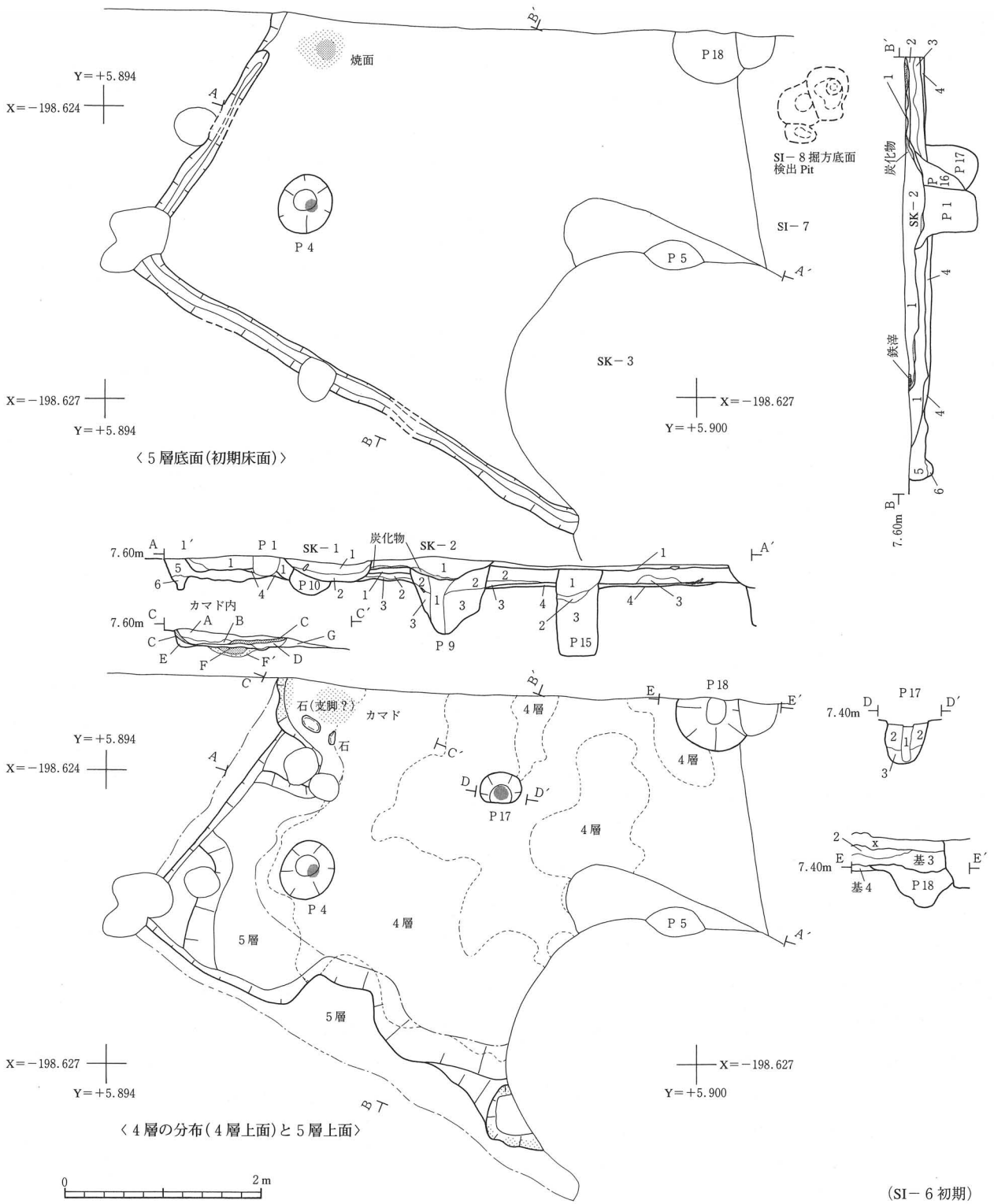
〔遺物出土状況と出土遺物〕堆積土中から土師器細片が６点出土しただけで、図化した遺物はない。

SI－６竪穴住居跡　〔位置・遺存状況・重複〕調査区中央部の北側で検出された。SK－３土坑・SI－７・８竪穴住居跡に東辺を切られ、北辺部は調査区外にのびている。後述のように５時期程度の床面の改変がある。改変毎に床面のレベルが高くなり、最終床面の一部は耕作による削平を受けている。平面形は、初期プランでは方形を呈していたと考えられるが、その後３時期の改変があり、改変毎にプランの変形と規模の縮小が行われている。以下、各段階毎の概要を古い順に記述する。

＜５層底面－初期床面－段階＞（第27図上）

〔平面形・規模・方向〕平面形は、方形を呈するものと推定される。規模は、東西検出部長5.6m・南北検出部長5.2mを測る。方向はＮ－58°－Ｅである。

〔床面・壁面〕床面は比較的平坦である。床面は、西北壁中央付近で検出された焼け面と、柱穴と考えられるＰ．４及び周溝があるだけで、遺構は少ない。焼け面は位置関係からカマドに伴う焼土と考えられる。



(SI－６初期)

規　模	方向（カマド中心）	カマド位置	壁残存高	重　　複	主 柱 穴	時　期
(5.3×4.9) m	N－58°－W	北西壁中央	17～０cm	SI－６ ⇨ SI－７ ⇨ SK－３	Ｐ４（Ｐ５・12）	(Ｉａ～Ｉｂ期)

第27図　SI－６竪穴住居跡(1)

〔柱穴〕Ｐ．４が住居跡の対角線上に位置することから、南西角の主柱穴と考えられる。Ｐ．４を、カマドを反映する焼土面を通る住居跡東西軸線で折り返した位置に北西角の主柱穴が存在すると推定され、その間隔は約3.4mと復元される。Ｐ．４を3.4m南東の方向に展開した南東角の主柱穴は、SK－３土坑の中央付近となる（第28図下）。この柱配置で、北東角の主柱穴の位置を推定すると、SI－８竪穴住居跡の掘り方底面で検出されたピット状の落ち込みの位置にあたり、前記の推定復元と符合する（第27図上）。

〔カマド〕カマドは残存していないが、焼け面の存在と、その部分で他の竪穴住居跡と同様に周溝が途切れることから、西北壁中央に位置していたと考えられる。焼け面の中心は、壁面から約65cm離れている。

第28図　SI－６竪穴住居跡(2)

〈SI－６〉

ピットNo	P－4	P 5	P 6	P 9	P10	P11
掘方形状	円　形	円 形 ?	円　形	不整楕円形	略 円 形	略 円 形
掘方規模	50×48cm	58×（23）cm	47×44cm	76×61cm	47×44cm	35×34cm
深　さ	40cm	55cm	32cm	71cm	25cm	31cm
柱痕形状	円　形	円　形	－	円　形	－	円　形
柱痕規模	13×12cm	17×（8）cm	－×－cm	18×16cm	－×－cm	12×13cm

ピットNo	P12	P13	P14	P15	P16	P17	P18
掘方形状	不整楕円形	不整楕円形	楕円形?	不整楕円形	楕 円 形	円 形 ?	円　形
掘方規模	54×（33）cm	43×36cm	28（20）cm	71×（53）cm	60×（41）cm	42×（32）cm	77×（55）cm
深　さ	44cm	7cm	23cm	37cm	42cm	52cm	35cm
柱痕形状	－	－	－	－	－	円　形	－
柱痕規模	－×－cm	－×－cm	－×－cm	－×－cm	－×－cm	17×14cm	－×－cm

土層No	土　色	土　質	備　考
SK-1·1	2.5Y5/2 暗灰黄色	粘　土	炭化物・焼土・明黄褐色土を多量に含む
SK-1·2	2.5Y5/3 オリーブ褐色	粘　土	明黄褐色土のブロックを多く含む
SK-2·1	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭化物片及び焼土ブロックを多く含む
SK-2·2	10YR1.7/1 黒　色	炭化物	炭化物（炭）の集積
SK-2·2'	2.5Y5/3 オリーブ褐色	粘土質シルト	炭化物を多量に含む
SK-2·2''	2.5Y5/4 黄褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土を縞状に含む
住居跡1	7.5Y4/3 褐　色	粘土質シルト	炭化物粒・焼土粒・灰を含む
住居跡1	10YR5/6 黄褐色	シルト	明黄褐色土粒を含む
住居跡2	2.5Y7/4 浅黄色	粘土質シルト	黄褐色土粒・炭化物・焼土を含む
住居跡3	10YR5/6 明黄褐色	粘　土	黄褐色土をブロック状に含む、焼土・炭化物を含む
住居跡4	2.5Y7/4 浅黄色	粘　土	明黄褐色土のブロックを含む　（貼床）
住居跡5	10YR5/6 明黄褐色	シルト質粘土	暗褐色土の小ブロックを含む
住居跡6	10YR5/6 黄褐色	シルト質粘土	（周溝埋土）
カマドA	10YR7/6 明黄褐色	粘　土	暗褐色土粒を少量含む、しまりあり
カマドB	10YR5/6 明黄褐色	粘　土	炭化物・焼土を多く含む、しまりなし
カマドC	5YR7/6 橙　色	焼　土	焼面　5層上面～4層上面期カマド
カマドD	10YR5/6 明黄褐色	粘　土	基本層4層が変色　5層上面～4層上面期カマド
カマドE	10YR5/6 明黄褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土を多量に含む
カマドF	5YR7/6 橙　色	焼　土	焼面上部　5層底面カマド
カマドF'	5YR3/4 暗赤褐色	焼　土	焼面下部　5層底面カマド
カマドG	2.5Y7/3 浅黄色	粘　土	基本層4層
P17·1	10YR7/6 明黄褐色	粘　土	にぶい黄褐色土粒を多く含む
P17·2	10YR7/6 明黄褐色	粘　土	にぶい黄褐色土のブロックを多量に含む
P17·3	10YR7/6 明黄褐色	粘　土	暗褐色土のブロックを含む
P18	10YR7/6 明黄褐色	粘　土	にぶい黄褐色土粒・炭化物・焼土を多く含む
焼面a	7.5YR5/6 橙　色	焼　土	
焼面b	10YR1.7/1 黒　色	炭化物	炭化物（炭）の集積
SK-3·1	10YR5/6 明黄褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土を少量含む

土層No	土　色	土　質	備　考
SK-3·2	2.5Y5/6 明黄褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土粒を多量に含む
SK-4·1	10YR6/4 にぶい黄橙色	粘土質シルト	炭化部・焼土を多量に含む
SK-4·2	10YR6/4 にぶい黄橙色	粘土質シルト	
P16·1	10YR5/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	明黄褐色土粒・暗褐色土粒を多く含む
P16·2	10YR5/6 明黄褐色	粘　土	にぶい黄褐色土・暗褐色土・炭化物を多く含む
P4·1	10YR3/3 黒褐色	シルト質粘土	明黄褐色土粒・炭化物粒を少量含む
P4·2	10YR3/4 暗褐色	粘土質シルト	明黄褐色土の小ブロックを多く含む
P4·3	10YR5/6 明黄褐色	粘　土	暗褐色土粒を少量含む
P5·1	2.5Y7/4 浅黄色	シルト質粘土	明黄褐色土・褐灰色土粒及び炭化物・焼土を含む
P5·2	10YR5/6 明黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色土のブロックを含む
P5·3	10YR5/6 明黄褐色	粘土質シルト	暗褐色土粒を多く含む
P5·4	10YR7/6 明黄褐色	粘土質シルト	暗褐色土粒を少量含む
P10·1	10YR2/2 黒褐色	シルト質粘土	明黄褐色土を多く含む
P10·2	10YR5/6 明黄褐色	粘土質シルト	黒褐色土粒を少量含む
P11·1	2.5Y3/2 黒褐色	シルト質粘土	明黄褐色土粒を多く含む
P11·2	2.5Y3/2 黒褐色	シルト質粘土	明黄褐色土をブロック状に含む
P12·1	2.5Y5/3 オリーブ褐色	粘土質シルト	明黄褐色土粒を含む
P12·2	2.5Y5/3 オリーブ褐色	粘土質シルト	明黄褐色土の小ブロックを多く含む
P12·3	2.5Y5/2 暗灰黄色	シルト質粘土	明黄褐色土の小ブロックを含む
P12·4	2.5Y5/6 明黄褐色	粘　土	暗灰黄色土粒を少量含む
x	10YR5/4 褐　色	シルト	明黄褐色土・暗褐色土を含む、焼土・炭化物を少量含む
P9·1	2.5Y5/3 黄褐色	粘　土	明黄褐色土のブロック・炭化物粒を多く含む
P9·2	2.5Y7/4 浅黄色	粘　土	炭化物・焼土粒を含む
P9·3	2.5Y5/4 にぶい黄色	粘　土	明黄褐色土・暗オリーブ褐色土のブロックを多量に含む
P15·1	2.5Y7/4 浅黄色	粘　土	黒褐色土をブロック状に多く含む
P15·2	2.5Y7/4 浅黄色	粘　土	黒褐色土をブロック状に少量含む
P15·3	2.5Y7/4 浅黄色	粘　土	黒褐色土を粒状に少量含む

〔周溝〕周溝は、各壁面直下の床面で検出されたが、カマドが存在したと推定される部分は掘り残されている。周溝の幅は15～20cmである。

〔掘り方〕掘り方及びその埋め戻し土層はない。

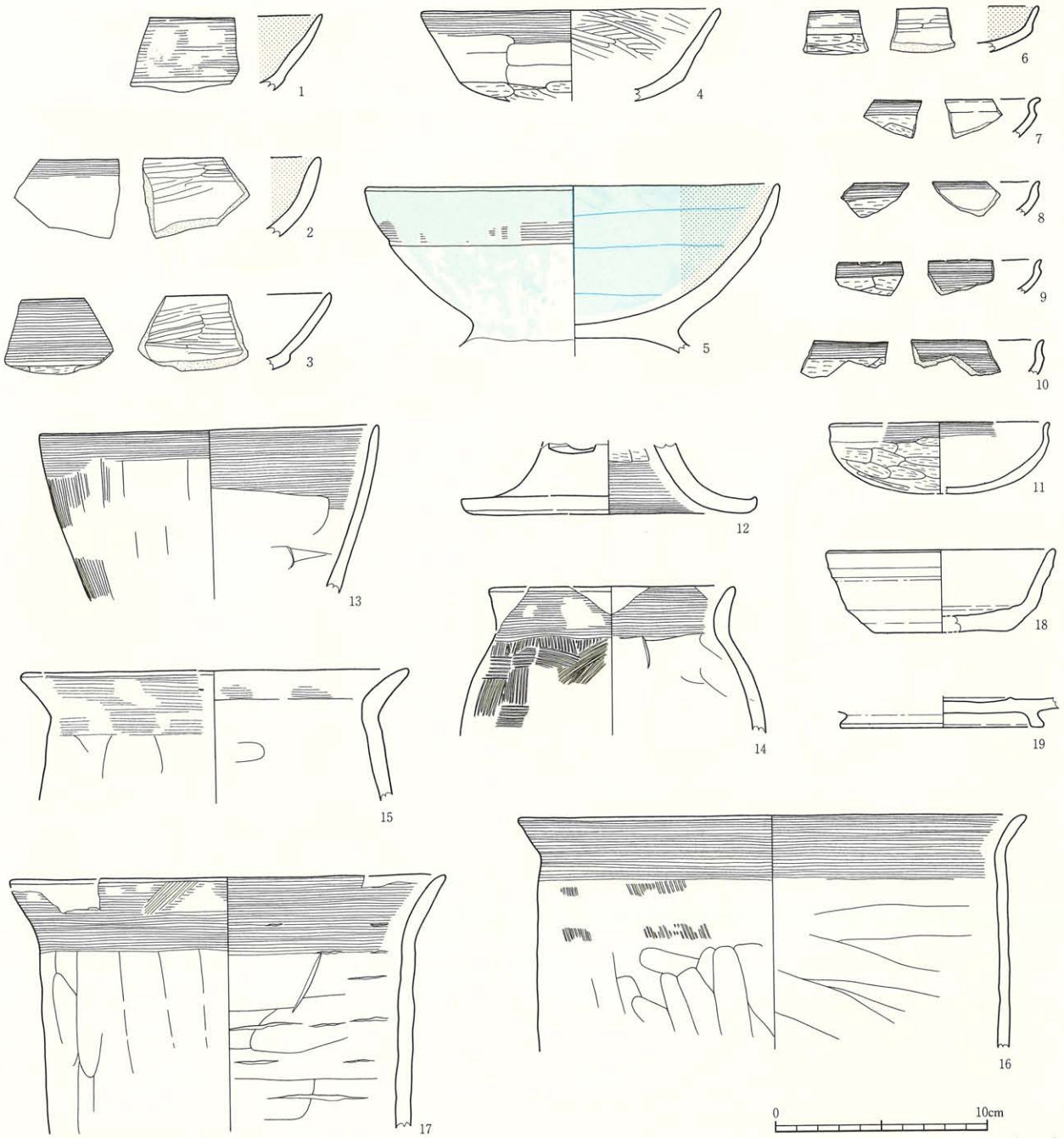
＜５層上面と4層上面段階＞（第27図下）

〔平面形・規模・方向〕１回目の改変は、基本層Ⅱ層に類似する明黄褐色土（５層）を、住居跡の壁面に沿って貼りつけるように敷設して竪穴の規模を縮小している。平面形は、基本的には前段階と同様に方形を呈するが、南西壁面には凹凸が見られ、壁面の傾斜は緩やかになっている。さらに、住居跡中央付近には３～５cmの厚さで貼り床（４層）を施している。規模は、東西検出部長5.4m・南北検出部長5.2mとなり、方向はN－58°－Eで変化はない。５層の壁際への貼り付けと４層の貼り床との間には、５層上面に際立った汚れが確認されないことから、作業工程に伴う時間差は存在するとしても、長期の時間差は無かったものと解釈される。

〔床面・壁面〕床面は比較的平坦であるが、壁際の床面は緩やかに傾斜しながら高くなっている。壁面の傾斜は、前段階と比較するとかなり緩やかになっている。

〔柱穴〕Ｐ．４が主柱穴として存続する。新に柱痕跡を有するＰ．17・18が検出されているが、役割は不明である。

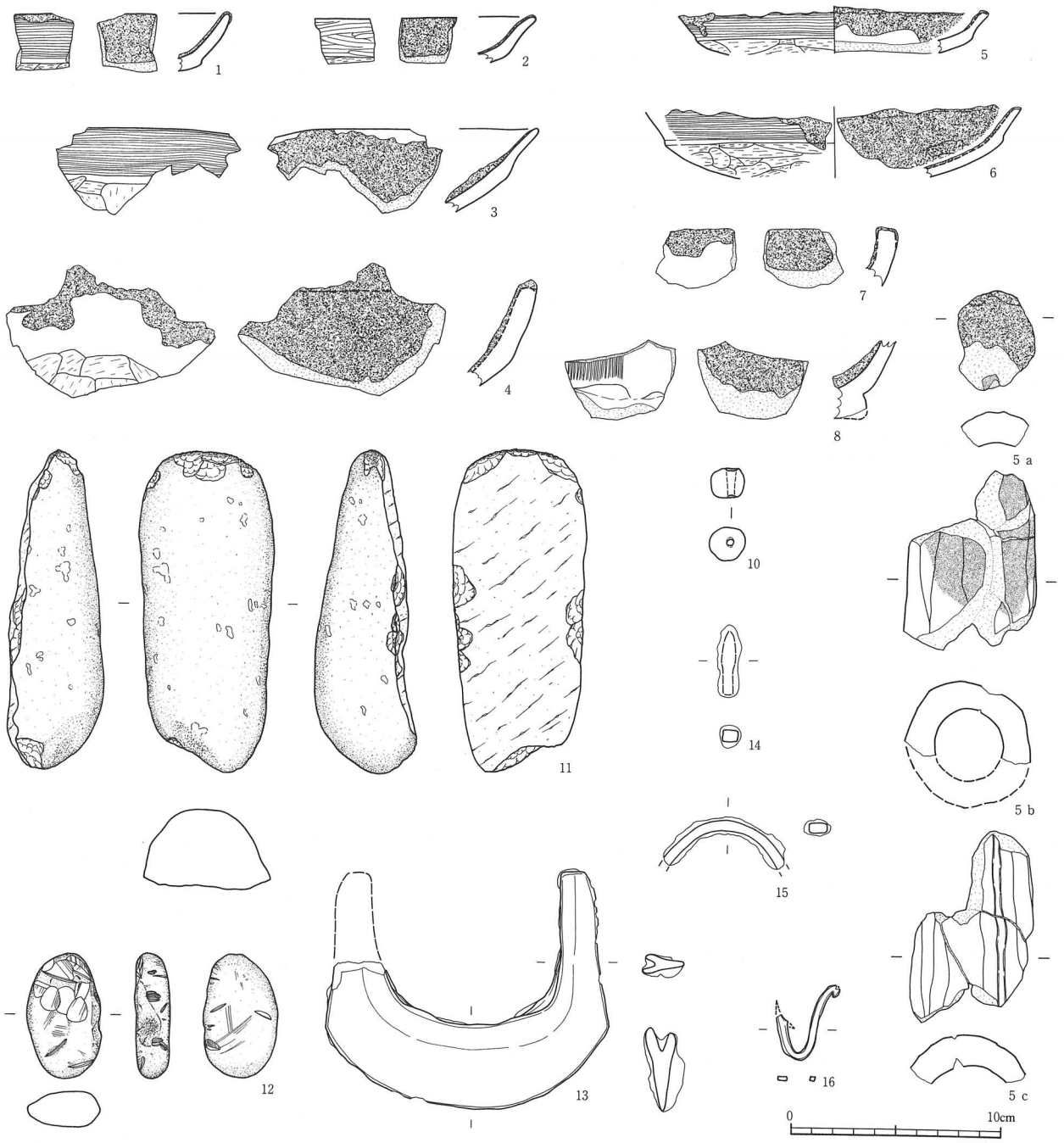
〔カマド〕カマドは、前段階と同位置に築かれ、左袖の基部が残存する。前段階の焼土面は明黄褐色土（４層）によって覆われている。焼け面の受熱状況は前段階よりも弱い。カマドの支脚として使用された可能性のある柱状の石材が横転した状態で出土している。



(cm・g)

番号	登録番号	種　別	器　種	遺構番号	出土位置	取上番号	器高	口径	底径	外　　面	内　　面	写真図版
1	C－28	土師器	坏	SI－6	P５掘り方		(3.5)			ヨコナデ		12－13
2	C－25	土師器	坏	SI－6	P６		(3.7)			ヨコナデ・ナデ	ヘラミガキ	
3	C－29	土師器	坏	SI－6	２層		(3.6)			ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ	12－14
4	C－27	土師器	坏	SI－6	２層		(4.3)	14.0		ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ	12－15
5	C－31	土師器	台付坏	SI－6	２層		(8.0)	19.5		ヨコナデ・樹脂付着	樹脂付着	14－3
6	C－26	土師器	坏	SI－6	１層		(2.2)			ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ	
7	C－42	土師器	坏	SI－6	P12		(1.8)			ヨコナデ・ヘラケズリ	関東系	13－5
8	C－44	土師器	坏	SI－6			(1.6)			ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・関東系	13－7
9	C－45	土師器	坏	SI－6	１層		(1.6)			ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・関東系	13－8
10	C－43	土師器	坏	SI－6	１層		(1.7)			ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・関東系	13－6
11	C－41	土師器	坏	SI－6	２・３層		3.4	10.4		ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・関東系	13－4
12	C－24	土師器	高坏脚	SI－6	SK－２－２層	No３	(3.4)		14.0	３方透し	ヘラケズリ・ヨコナデ	12－12
13	C－30	土師器	鉢	SI－6	５層		(7.9)	16.0		ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	14－10
14	C－40	土師器	甕	SI－6	P１・１層		(7.0)	(11.6)		ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ	
15	C－22	土師器	甕	SI－6	１層		(6.3)	(18.3)		ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	
16	C－21	土師器	甕	SI－6	１層		(11.0)	24.0		ヨコナデ・ハケメ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	14－9
17	C－23	土師器	甕	SI－6	１層		(12.0)	(20.6)		ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ナデ	
18	E－2	須恵器	坏	SI－6	５層		(3.9)	(10.8)	(6.6)	ロクロ・底部ナデ	ロクロ	17－2
19	E－3	須恵器	高台坏	SI－6	５層		(1.4)		9.5		ロクロ	

第29図　SI－６竪穴住居跡出土遺物(1)



(cm・g)

番号	登録番号	種　別	器　種	遺構番号	出土位置	取上番号	器高	口径	底径	外　　面	内　　面	写真図版
1	C－34	土師器	坏(とりべ)	SI－6			(2.8)			ヨコナデ・ヘラケズリ	溶解物付着	
2	C－37	土師器	坏(とりべ)	SI－6	P４掘り方		(2.2)			ヘラミガキ	溶解物付着	
3	C－32	土師器	坏(とりべ)	SI－6	１層		(4.0)			ヨコナデ・ヘラケズリ	溶解物付着	13－9
4	C－33	土師器	坏(とりべ)	SI－6	２層		(5.1)			ナデ・ヘラケズリ	溶解物付着	13－10
5	C－36	土師器	坏(とりべ)	SI－6	SK－2－1層・2層		(2.3)	(14.7)		ヨコナデ・ヘラケズリ	溶解物付着・口縁再生	13－15
6	C－35	土師器	坏(とりべ)	SI－6	P４掘り方		(3.4)	(17.8)		ヨコナデ・ヘラケズリ	溶解物付着・口縁再生	
7	C－39	土師器	甕(とりべ)	SI－6	１層		(2.8)			溶解物付着	溶解物付着	13－14
8	C－38	土師器	甕(とりべ)	SI－6	２層		(3.7)			ハケメ・ナデ	溶解物付着	13－13

番号	登録番号	種　別	器　種	遺構番号	出土位置	取上番号	全長	幅	厚さ	重量	特　　徴	写真図版
9	P－5	土製品	羽口	SI－6	SK－２・２層		(9.2)	(6.8)	1.6		外面ヘラケズリ調整	19－8
10	P－7	土製品	土玉	SI－6	検出面		1.4	1.6	1.7	3.5	直径３mmの円孔	19－9
11	K－5	石製品	叩石	SI－6	SK－３・１層		15.5	5.5	3.8	46.3		18－3
12	K－6	石製品	不明	SI－6	SK－２・１層		5.9	3.5	1.8	26.5	擦痕削り痕あり	18－8
13	N－20	鉄製品	U字鍬先	SI－6	２層上面		11.5	13.5	1.6	191.0		20－14
14	N－7	鉄製品	不明	SI－6	１層		(3.4)	(1.1)	(1.1)	7.0		20－22
15	N－8	鉄製品	不明	SI－6	１層		(2.4)	(5.7)	(0.8)	18.5	輪状製品の破片	20－16
16	N－27	鉄製品	釣針？	SI－6	１層		(3.6)	(3.0)	(0.2)	3.0	ちもと折返し	20－13

第30図　SI－６竪穴住居跡出土遺物(2)

〔周溝〕この段階以降周溝は存在しない。

＜２層上面段階＞（第28図上）

〔平面形・規模・方向〕２回目の改変は、先のプランをさらに炭化物や焼土の混入する２・３層で埋め、竪穴の南北幅を狭く作り変えている。竪穴の上部が削平を受けているために、狭くなって長方形を呈するプランが竪穴の全体の規模であるのか、南北の両壁際が一段高くなって、前段階と同様の規模の方形プランを呈していたのか判断できない。狭くなった部分の大きさは、東西検出部長5.4m・南北幅3.2mを測る。軸方向は基本的に前２段階と変わらない。

〔床面・壁面〕床面は緩やかな凹凸があるが、比較的平坦である。南西部は、次段階（１層）の改変による削平を受けている。この段階の床面では新に数基のピットが掘られている。また、北壁中央近くには、強く焼けた床面と、その横に炭と焼土を多量に含む土坑（SK－４土坑）が検出されている。壁面は緩やかに立ち上がる。なお、２層を敷設する際に竪穴の中央付近に土師器の高台坏（C－31）を正立の状態で埋め込んでいる。この土器の内外面には漆と観察される樹脂が付着し、内面にはヘラ状の工具で器壁に沿って撫でた痕跡が残っている。

〔柱穴〕P.４は主柱穴として存続すると考えられ、P.４と狭くなったプランと対応するようにP.12・P.５が直角に位置して並ぶ。この東西が長く、南北に短い柱配置は、北壁を2層の立ち上がりに、南壁を４・５層の立ち上がりとした場合に、竪穴のほぼ中央に位置する。

〔カマド〕カマドは、この段階になると廃絶される。

＜１層上面－SK－２－段階＞（第28図下）

〔平面形・規模・方向〕この段階では、２層上面段階の凹地を１層によって埋めた後、新に不整形の土坑（SK－２土坑）を掘削し、その不整形の凹面を床面としている。SK－２土坑は、検出面は不整形のプランで、大きさは東西3.5m・検出部南北長約3.5mを測る。土坑に方向性は認められないが、建物自体は前段階の柱を踏襲していると考えられる。

〔床面・壁面〕SK－２土坑の床面は、中央部が窪んで皿状になっている。床面には、全面的に炭化物が分布して汚れている。炭化物は厚いところで２cm前後の層状に堆積している。また、土坑の北部と西部に、床面が強く焼けている部分か検出されている。壁面の立ち上がりは緩やかである。

〔柱穴〕P.４・P.12・P.５が柱穴として存続すると考えられる。

〔カマド〕カマドはない。

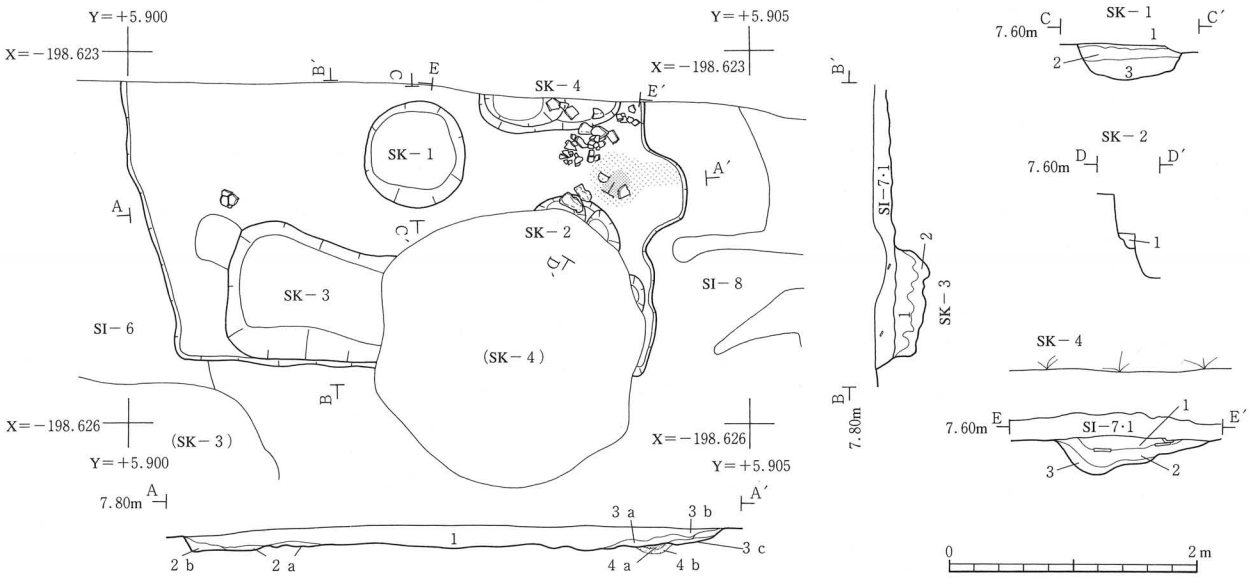
以上のようにSI－６竪穴住居跡は４段階の変遷をしている。

〔遺物出土状況と出土遺物〕SI－６竪穴住居跡からは多数の遺物が出土している。特に１・２層以降の床面及び堆積土中からの出土遺物が多い。遺物の種別としては、土師器・須恵器・石製品・鉄製品・土製品がある。出土土師器は、ロクロを使用しないもので、坏・台付坏・高坏・鉢・甕がある。坏には在地の丸底坏のほかに「関東系土師器」の坏片（C－41・42・43・44・45）も多数含まれている。また、トリベに転用されて溶解物が付着した土師器の破片も多数出土している。須恵器は、図化した坏片２点のほか、甕の破片も多数出土している。石製品としては、割れた自然石を叩き石として使用したものと、擦痕と削り痕跡のある小礫がある。鉄製品は、U字状鍬先・釣針などがある。土製品には、羽口の破片と土玉がある。また、２層より上層では鉄滓が多量に出土している。

SI－７竪穴住居跡　〔位置・遺存状況・重複〕調査区東部北側で検出され、北半部は調査区の外にのびる。SI－６・８竪穴住居跡を切り、南東部をSK－４土坑に切られている。

〔平面形・規模・方向〕平面形は、方形を基調とするものと考えられるが、検出部の西南角は鈍角となり、西壁中央部にかけて広がっている。規模は、東西4.2m・検出部南北長2.2mを測る。方向はN－89°－Eである。

〔堆積土〕堆積土は、にぶい黄褐色のシルト質粘土を主体とする。層中に所謂「灰白色火山灰」と観察される白色



規　模	方向（カマド中心）	カマド位置	壁残存高	重　複	主柱穴	時　期
4.2×（2.2）m	N－89°－E	東壁中央	15～12cm	SI－8 ⇨ SI－6 ⇨ SI－7	不明	Ⅱc期

土層No	土　色	土　質	備　考
1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	炭化物・焼土を少量含む、底面に炭化物分布、灰白色火山灰を少量含む
2 a	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	明黄褐色土を縞状に含む
2 b	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	明黄褐色土をブロック状に多量に含む
3 a	10YR3/2 黒褐色	粘　土	焼土・炭化物を多量に含む
3 b	10YR3/2 黒褐色	粘　土	焼土のブロックを含む
3 c	2.5Y7/6 明黄褐色	シルト質粘土	炭化物を含む
4 a	5Y6/6 橙黄色	焼　土	焼面上部
4 b	5YR3/2 明赤褐色	焼　土	焼面下部
SK-1-1	10YR 3/4 褐　色	粘土質シルト	炭化物・焼土・明黄褐色土粒を多量に含む

土層No	土　色	土　質	備　考
SK-1-2	10YR 5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土を少量含む、明黄褐色土粒を多く含む
SK-1-3	10YR 5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土・明黄褐色土粒を含む、灰白色火山灰粒を含む
SK-2-1	10YR 3/4 暗褐色	粘土質シルト	炭片及び焼土ブロックを多く含む
SK-3-1	10YR 3/4 褐　色	粘土質シルト	炭化物片を多く含む、焼土粒・明黄褐色土粒を含む
SK-3-2	10YR 5/6 黄褐色	シルト質粘土	明黄褐色土・暗褐色土のブロックを多く含む
SK-4-1	10YR 5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	明黄褐色土粒を少量含む
SK-4-2	10YR 5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	明黄褐色土粒を多量に含む
SK-4-3	10YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	明黄褐色土粒・炭化物・焼土を少量含む

第31図　SI－７竪穴住居跡

の土壌が少量含まれている。

〔床面・壁面〕床面はほぼ平坦であるが、炭化物・焼土粒によって汚れている。床面上では大型の土坑が４基検出されている。壁面は、南壁は直線的であるが、西壁は多少の出入りがある。壁面の立ち上がりは急である。

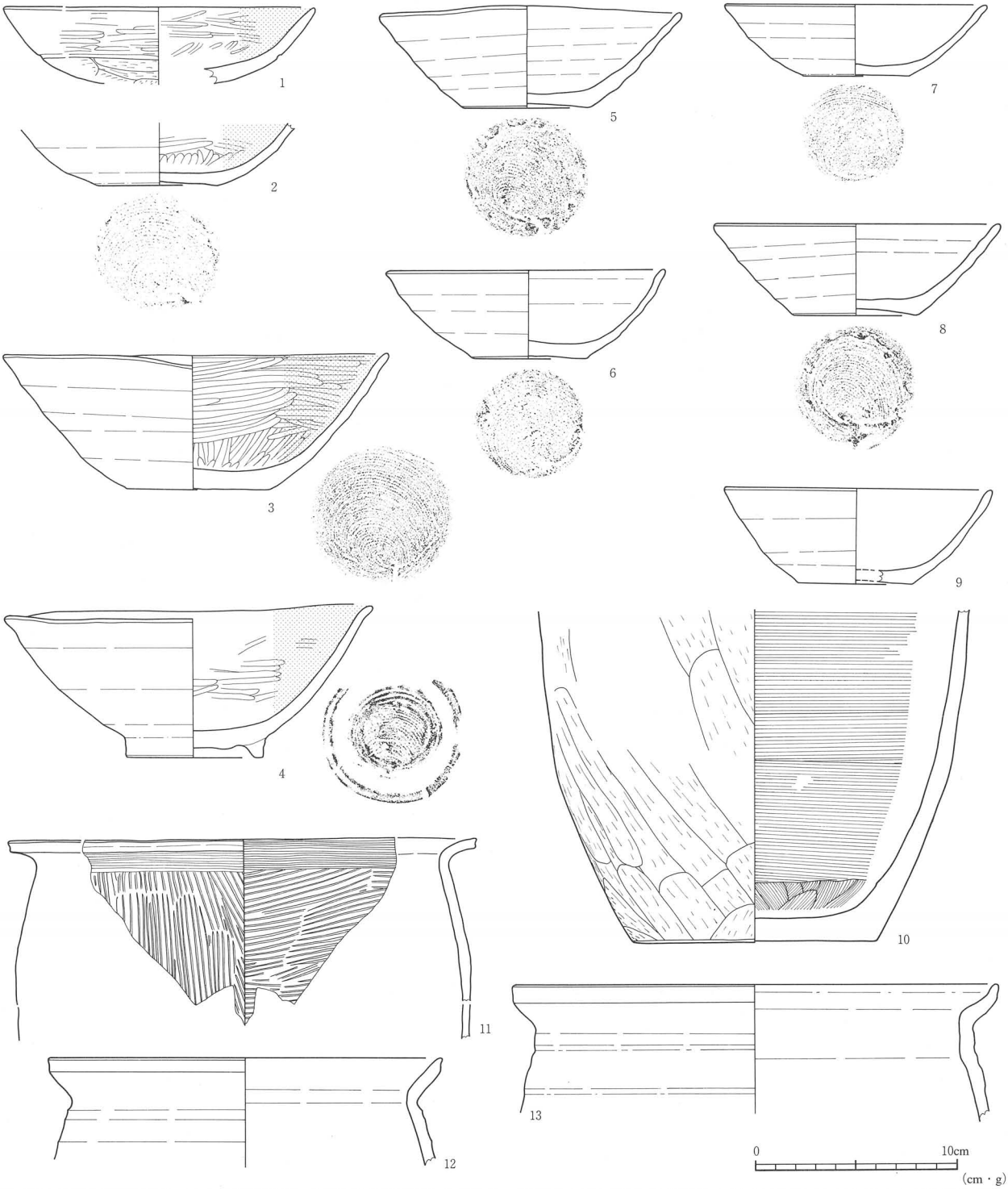
〔柱穴〕柱穴と考えられるピットは検出されなかった。

〔カマド〕カマドは東壁に位置している。この住居の平面プランが正方形であると推定した場合、東壁におけるカマドの位置は、南壁寄りの三等分線付近にあたる。カマドの奥部は壁面の外側へ30cm程Ｕ字状に張り出している。カマド底面に残る焼け面は、左の袖に寄った位置で検出されている。

〔周溝〕周溝は検出されていない。

〔掘り方〕掘り方は検出されていない。

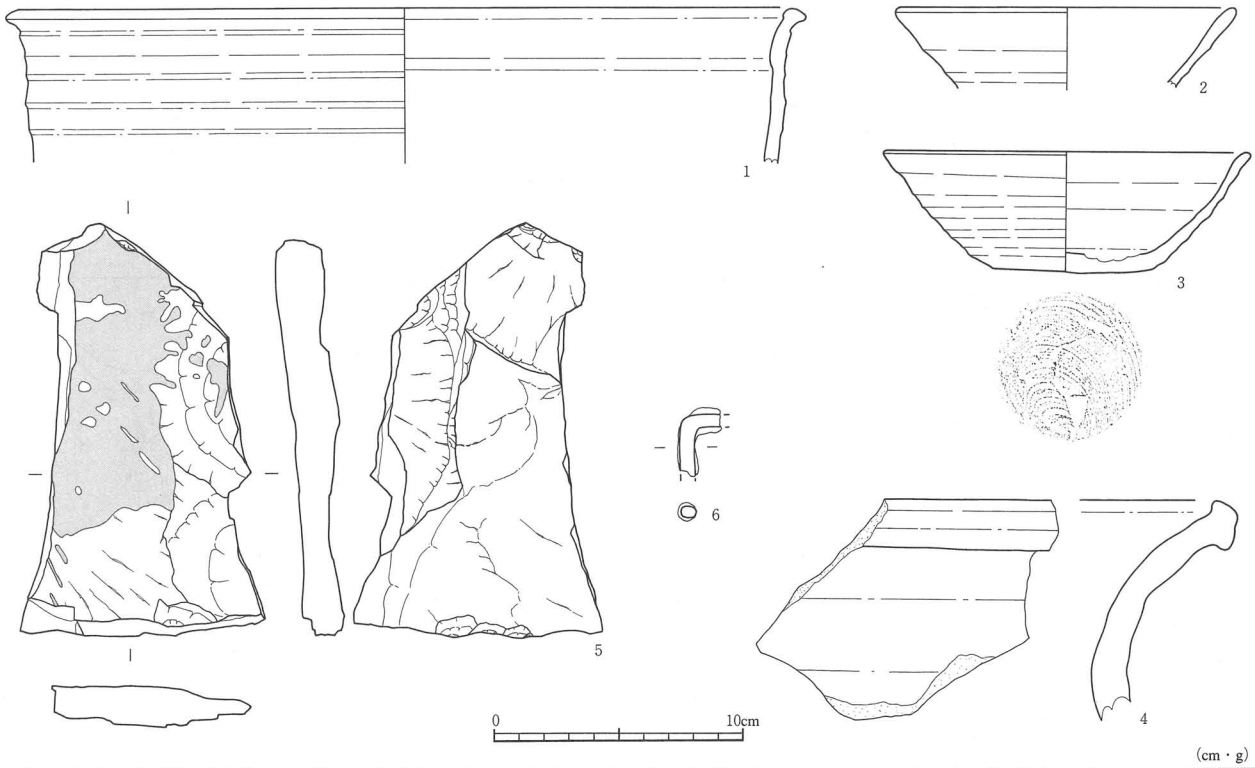
〔遺物出土状況と出土遺物〕カマド周辺の床面などから遺物がまとまって出土している。出土遺物には、土師器・須恵器・石製品・鉄製品がある。土師器はロクロを使用したものが主となっており、ロクロを使用していないものは混入品と考えられる。ロクロ使用の土師器には、坏と甕がある。坏はロクロ調整の後に内面へラミガキのうえ黒色処理されたものと、ロクロ調整だけで黒色処理されないものとがある。ロクロ使用の土師器甕は、口縁部が受け口状のもの（Ｄ－６・７）と、端部が僅かに外反するだけのもの（Ｄ－９）がある。須恵器は、坏と甕が出土している。坏は回転糸切り無調整のもので、器高の割に底径が小さい。石製品は結晶質安山岩の板状剥片を素材とするもので、片面に広い範囲で磨耗が認められる。鉄製品は、Ｌ字状に折れた破片である。



(cm・g)

番号	登録番号	種　別	器　種	遺構番号	出土位置	取上番号	器高	口径	底径	外　　面	内　　面	写真図版
1	C－58	土師器	坏	SI－７	床面直上		(3.8)	15.4		ヘラミガキ・ヘラケズリ	ヘラミガキ	
2	D－23	土師器	坏	SI－７	床面・SK－2－1層	№６	(3.1)		6.0	ロクロ・回転糸切り	ヘラミガキ	
3	D－21	土師器	坏	SI－７	１層		6.8	19.1	7.0	ロクロ・回転糸切り	ヘラミガキ	15－６
4	D－22	土師器	高台付坏	SI－７	１層		7.6	18.2	6.7	ロクロ・回転糸切り	ヘラミガキ	15－７
5	D－１	赤焼土器	坏	SI－７	１層		5.1	14.9	6.3	ロクロ・回転糸切り	ロクロ	15－１
6	D－５	赤焼土器	坏	SI－７	1層・SK－3・1層		4.5	13.7	5.7	ロクロ・回転糸切り	ロクロ	15－５
7	D－３	赤焼土器	坏	SI－７	SK－2－1層 SK－3－1層		3.6	13.0	5.2	ロクロ・回転糸切り	ロクロ	15－３
8	D－２	赤焼土器	坏	SI－７	１層		4.6	14.2	6.1	ロクロ・回転糸切り	ロクロ	15－２
9	D－４	赤焼土器	坏	SI－７	1層・SK－2－1層		4.8	13.2	5.8	ロクロ・回転糸切り	ロクロ	15－４
10	D－８	土師器	甕	SI－７	床面	№２	(16.6)		12.0	ヘラケズリ	ロクロ・ヘラナデ・ナデ	
11	C－49	土師器	甕	SI－７	SK－3－1層		(10.1)	(23.2)		ヨコナデ・ハケメ	ヨコナデ・ヘラナデ	
12	D－６	土師器	甕	SI－７	１層		(5.4)	(19.4)		ロクロ	ロクロ	
13	D－７	土師器	甕	SI－７	１層		(6.9)	(24.0)		ロクロ	ロクロ	

第32図　SI－７竪穴住居跡出土遺物(1)



(cm・g)

番号	登録番号	種　別	器　種	遺構番号	出土位置	取上番号	器高	口径	底径	外　　面	内　　面	写真図版
1	D－9	土師器	甕	SI－7	SK－3・1層		(6.3)	32.0		ロクロ	ロクロ	16－1
2	E－5	須恵器	坏	SI－7	床面	No 1	(3.3)	13.6		ロクロ	ロクロ	
3	E－4	須恵器	坏	SI－7	床面		4.9	14.6	6.4	ロクロ・回転糸切り	ロクロ	17－3
4	E－6	須恵器	甕	SI－7	床面	No 3	(8.8)			ロクロ	ロクロ	16－12

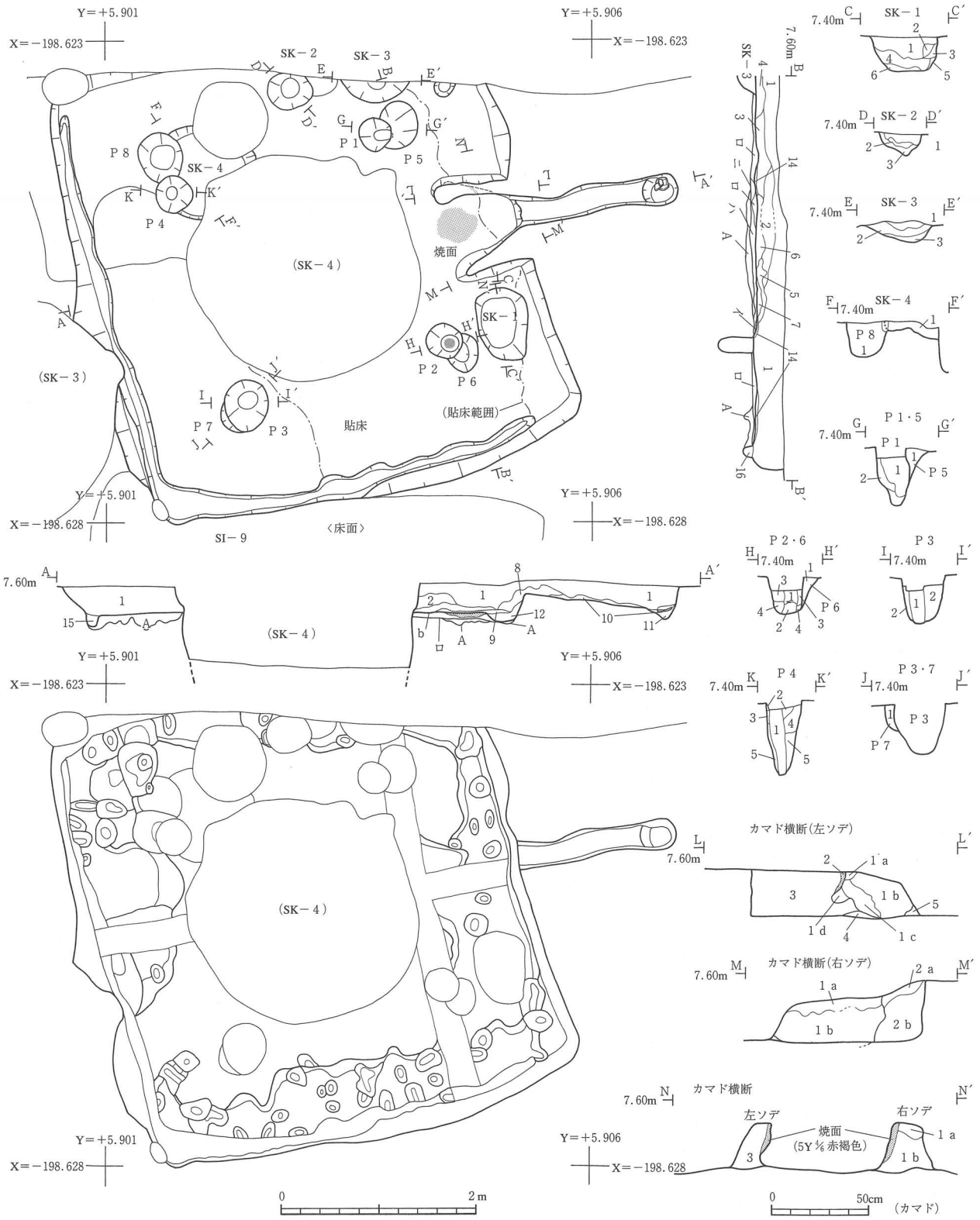
番号	登録番号	種　別	器　種	遺構番号	出土位置	取上番号	全長	幅	厚さ	重量	特　　徴	写真図版
5	K－7	石製品	砥石？	SI－7	床面		16.7	9.9	1.9	361.5	片側に擦面あり	18－5
6	N－26	鉄製品	不明	SI－7	1層		(2.7)	(1.8)	(0.8)	4.5		20－19

第33図　SI－7竪穴住居跡出土遺物(2)

〈SI－8〉

土層No	土　　色	土　質	備　　考
1	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	下部に黄褐色土粒を含む、土器片を多量に含む
2	10YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	暗赤褐色焼土ブロック、炭片を含む
3	10YR 4/6 褐　色	シルト質粘土	焼土粒を少量含む、土器片を含む
4	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	黄褐色土・焼土粒を多く含む
5	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	炭化物を多量に含む、暗赤褐色焼土を多く含む
6	7.5YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	明赤褐色焼土ブロック・炭化物・灰を多量に含む
7	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	
8	10YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	暗赤褐色焼土のブロックを多く含む
9	10YR 2/3 黒褐色	シルト	灰を多量に含む、焼土粒を多く含む、しまりなし
10	10YR 2/3 黒褐色	粘　土	灰を多量に含む、しまりなし
11	10YR 2/2 黒褐色	粘　土	灰・焼土・炭化物を多く含む、しまりなし
12	10YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土のブロックを含む
13	10YR 5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	炭化物を少量含む
14	10YR 5/6 黄褐色	シルト質粘土	しまりあり(貼床)
15	10YR 4/6 褐　色	シルト質粘土	黄褐色土のブロックを含む、焼土粒を含む
16	10YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	下部に黄褐色及び褐色土のブロックを多く含む
イ	10YR 7/4 にぶい黄橙色	粘土質シルト	下面に焼土・灰が分布
ロ	10YR 5/4 にぶい黄褐色		焼土粒を少量含む、黄褐色土のブロックを含む
ハ	10YR 5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	焼土・炭化物を含む
ニ	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	焼土粒を少量含む、しまり強い
A	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	暗褐色土ブロック、黄褐色土ブロック、焼土粒を含む(掘方埋土)
SK-1·1	10YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	焼土・炭化物粒を少量含む
SK-1·2	10YR 7/3 にぶい黄橙色	シルト質粘土	暗褐色のブロックを含む
SK-1·3	10YR 5/4 にぶい黄橙色		暗褐色土少量含む
SK-1·4	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	黄褐色土のブロックを含む、焼土炭化物を少量含む
SK-1·5	10YR 5/4 にぶい黄橙色	シルト質粘土	黄褐色土のブロックを含む
SK-1·6	10YR 5/3 にぶい黄褐色	粘　土	
SK-2·1	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	黄褐色土を霜降状に含む、灰白色シルトを含む(火灰？)
SK-2·2	10YR 2/3 黒褐色	シルト質粘土	褐色土のブロックを少量含む
SK-2·3	10YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土のブロックを少量含む
SK-3·1	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	黄褐色土のブロックを少量含む
SK-3·2	10YR 3/3 暗褐色	シルト質粘土	明黄褐色土・焼土のブロックを多量に含む、炭化物を含む

土層No	土　　色	土　質	備　　考
SK-3·3	10YR 6/3 にぶい黄橙色	シルト質粘土	明黄褐色土のブロック・焼土粒を少量含む
SK-4·1	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	黄褐色土のブロック・焼土ブロック・土器片を多く含む
P1·1	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	黄褐色粘土のブロックを含む
P1·2	10YR 5/4 にぶい黄褐色		褐色土のブロックを含む
P1·3	10YR 5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	暗褐色土のブロックを含む
P2·1	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	
P2·2	10YR 4/6 褐　色		暗褐色土粒を少量含む、底面グライ化
P2·3	10YR 5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	褐色土のブロックを僅かに含む
P2·4	10YR 5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	暗褐色土粒を少量含む
P3·1	10YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	褐色土粒を多量に含む、焼土粒を僅かに含む
P3·2	10YR 5/6 黄褐色	シルト質粘土	暗褐色土粒及び小ブロックを僅かに含む
P4·1	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	上部に黒褐色粘土を薄い縞状に、下部に暗褐色粘土をブロック状に含む
P4·2	10YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	焼土を少量含む
P4·3	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	暗褐色粘土のブロックを含む
P4·4	10YR 5/6 黄褐色	シルト質粘土	褐色土のブロックを多く含む
P4·5	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	暗褐色土をブロック状、粒状に含む
P5·1	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	暗褐色土のブロックを僅かに含む
P6·1	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	黄褐色土の小ブロックを多量に含む、焼土粒を含む
P7·1	10YR 4/6 褐　色	シルト質粘土	暗褐色土の小ブロックを含む、焼土粒を含む
P8·1	10YR 5/6 黄褐色	シルト質粘土	褐色土の小ブロックを多量に含む
カマド左 1a	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	炭化物・焼土を含む
カマド左 1b	10YR 4/6 褐　色	シルト質粘土	焼土ブロック・黄褐色土のブロックを含む
カマド左 1c	10YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	焼土ブロック・褐色土ブロックを多量に含む
カマド左 1d	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	焼土を含む
カマド左 2	5YR 5/4 にぶい赤褐色	シルト質粘土	焼土面
カマド左 3	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	炭化物を含む
カマド左 4	10YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	炭化物を含む
カマド左 5	7.5YR 3/2 黒褐色	シルト質粘土	焼土・灰・炭化物を多量に含む
カマド右 1a	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	暗褐色粒・焼土粒を少量含む
カマド右 1b	10YR 4/6 褐　色	シルト質粘土	暗褐色土を霜降状に含む、焼土の小ブロックを多量に含む
カマド右 2a	10YR 5/6 黄褐色	シルト質粘土	褐色土のブロックを含む
カマド右 2b	10YR 5/6 黄褐色	シルト質粘土	ほぼ均一の土壌、焼土を僅かに含む、下部に暗褐色土粒を少量含む
カマド右 3	10YR 3/2 黒褐色	シルト質粘土	灰・炭化物を多量に含む

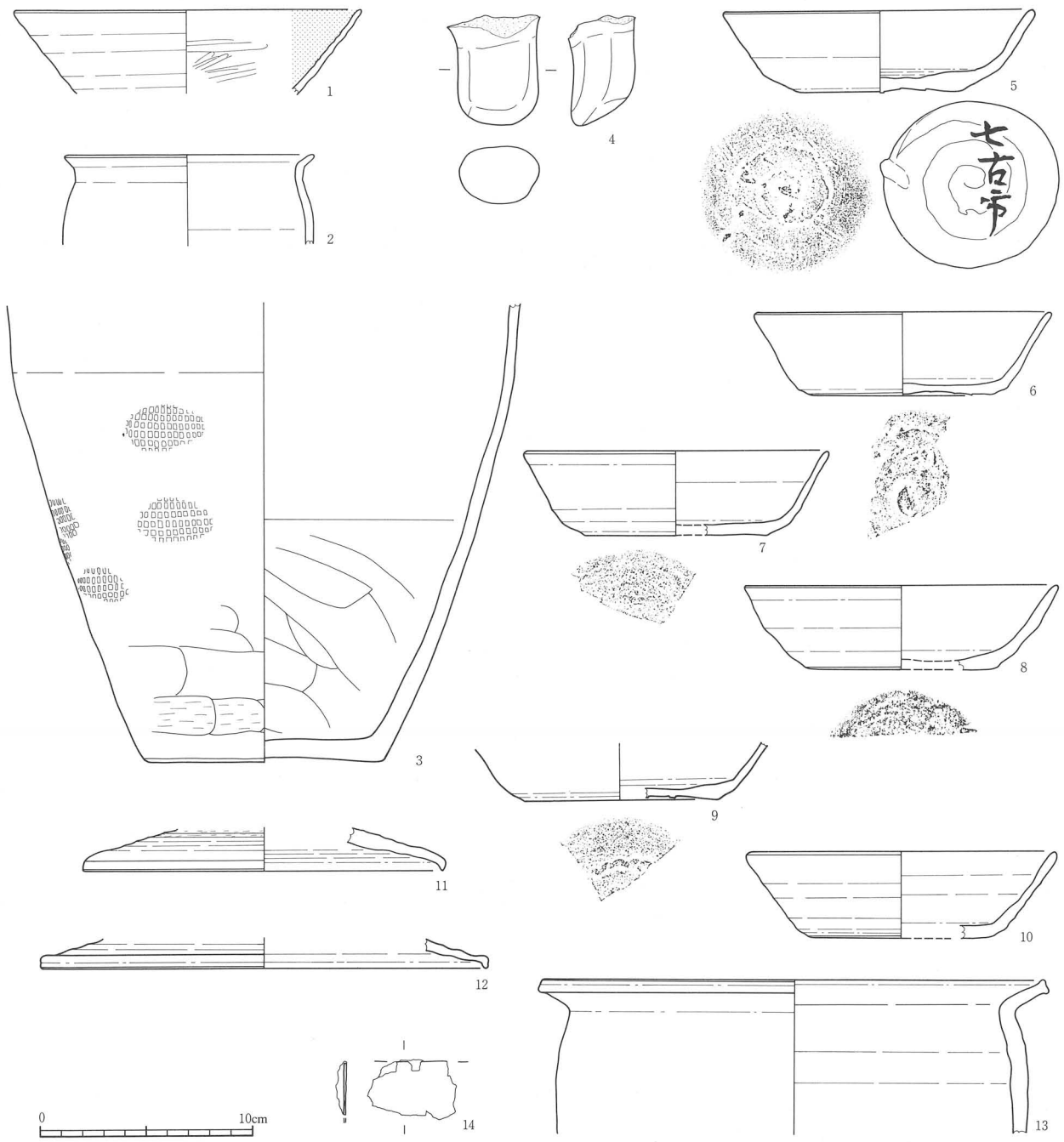


規　模	方向（カマド中心）	カマド位置	壁残存高	重　複	主柱穴	時　期
4.7×（4.7）m	N−79°−E	東壁	30〜24cm	SI−9 ⇨ SI−8 ⇨ SI−7	P1・2・3・4・5・6・7・8	Ⅱa期

〈SI−８〉

ピットNo	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7	P 8
掘方形状	円　形	略円形	楕円形	円　形	楕円形	楕円形	円形？	略円形
掘方規模	36×33cm	36×35cm	54×44cm	39×38cm	50×41cm	40×（33）cm	（36×８）cm	（50）×44cm
深　さ	60cm	39cm	52cm	78cm	（36）cm	（33）cm	（28）cm	36cm
柱痕形状	−	円　形	−	−	−	−	−	−
柱痕規模	−×−cm	13×11cm	14×−cm	12×−cm	−×−cm	−×−cm	−×−cm	−×−cm

第34図　SI−８竪穴住居跡



(cm・g)

番号	登録番号	種　別	器　種	遺構番号	出土位置	取上番号	器高	口径	底径	外　　面	内　　面	写真図版
1	D－24	土師器	坏	SI－８	１層		(3.9)	16.2		ロクロ	ヘラミガキ	
2	D－11	土師器	甕	SI－８	カマド・SK－１		(4.3)	11.6		ロクロ	ロクロ	16－２
3	D－10	土師器	甕	SI－８	１層		(21.8)		11.0	格子叩きのちロクロ	ロクロ・ナデ	16－３
4	D－12	土師器	甑？	SI－８	掘り方		(5.2)	3.8	2.7			16－６
5	E－12	須恵器	坏	SI－８	煙道底面		3.9	14.6	7.5	回転ヘラ切り・墨書「七古市」	ロクロ	17－４
6	E－８	須恵器	坏	SI－８	１層		4.0	14.0	8.0	回転ヘラ切り	ロクロ	
7	E－11	須恵器	坏	SI－８	１層		4.1	(14.3)	8.5	回転ヘラ切り？のちナデ	ロクロ	
8	E－10	須恵器	坏	SI－８	１層		4.0	14.6	9.1	底部調整不明	ロクロ	17－６
9	E－18	須恵器	坏	SI－８	カマド		(2.8)		9.1	回転ヘラ切り	ロクロ	16－14
10	E－９	須恵器	坏	SI－８	14層		4.1	14.6	8.8	底部切り離し不明のちナデ	ロクロ	17－５
11	E－13	須恵器	蓋	SI－8･9	検出面		(2.0)	16.8		天井部回転ヘラケズリ	ロクロ	16－９
12	E－14	須恵器	蓋	SI－８	１層		(1.4)	20.8		ロクロ	ロクロ	16－10
13	E－７	須恵器	甕	SI－８	１層		(7.3)	23.4		ロクロ	ロクロ	16－13

番号	登録番号	種　別	器　種	遺構番号	出土位置	取上番号	全長	幅	厚さ	重量	特　　徴	写真図版
14	N－９	鉄製品	鎌？	SI－８	１層		(2.8)	(4.1)	(0.5)	7.0	薄板状	20－８

第35図　SI－８竪穴住居跡出土遺物

SI－８竪穴住居跡　〔位置・遺存状況・重複〕調査区東部で検出され、北半部は調査区の外にのびる。SI－７竪穴住居跡に北西部の堆積土上部を、またSI－11竪穴住居跡に南西部の堆積土上部を削平され、SK－３・４土坑に西壁と住居跡中央を切られている。多くの遺構に切られてはいるが、住居跡本体の掘り方が深いために、住居跡中央部を除くと保存状態は良好である。

〔平面形・規模・方向〕平面形は方形を呈する。規模は、東西4.7m・南北約4.7mを測る。方向はＮ－79°－Ｅである。

〔堆積土〕堆積土は厚いところで30～40cmあり、１層の褐色シルトを主体とするが、カマド周辺は複雑な堆積状況を呈する。

〔床面・壁面〕床面はほぼ平坦である。東壁面から30～50cm離れたところから、住居跡の東側２／３の床面は、約2.5mの幅で、黄褐色のシルト質粘土により貼り床が施されている。壁面は、各面とも直線的で、壁面の立ち上がりは急である。

〔柱穴〕対角線上の４隅に各２個のピットが検出されたことから、建替えが行われ、柱穴に２時期の変遷があると判断される。最初の柱穴は、Ｐ．５・６・７・８で組み、その後やや内側に寄ってＰ．１・２・３・４の組合せで建替えられている。前者の柱間間隔は2.4m前後、後者は2.3m前後である。柱列と壁面までの距離は、建替え後で東壁と西壁が1.0～1.1m・南壁と北壁が1.1～1.2mである。

〔カマド〕カマドは東壁中央に位置し、袖部と煙道部が比較的良く残っている。袖部は、両袖とも壁面から80cm程度のびており、カマドの先端で約90cmの幅がある。高さは、床面から20～30cmほど残っている。袖部の断面を観察すると、両袖とも、壁際と先端側で積み手に大きく２時期の違いがあり、先端側が新しい積み土によって築かれている。このことから、このカマドは、東壁に近い部分を残して造り替えが行われたと観察される。また左袖の新旧の積み土の境目に、左広がりの斜めに焼け面が残っていることから、最初の袖は現状よりもやや北に寄っていたか、袖の開きが大きかったものと推察される。カマド本体と煙道部の境は、東壁のライン上で段がつき、煙道側が30cmほど高くなっている。煙道は、長さ160cm・幅20～25cmで、住居の外に向って低くなるように傾斜する。煙道の先端はピット状に一段低くなっており、底面からほぼ完形の須恵器坏が伏せた状態で出土している。

〔周溝〕周溝は、南壁と西壁直下で検出されたが、東壁と調査範囲内の北壁下では確認されなかった。検出部の周溝は、幅10～30cm・深さ10cm前後である。

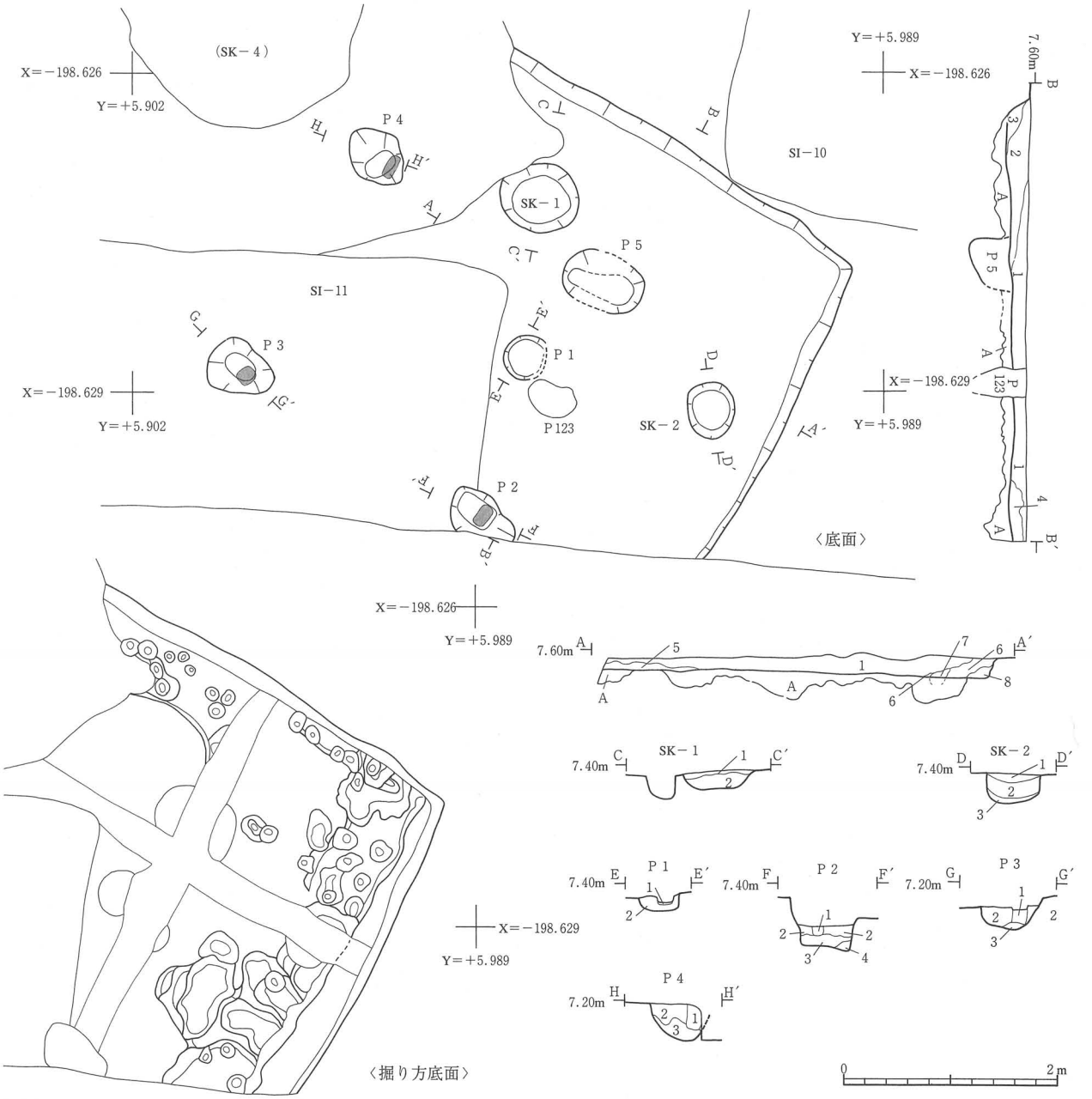
〔掘り方〕住居跡の一部を除き、床面のほぼ全面に渡る掘り方が検出された。掘り方は、壁際の幅40～90cmの範囲が特に溝状に深くなっており、この部分の掘り方底面には、掘削具の痕跡と観察される小さな凹凸が検出されている。

〔遺物出土状況と出土遺物〕SI－８竪穴住居跡からは多量の遺物が出土しているが、そのほとんどは堆積土１層中から出土した土師器・須恵器の小破片である。土師器は、坏と甕の破片・把手片がある。須恵器は坏・蓋・甕などがある。須恵器坏の底部は、回転ヘラ切り無調整のものと、切り離し技法が不明でナデ調整されるものがある。煙道端部から出土した須恵器坏（Ｅ－12）の底部外面には「七古市」の墨書がある。土器以外には、鎌の断片と考えられる鉄製品の破片が出土している。

SI－９竪穴住居跡　〔位置・遺存状況・重複〕調査区東部北側で検出された。西側をSI－８・11竪穴住居跡に掘り方に至るまで切られている。南辺は調査区の外にのびる。このため、調査ができたのは住居跡の北東部だけである。

〔平面形・規模・方向〕直角に折れて接する北壁と東壁の一部しか検出されていないので、全形は不明であるが、柱穴の配置から一辺が5.5～6.5mの方形を呈するものと推定される。方向はＮ－15°－Ｗである。

〔堆積土〕堆積土は、10～20cm残り、１層の暗褐色のシルト質粘土を主体とするが、壁際にはこれより明るい褐色



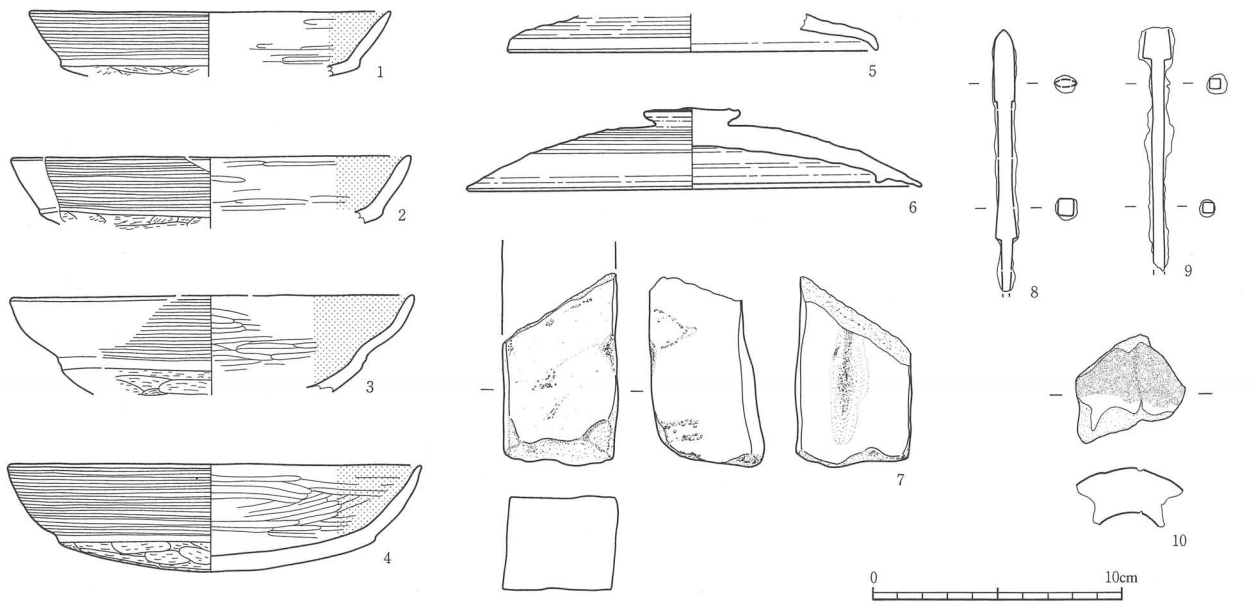
規　模	方向（カマド中心）	カマド位置	壁残存高	重　複	主柱穴	時　期
(4.6×4.2) m	(N－56°－W)	(北西壁？)	18～11cm	SI－9 ⇨ SI－8 ⇨ SI－11	P 2・3・4・5	Ⅰa期？

ピットNo	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5
掘方形状	円 形 ？	不整楕円形	不整楕円形	不整楕円形	楕 円 形
掘方規模	46×（36）cm	70×（46）cm	62×52cm	64×49cm	77×50cm
深　さ	16cm	45cm	(29) cm	(34) cm	39cm
柱痕形状	－	長 方 形	方　形	長 方 形	－
柱痕規模	－×－cm	21×12cm	16×16cm	22×10cm	－×－cm

土層No	土　色	土　質	備　考
1	10YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	褐色土粒・焼土・炭化物・土器片を含む
2	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	黄褐色土粒・焼土・炭化物を含む
3	10YR 5/6 褐　色	シルト質粘土	黄褐色土のブロックを含む
4	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	黄褐色土粒を含む
5	10YR 5/3 にぶい黄褐色	粘　土	にぶい橙色土粒・酸化鉄粒をまばらに含む
6	10YR 5/6 褐　色	シルト質粘土	炭化物・焼土を多量に含む
7	10YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	６層上面からのカクラン
8	10YR 5/6 褐　色	シルト質粘土	暗褐色土のブロックを含む
A	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	黄褐色土・暗褐色土ブロック・焼土・炭化物・土器片を含む
SK-1·1	10YR 6/6 明黄褐色	粘土質シルト	にぶい黄褐色土粒を含む
SK-1·2	10YR 6/4 黄橙色	粘土質シルト	明黄褐色土粒を多く含む
SK-2·1	10YR 5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	明黄褐色シルト質粘土粒を多量に含む、焼土粒を含む
SK-2·2	10YR 6/6 明黄褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色土粒を多く含む、焼土・炭化物を少量含む

土層No	土　色	土　質	備　考
SK-2·3	10YR 6/6 明黄褐色	粘　土	にぶい黄褐色土粒を少量含む
P1·1	2.5Y 3/2 黒褐色	粗　砂	
P1·2	10YR 6/6 明黄褐色	シルト質粘土	にぶい黄褐色土粒を含む
P2·1	10YR 3/4 明褐色		褐色土粒を多量に含む（柱痕跡）
P2·2	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	暗褐色及び黄褐色土の小ブロックを多量に含む、焼土粒含む
P2·3	10YR 5/6 黄褐色	シルト質粘土	褐色土粒を少量含む
P2·4	10YR 5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	にぶい黄橙色土のブロックを含む
P3·1	10YR 5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	暗褐色粘土を霜降状に含む（柱痕跡）
P3·2	10YR 5/6 黄褐色	シルト質粘土	炭化物及び褐色土・にぶい黄褐色土のブロックを少量含む
P3·3	10YR 5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	褐色土の小ブロックを少量含む
P4·1	10YR 5/6 黄褐色	シルト質粘土	褐色土粒・焼土粒を含む（柱痕跡）
P4·2	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	暗褐色土及び黄褐色土ブロックを多量に含む
P4·3	10YR 4/6 褐　色		黄褐色土粒・暗褐色土粒を少量含む

第36図　SI－９竪穴住居跡



(cm・g)

番号	登録番号	種　別	器　種	遺構番号	出土位置	取上番号	器高	口径	底径	外　　面	内　　面	写真図版
1	C－57	土師器	坏	SI－９	１層		(2.6)	14.4	10.8	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ	
2	C－56	土師器	坏	SI－９	１層		(2.7)	15.9	13.5	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ	
3	C－55	土師器	坏	SI－９	埋土		(4.0)	16.0	11.9	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ	
4	C－54	土師器	坏	SI－９	１層		4.3	16.4	12.5	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ	12－17
5	E－20	須恵器	蓋	SI－９	１層		(1.5)	14.6		ロクロ	ロクロ	16－８
6	E－17	須恵器	蓋	SI－９	１層		3.3	18.0		ロクロ　つまみ径3.8	ロクロ　かえり径14.4	16－７

番号	登録番号	種　別	器　種	遺構番号	出土位置	取上番号	全長	幅	厚さ	重量	特　　徴	写真図版
7	K－10	石製品	砥石	SI－９	掘り方		(7.8)	4.8	3.8	177.5	角柱状　砂岩	18－２
8	N－14	鉄製品	鏃	SI－９	１層		(10.5)	0.9	0.9	14.5		20－３
9	N－15	鉄製品	鏃	SI－９	掘り方		(9.7)	1.5	0.8	14.0		20－４
10	P－９	土製品	羽口	SI－９	１層		(4.3)	(4.4)	1.9			

第37図　SI－９竪穴住居跡出土遺物

土が流入している。

〔床面・壁面〕床面はほぼ平坦である。床面で検出された遺構は少なく、汚れも少ない。残存する壁面は、各面とも直線的で、壁の立ち上がりは急である。

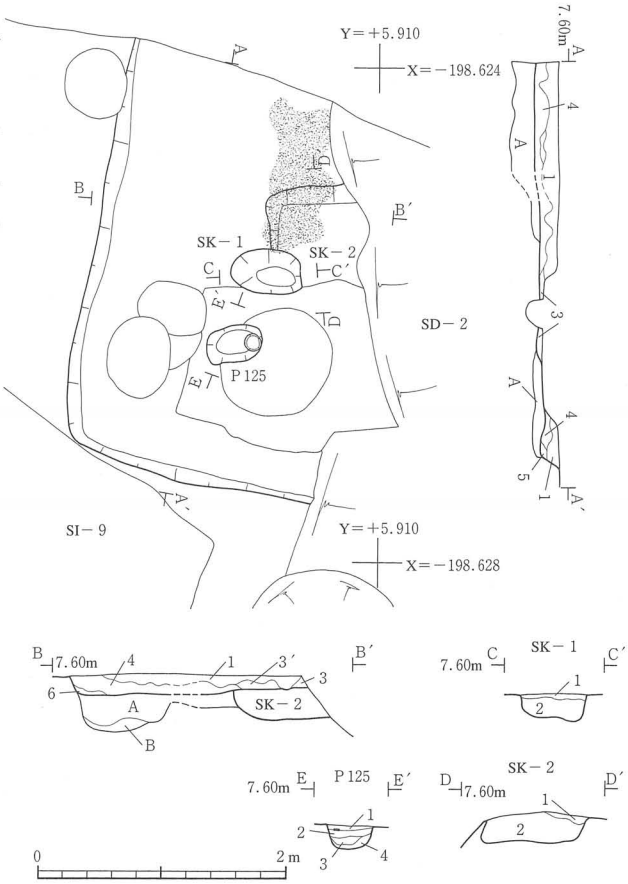
〔柱穴〕住居跡の床面で検出されたＰ．２・５と、SI－８・11竪穴住居跡の掘り方底面で検出されたＰ．３・４の４個で柱穴が構成される。柱穴のうち、柱痕跡の検出ができたＰ．２・３・４は、柱痕跡の平面形が長方形ないし方形を呈している。柱の間隔はＰ．３－Ｐ．４が2.35m・Ｐ．３－Ｐ．２が2.55mで、北列と北壁間隔が140cm前後・東列と東壁の間隔が190cm前後である。

〔カマド〕検出部及び残存部ではカマド及び焼け面は検出されていない。SI－９竪穴住居跡と同じ方向に向いて建てられているSI－２・６竪穴住居跡は、いずれも西壁にカマドが設置され、出土遺物も同時期頃のものと判断されることから、SI－９竪穴住居跡についても、削平された西壁にカマドが存在した可能性が考えられる。

〔周溝〕周溝は検出されていない。

〔掘り方〕住居跡の中央部の一部分と東壁際を除き、検出された床面のほぼ全面に渡る掘り方が検出された。東壁際は、10～30cmの幅でテラス状に掘り残されていた。この部分については、一度掘り方を埋め戻した後に、東壁際だけを、掘り方を埋め戻した段階の床面レベルに合わせて拡張したことによる段差であると推察される。掘り方底面は、全体的に著しい凹凸があり、掘り方の深さには５～27cmの幅がある。東壁側におけるテラス状の部分の際と、北壁際の掘り方は、不整形の溝状に深く掘られている。この部分の掘り方底面には、掘削具の痕跡が小さな凹凸となって残っている。

〔遺物出土状況と出土遺物〕堆積土中からは多量の土器片が出土しているが、確実に床面の遺物として取り上げることができた遺物はない。調整痕跡の明確な土師器には、ロクロを使用したものはない。堆積土から出土した土師器の坏は、内面黒色処理された有段の丸底坏が占めている。土師器以外には、須恵器・鉄鏃・砥石・羽口が出土している。須恵器は各器種の破片があり、このうち蓋には内面にカエリのあるものと、端部が下方に折れ曲がるだけのものがある。

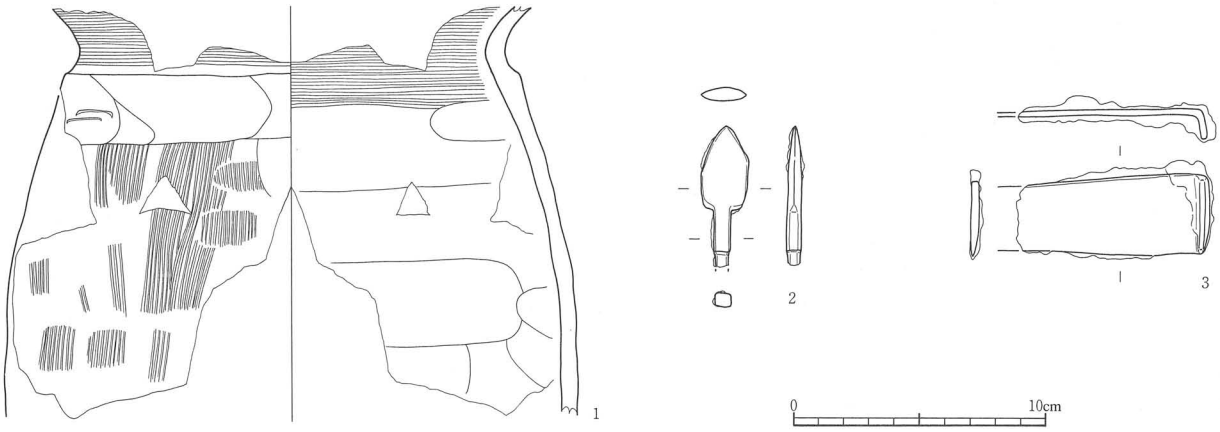


土層No	土　　色	土　質	備　　考
1	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	黄褐色土及び黄褐色土粒を多く含む
2	10YR 4/6 褐　色	シルト質粘土	
3	10YR 5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	暗褐色土粒を少量含む
3′	10YR 5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	黄褐色土のブロックを含む
4	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	黄褐色土粒・炭化物を含む
5	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	黄褐色土のブロックを含む
6	10YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	
A	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	暗褐色土のブロックを多く含む
B	10YR 4/6 褐　色	シルト質粘土	暗褐色土のブロックを少量含む
SK-1-1	10YR 6/6 明黄褐色	粘土質シルト	黄褐色土・暗褐色土のブロックを少量含む
SK-1-2	2.5Y 7/4 浅黄色	粘土質シルト	暗褐色土・黄褐色土のブロックを多く含む
SK-2-1	10YR 1.7/1 黒　色	炭化物	明黄褐色土を粒状に少量含む
SK-2-2	10YR 6/6 明黄褐色	粘土質シルト	明黄褐色土・浅黄色粘土のブロックを多く含む
P125-1	10YR 5/1 褐灰色	粘　土	浅黄色粘土のブロックを多く含む
P125-2	10YR 4/1 褐灰色	粘　土	浅黄色粘土のブロックを含む
P125-3	2.5Y 7/4 浅黄色	粘　土	褐灰色粘土を粒状に含む
P125-4	2.5Y 7/4 浅黄色	粘　土	褐灰色粘土を粒状に少量含む

ピットNo	P125
掘方形状	楕 円 形
掘方規模	46×30cm
深　　さ	(20) cm
柱痕形状	(円形？)
柱痕規模	(14×13) cm

規　　模	方向（カマド中心）	カマド位置	壁残存高	重　　複	主 柱 穴	時　　期
(3.4×2.7) m	N－10°－E？	北壁？	20～13cm	な　　し	P125？	Ⅰb期？

第38図　SI－10竪穴住居跡



(cm・g)

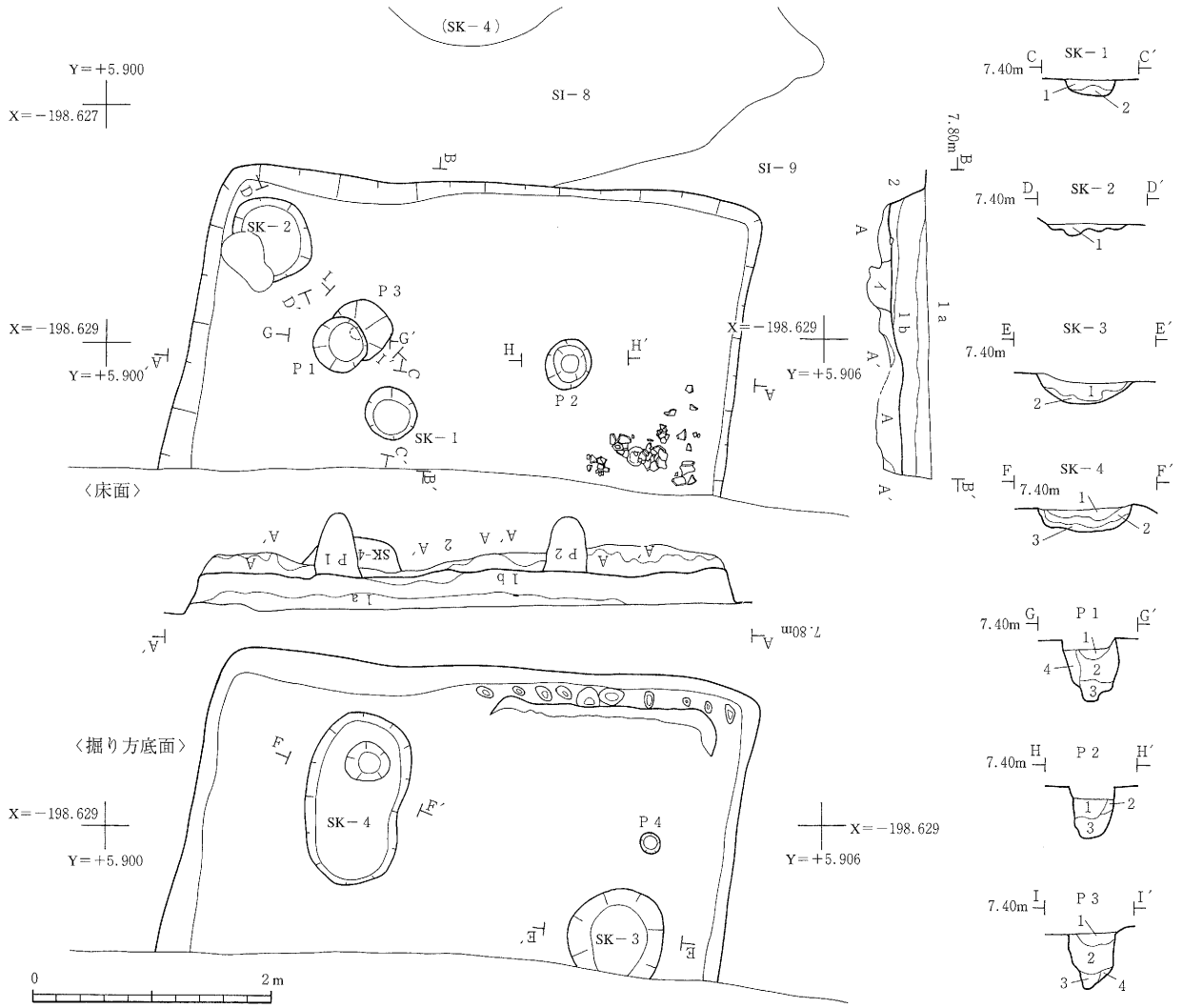
番号	登録番号	種　別	器　種	遺構番号	出土位置	取上番号	器高	口径	底径	外　　面	内　　面	写真図版
1	C－53	土師器	甕	SI－10	埋土		(16.4)	(19.4)		ヨコナデ・ナデ・ハケメ	ヨコナデ・ナデ	

番号	登録番号	種　別	器　種	遺構番号	出土位置	取上番号	全長	幅	厚さ	重量	特　　徴	写真図版
2	N－13	鉄製品	鏃	SI－10	埋土		(5.6)	1.9	0.6	7.5		20－5
3	N－12	鉄製品	鎌	SI－10	掘り方埋土		(7.8)	3.7	(0.2)	35.0	本体3.2cm端部折返し	20－11

第39図　SI－10竪穴住居跡出土遺物

SI－10竪穴住居跡　〔位置・遺存状況・重複〕調査区東端部で検出された。東側をSD－２溝跡に切られ、北側は調査区の外にのびる。SI－９竪穴住居跡と接しているが、重複は確認できなかった。

〔平面形・規模・方向〕西壁と南壁が直角に折れ、平面形は方形を基調とすると推定されるが、全容は不明である。



規　模	方向（カマド中心）	カマド位置	壁残存高	重　　複	主柱穴	時　期
4.6×（2.6）m	（N－82°－W？）	東壁？	32～27cm	SI－９ ⇨ SI－11	P1・2・(3)	Ⅱb期

ピットNo	P 1	P 2	P 3
掘方形状	円　形	円　形	円 形 ？
掘方規模	45×43cm	43×39cm	48×（40）cm
深　さ	52cm	43cm	53cm
柱痕形状	－	－	－
柱痕規模	－×－cm	－×－cm	－×－cm

土層No	土　色	土　質	備　考
1 a	10YR 5/3 にぶい黄褐色	シルト質粘土	明黄褐色土を粒状に含む、底面に炭化物の集積あり
1 b	10YR 4/4 褐　色	粘土質シルト	炭化物・焼土・明黄褐色土粒を少量含む
2	10YR 5/4 にぶい黄褐色	粘土質シルト	褐色土を粒状に含む
イ	10YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土粒・炭化物粒・焼土粒を含む
A	10YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	褐色土ブロック・炭化物・焼土・遺物を含む（掘り方上部）
A′	10YR 3/6 褐　色	シルト質粘土	暗赤褐色土をブロック状及び粒状に含む（掘り方下部）
SK-1-1	7.5YR 4/3 褐　色	シルト質粘土	明赤褐色焼土・暗赤褐色焼土・炭化物を多量に含む
SK-1-2	10YR 4/6 褐　色	シルト質粘土	焼土粒を少量含む
SK-2-1	10YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	褐色土のブロックを含む、焼土粒を含む
SK-3-1	10YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	黄褐色土のブロックを多量に含む、上部に土器片を含む

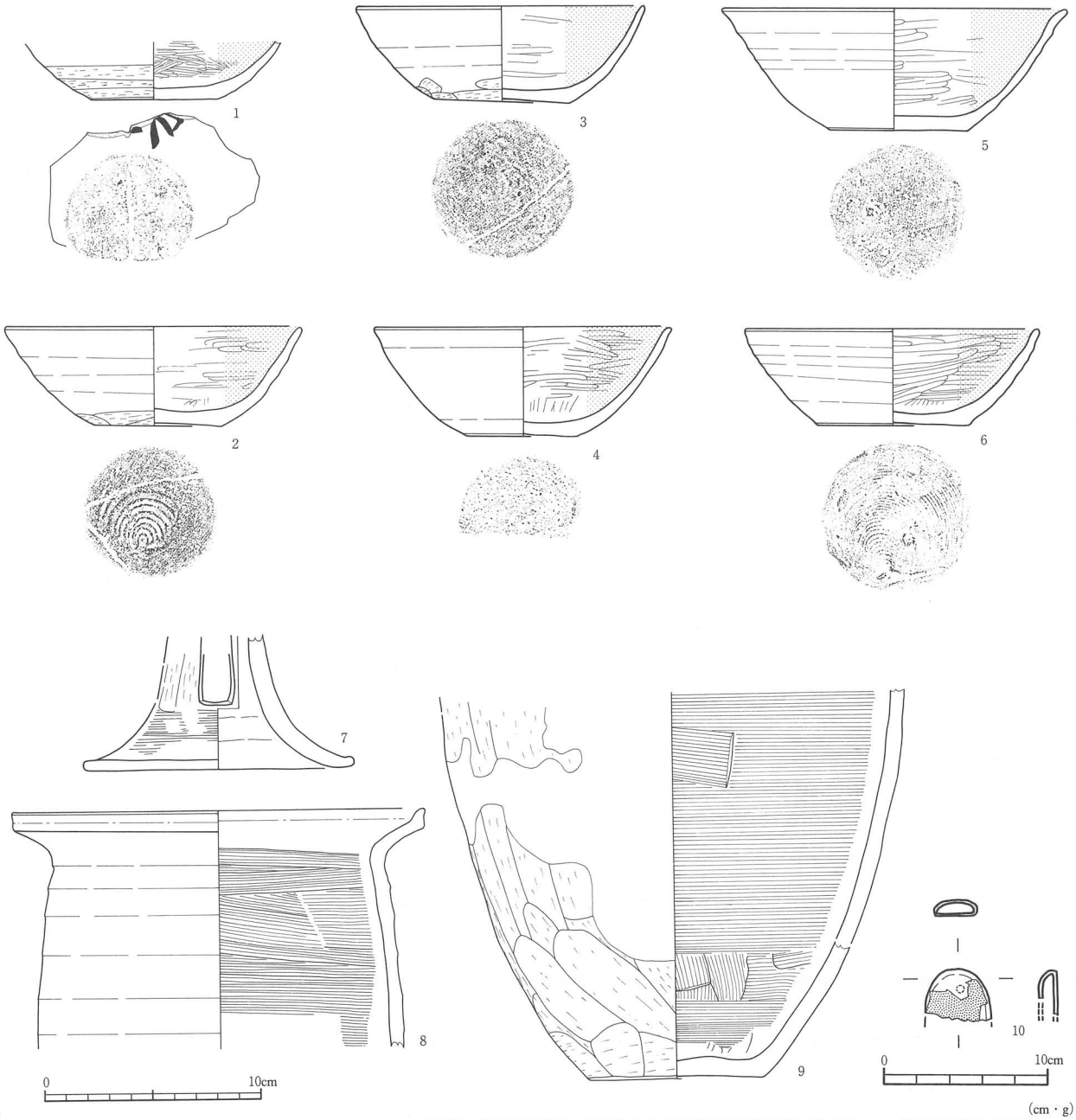
土層No	土　色	土　質	備　考
SK-3-2	10YR 4/4 褐　色	シルト質粘土	にぶい黄褐色土のブロックを含む、しまり強い
SK-4-1	10YR 6/6 明黄褐色	粘土質シルト	褐色土のブロック・焼土粒を含む
SK-4-2	10YR 5/6 黄褐色	粘土質シルト	炭化物・焼土を多く含む
SK-4-3	10YR 5/4 にぶい黄褐色	粘　土	底面に酸化鉄・マンガン集積
P1-1	7.5YR 5/4 褐　色	シルト質粘土	焼土粒を少量含む
P1-2	10YR 5/4 褐　色	シルト質粘土	暗褐色土のブロックを含む
P1-3	10YR 4/3 暗褐色	シルト質粘土	褐色土ブロック・焼土粒をわずかに含む
P1-4	10YR 5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	褐色土のブロックを含む
P2-1	10YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	褐色土のブロックを多量に含む
P2-2	10YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	黒褐色土及び褐色土のブロックを少量含む
P2-3	10YR 4/6 褐　色	シルト質粘土	暗褐色土のブロックを多量に含む
P3-1	10YR 5/6 黄褐色	シルト質粘土	褐色土のブロックを多く含む
P3-2	10YR 3/4 暗褐色	シルト質粘土	褐色土・暗褐色土・にぶい黄褐色土のブロックを多量に含む
P3-3	10YR 5/4 にぶい黄褐色	シルト質粘土	褐色土のブロックを含む、炭化物・焼土を含む
P3-4	10YR 5/6 黄褐色	シルト質粘土	暗褐色土・焼土を少量含む
P 4	10YR 5/4 褐　色	シルト質粘土	暗褐色土粒を含む

第40図　SI－11竪穴住居跡

検出・残存長は、東西2.7m・南北3.4mを測る。方向は北壁でＮ－10°－Ｅである。

〔堆積土〕堆積土は、10～20cmあり、褐色及びにぶい黄褐色のシルト質粘土を主体とする土層が堆積している。

〔床面・壁面〕床面はほぼ平坦である。検出部の北東部、住居跡の中央付近の床面には、炭化物が南北1.3m・東西



(cm・g)

番号	登録番号	種　別	器　種	遺構番号	出土位置	取上番号	器高	口径	底径	外　　面	内　　面	写真図版
1	Ｄ－18	土師器	坏	SI－11	床面・掘り方		(2.7)		5.9	回転ヘラケズリ・墨書「？」	ヘラミガキ	15－13
2	Ｄ－17	土師器	坏	SI－11	床面		4.7	13.6	5.9	回転糸切りのち手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ	15－12
3	Ｄ－15	土師器	坏	SI－11	床面	№２	4.5	13.3	6.3	回転糸切りのち手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ	15－10
4	Ｄ－16	土師器	坏	SI－11	１層上		5.1	13.8	5.3	不明（手持ちヘラケズリ）	ヘラミガキ	15－11
5	Ｄ－13	土師器	坏	SI－11	掘り方・SK－3		5.7	18.0	6.4	回転糸切りのち手持ちヘラケズリ	ヘラミガキ	15－８
6	Ｄ－14	土師器	坏	SI－11	床面	№３	4.5	13.5	7.2	回転糸切り	ヘラミガキ	15－９
7	Ｃ－60	土師器	高坏脚	SI－11	2層・SK－1埋土		(6.2)		12.6	ヘラケズリ・ヨコナデ	３方透し	
8	Ｄ－20	土師器	甕	SI－11	床面		(11.1)	(19.0)		ロクロ	ヘラナデ	16－４
9	Ｄ－19	土師器	甕	SI－11	床面・SK－2		(18.0)		8.2	ヘラケズリ	ロクロヘラナデ・ヘラナデ	16－５

番号	登録番号	種　別	器　種	遺構番号	出土位置	取上番号	全長	幅	厚さ	重量	特　　徴	写真図版
10	Ｎ－17	銅製品	不明	SI－11	１～２層		(1.6)	2.0	0.5	1.5	中空	20－25

第41図　SI－11竪穴住居跡出土遺物

0.5mの範囲で分布している。検出された壁面は、各面とも直線的で、壁の立ち上がりは急である。

〔柱穴〕住居跡の床面では柱穴を検出することはできなかったが、試掘調査の際に削平された部分で、住居跡の対角線上に位置するピット（Ｐ.125）が検出されており、このピットは住居跡の柱穴の可能性がある。Ｐ.125の底面は、東端に寄った部分が直径14cmの円形に窪んでおり、この部分は柱痕跡を反映していると解釈される。

〔カマド〕検出された範囲内では、カマド及び焼け面は確認されていない。

〔周溝〕周溝は検出されなかった。

〔掘り方〕住居跡の南東隅付近を除き、検出範囲のほぼ全面で掘り方が検出された。掘り方の深さは10～30cmである。西壁際は、幅70cmで溝状に深く掘られている。

〔遺物出土状況と出土遺物〕堆積土中からは多量の土器片が出土している。出土した土師器のうち、調整痕跡の明確なものにはロクロの痕跡は認められない。須恵器は、坏・甕・壺などの破片があり、坏の底部には回転ヘラ削りによる再調整がなされている。これ以外には鉄製品の鏃と鎌（？）が出土している。

SI－11竪穴住居跡　〔位置・遺存状況・重複〕調査区東端部で検出され、SI－８・９竪穴住居跡を切っている。南半分は調査区の外にのびている。検出部は、耕作による削平が浅く、遺存状況は比較的良好である。

〔平面形・規模・方向〕南辺は不明であるが、検出部から方形の住居跡と推定される。規模は、東西4.6m・南北検出部長2.6mを測る。方向は北壁でＮ－82°－Ｗである。

〔堆積土〕堆積土は、20～30cmあり、上部がにぶい黄褐色のシルト質粘土（１ａ層）、下部が褐色の粘土質シルト層（１ｂ層）からなる。住居跡中央付近の両層間には薄い炭化物の集積層が存在している。

〔床面・壁面〕床面には緩やかな起伏がある。床面で検出された遺構は少ない。検出部の壁面は、各面とも直線的で、壁の立ち上がりは急である。

〔柱穴〕住居跡の床面で検出されたＰ.１・２が北列の柱穴と考えられる。Ｐ.１はＰ.３と重複しており、建替えられている可能性があるが、Ｐ.２で柱穴の重複は確認できなかった。Ｐ.１・２の間隔は1.8m、柱穴列から北壁までの距離は1.3～1.4m、Ｐ.１から西壁までが1.3m、Ｐ.２から東壁までが1.3mである。

〔カマド〕検出された範囲内では、カマド及び焼け面は確認されていない。カマドの位置としては、床面から土器がまとまって出土した東壁の可能性が高い。この場合、東壁中央部は土器が多数出土した地点に当たるので、カマドの位置は、SI－７竪穴住居跡のように東壁の南壁寄りの三等分線付近に築かれていたと考えられる。

〔周溝〕周溝は検出されなかった。

〔掘り方〕住居跡の検出範囲の全面に渡る掘り方が検出された。掘り方の深さは５～25cmあり、底面には緩やかな起伏がある。北壁の東寄りの部分は他の部分より掘り方がやや浅く、テラス状に掘り残されており、その上面には掘削具の痕跡が小さな連続するピット状に残されている。掘り方底面で２基の土坑と１個のピットが検出されている。

〔遺物出土状況と出土遺物〕堆積土中から多量の土器片が出土したほか、東壁中央付近の壁際の床面から土師器の坏と甕がまとまって出土している。土師器坏はいずれもロクロ調整の後、ヘラミガキのうえ内面黒色処理されたものである。これらの坏のうち、床面から出土したものは切り離し後回転ヘラ削り調整と、切り離し後手持ちヘラ削り調整のも、糸切り無調整のものが混在している。堆積土中から出土したものは、回転糸切り無調整である。土師器坏のうち１点（Ｄ－18）には判読不明の墨書がある。須恵器は坏・甕の小破片が出土しているだけである。土器以外の遺物としては舌状の中空の銅製品が１点出土している。

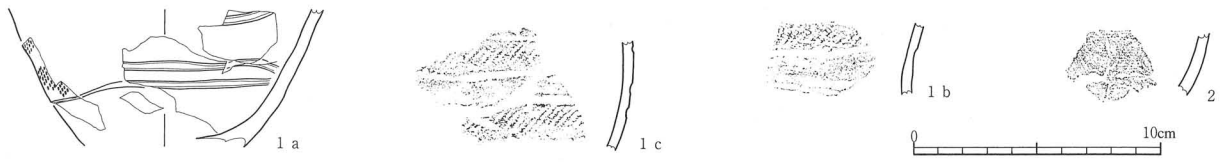
６　Ⅲ・Ⅳ層出土遺物

調査区の西部で、竪穴住居跡等の検出面であるⅡａ層より下層の調査を実施した。その結果、現状のⅡａ層上面

から80cm前後下がったⅢ層中及びⅣ層上面から土器片が出土した。出土土器のほとんどはⅢ層から出土したものである。Ⅳ層上面出土として取り上げた土器も、Ⅲ層から出土した破片と接合したものがあり、接合しない破片も同一個体と観察されるので、基本的にはⅢ層の遺物と解釈される。

Ⅲ層は、黒褐色の粘土層で、その成因の一つに植物が泥炭化したものが含まれていると考えられる。泥炭質土壌が形成された背景としては、植物が繁茂するような湿潤な環境が一定年限継続していたことが想定される。したがって、Ⅲ層出土土器については、河川の洪水などによって運ばれてきた二次堆積物ではなく、人間の活動の結果により当該地に存在するものと理解される。

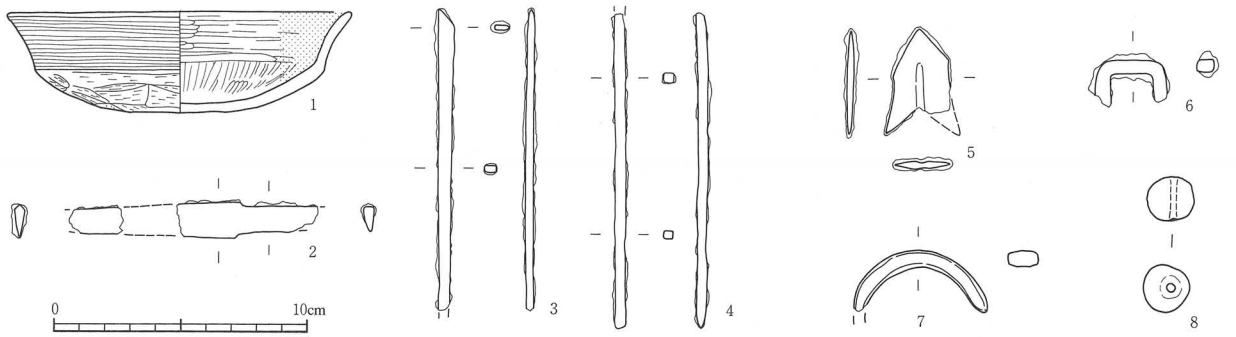
出土土器は、接合した結果、未接合のものを含めて８点にまとまった。このうち７点（第42図１ａ～１ｃ）は、胎土・色調・焼成の類似性から同一個体と考えられ、他の１点は胎土・色調の違いから別個体と判断される。前者は小形鉢の下半部の破片である。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は砂粒が多いが緻密で、焼きは堅緻である。造りは比較的薄い。外面は、沈線・縄文・研磨により区画と模様を描いている。底部から２cmほど上に浅い沈線がめぐり、この沈線より下はミガキ調整されている。沈線より上は、浅く太い沈線による模様、および沈線を区画線として縄文帯と無文帯（ミガキ調整部）による文様、区画線のない縄文帯と無文帯による文様などが認められるが、文様構成は明らかでない。縄文はLR縄文で、細かな撚りの原体を使用している。内面は横位方向を主体とする粗いミガキ調整が施されている。後者は、外面にミガキ調整、内面にヘラ状工具によるナデ調整のある薄手の土器片である。



(cm・g)

番号	登録番号	種　別	器　種	遺構番号	出土位置	取上番号	器高	口径	底径	外　　面	内　　面	写真図版
1	Ｂ－１	弥生土器	鉢	Ⅲ層中・Ⅳ層			(5.4)			沈線文・LR縄文・文様意匠不明	ヘラミガキ	12－１
2	Ｂ－２	弥生土器	鉢	Ⅲ層中			(2.5)			ヘラミガキ	ヘラナデ？	12－２

第42図　Ⅲ・Ⅳ層出土遺物



(cm・g)

番号	登録番号	種　別	器　種	遺構番号	出土位置	取上番号	器高	口径	底径	外　　面	内　　面	写真図版
1	Ｃ－61	土師器	坏	Ｐ22	埋土		4.0	13.5	11.3	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヘラミガキ	20－18

番号	登録番号	種　別	器　種	遺構番号	出土位置	取上番号	全長	幅	厚さ	重量	特　　徴	写真図版
2	Ｎ－25	鉄製品	刀子	Ｐ112	埋土１層		(7.6)	1.4	0.5	9.0	※（全長）は２片合計	20－15
3	Ｎ－18	鉄製品	鏃	１層			(11.8)	0.8	0.5	10.0	片刃鏃	20－２
4	Ｎ－19	鉄製品	鏃？	１層			(12.3)	(0.5)	(0.3)	8.5		20－７
5	Ｎ－23	鉄製品	鏃	１層			(4.2)	3.0	0.5	5.5	無茎鏃？	20－６
6	Ｎ－22	鉄製品	不明	１層			(2.0)	(3.1)	(1.0)	4.5	コ字状	20－20
7	Ｎ－21	鉄製品	不明	１層			(2.4)	(5.3)	(0.6)	14.5	輪状	20－17
8	Ｐ－10	土製品	土玉	１層			1.7	1.4	1.7	5.5	孔径0.2～0.3cm	19－10

第43図　ピット・Ⅰ層出土遺物

7　その他の出土遺物

これまで述べた遺構及び下層調査により出土した遺物以外には、掘立柱建物跡として復元されなかったピットから出土した遺物とＩ層（耕作土層）から出土した遺物がある。

ピットからの出土遺物には土師器と須恵器の小破片が多い。これらの土器の破片は、ピットが竪穴住居跡を切っていることにも要因があると考えられる。Ｐ.22から出土した土師器坏も、この遺構がSI－４竪穴住居跡の煙道を切っていることに由来する可能性があり、同坏がSI－４竪穴住居跡と関係していることも考えられる。土器以外の遺物としては、刀子の破片がＰ.112から出土している。

Ｉ層（耕作土層）からも、土師器・須恵器・陶器・磁器の破片が多数出土している。それ以外には、鉄製品と土製品が出土している。

第５章　考察と調査のまとめ

1　遺構の時期と性格

今回の調査で検出された遺構には、掘立柱建物跡・溝跡・井戸跡・土坑・竪穴住居跡がある。遺構によっては個別に所属年代の位置付けを行ったものもあるが、それらを含めて遺構毎に整理する。

１）掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は、比較的柱穴規模の小さな建物５棟分を復元した。５棟の柱穴に切り合いはないが、位置が重複または近接していることから、各建物は同時に存在した可能性は低く、比較的長期に渡って連続的に形成された建物と考えられる。建物の形態や規模がは異っており、その点において建物の性格に同一性は認められない。

掘立柱建物跡の時期としては、SB－５掘立柱建物跡のピット95中より17世紀後半から18世紀前半頃の唐津産の陶器が出土しているので、この時期を中心とする年代が考えられる。

２）溝　跡

溝跡は調査区の東西両端で各１条検出された。両者とも自然堤防と同方向の南北方向にのびている。

SD－１溝跡は、自然堤防の肩部に掘削された溝で、耕作により削平を受け、堆積土中から古代の土器片が出土しているが、年代を決定できる遺物は出土しておらず、所属時期は不明である。自然堤防の肩部に位置することから、区画溝の可能性もあるが、自然堤防面と旧河道面の高低差が大きいことを考えると区画施設は不用と思われる。

SD－２溝跡は、上面幅が２m以上で、現地表から150cmを超す深さがあり、比較的規模の大きな溝跡である。調査区東部では、この溝の近くになると掘立柱建物跡に関係する柱穴も希薄になることから、掘立柱建物跡に係わる屋敷を区画する堀としての性格が考えられる。遺構の年代は、掘削時期は不明であるが、埋没時期は出土した磁器の年代が18世紀以降から19世紀後半以降のものであることから、この頃に堀の機能が廃されたと考えられる。堀の時期と掘立柱建物跡の時期は一部重複しており、遺構の配置とともに関係が推定される。

３）井戸跡

明確な井戸跡は1基検出された。掘り方直径3.1m、現地表からの深さ3.5m以上で、河原石の石組み井戸枠を有する井戸である。遺構の年代としては掘り方埋め土から17世紀後半以降に位置付けられる肥前産の磁器が出土していることから、17世紀後半以降に掘削されたと考えられ、掘立柱建物跡の時期と重複し、同期に存在して有機的に関連した遺構の可能性がある。

４）土　坑

土坑跡は10基検出された。形態的に分類すると、イ.平面形が長方形を呈し、比較的大型で深いもの（SK－１土坑）、

ロ.平面形が円形を呈し、大型で深いもの（SK－３・４・５土坑）、ハ.小型で浅いもの（SK－７・10・11・12・13・14土坑）、の三種類がある。

イのSK－１土坑は、人為的にしかも掘削後に自然堆積が生じる間でもないほど短期間のうちに埋められた状況を呈し、形状とともに墓壙の可能性があるが、これを裏付ける資料に欠けている。時期決定に係わる資料としては、カワラケが出土しているが、中世のものか近世以降のものか判断できない。

ロのSK－３・４・５土坑は、直径が２m前後、深さは1.5m以上あり、壁面はほぼ直立している。完掘していないので遺構の性格は明らかでないが、このような形状でさらに深くなる遺構としては井戸跡が考えられる。その場合、先に記したように遺構の壁面が崩落しやすいので、何らかの井戸枠を設けて壁面の保護が必要と考えられるが、調査部分ではそのような施設は検出でず、井戸跡と確定できなかった。土坑からは古代の土器が多数出土しているが、これらの遺物は、重複して切っている竪穴住居跡からの崩落土に混入していたと考えられるもので、土坑の年代と関係する遺物は出土していない。掘立柱建物跡の柱穴を切るもの（SK－３土坑）と、掘立柱建物跡との関係は不明であるが柱穴の可能性のあるピットに切られるもの（SK－５土坑）の両者があることから、この類の土坑も掘立柱建物跡の時期と平行して存在した可能性が考えられる。

ハの類型の土坑は、掘立柱建物跡の時期と関係するSK－３土坑に切られるSK－14土坑や、SK－１土坑に切られるSK－13土坑など個別の重複関係はあるが、出土遺物によって年代が明らかにできるものはない。また、形態や出土遺物によって性格の推定できる遺構もない。

５）竪穴住居跡

①　住居跡の変遷と年代

住居跡と考えられる竪穴は10棟検出された。これらの竪穴住居跡から出土した遺物のうち土師器の坏についてみると、ロクロ未使用の段階の住居跡（SI－２・３・４・６・９＝Ⅰ期）とロクロ使用の段階の住居跡（SI－７・８・11＝Ⅱ期）、及び土師器坏での時期不明の住居跡（SI－１・10）がある。SI－10竪穴住居跡は、土師器坏は出土していないが、ロクロを使用していない土師器甕が出土しているので、ロクロ未使用段階の住居跡と考えられる。これまでの土師器の編年研究によると前者が古く、後者が新しく位置付けられる（氏家：1957他）。さらに、竪穴住居跡の変遷を、遺構の重複関係・建物及びカマドの方向・出土遺物をこれまでの編年研究により整理したのが第44図であり、その関係をもとに主な土器を集成したのが第45図である。

〔土師器坏非ロクロ段階：Ⅰ期〕

先ず、ロクロ未使用段階の土師器の坏についてみると、在地の丸底のもので、内面がヘラミガキ調整のうえ黒色処理されたもの（内黒）と、「関東系土師器」と呼ばれる橙色を呈して外面が口縁部ヨコナデ・体部～底部ヘラケズリ調整、内面が口縁部ヨコナデ・体部～底部ヨコナデないしナデ調整されるもの（Ｃ－17～19／Ｃ－41・42・45他）の２種類がある。在地のものは、口径の割に比較的浅いものが多く、体部と底部の境は器高の中程から下位にある。体部と底部の境の外面には段ないし稜があり、それに対応する内面にも屈曲ないし角が付くものが多いが、SI－３竪穴住居跡出土のＣ－10のように底部から口縁まで緩やかに丸みをもって立ち上がるものもある。口縁部は端部付近がわずかに内湾気味のものが多いがSI－６竪穴住居跡からはＣ－26・27のように外傾しているものも認められる。

関東系土師器の坏は、小型薄手で、口縁部が短くＳ字状に屈曲する丸底坏である。また、SI－２竪穴住居跡出土のＣ－６も小型薄手の非内黒の坏であることから関東系土師器に分類可能であるが、口縁部が他に比して幅が広く、緩やかに外反し、内面がヨコナデの後に粗くヘラミガキ調整されている点において他と異なる。

SI－２・６・９・４・３竪穴住居跡から出土した在地の土師器坏をみると、その特徴は仙台市郡山遺跡Ⅱ期官衙外郭大溝出土坏（木村他：1981・1985）や、郡山遺跡第65次調査の際に、Ⅳ層で検出された掘立柱建物跡や竪穴住

居跡から出土した土器群（長島：1992）と同様の特徴を有している。外郭大溝出土土器及び第65次調査の土器群については、Ⅱ期官衙造営以降の７世紀末葉から多賀城創建までの８世紀第１四半期（8世紀初頭）に位置付けられている（木村他：1981・1985／長島：1992）。欠ノ上Ⅱ遺跡周辺における同じような土器の組合わせもつ集落としては、名取川を挟んで対岸に所在する仙台市中田南遺跡の「古代第Ⅲ群土器」に伴う住居群があり、その年代については郡山遺跡及び県内各地の関連遺跡の検討から、７世紀末から８世紀前半に位置付け、中でも８世紀前葉に中心があるものと考えられている。（太田：1994）

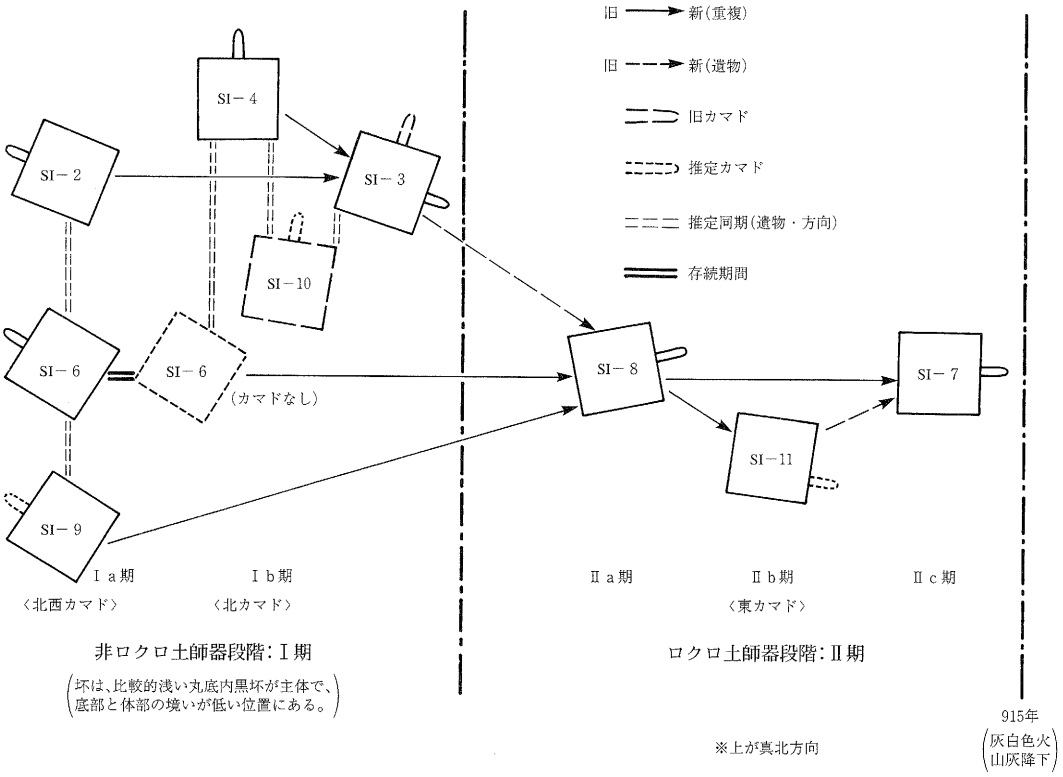
SI－２・６・９・４・３竪穴住居跡から出土した須恵器は少ないが、Ｅ－１・２のような比較的小型で丸底風の平底で体部が直立ないし直立気味に立ちあがる坏や、内面にカエリがあるがやや扁平でボタン状のつまみが付く蓋は、郡山遺跡Ⅱ期官衙関連の須恵器や、中田南遺跡古代第Ⅲ群土器に伴う須恵器に器形の共通性を認めることができ、７世紀末から8世紀初頭に位置付けることが可能である（注１）。したがって、欠ノ上Ⅱ遺跡における非ロクロ土師器坏段階の竪穴住居跡の年代は、７世紀末から８世紀初頭に位置付けられる。

次に、出土土器から郡山遺跡Ⅱ期官衙とほぼ同期と見られるSI－２・６・９・４・３竪穴住居跡について建物及びそのカマドの敷設位置から新旧を検討すると、SI－２・６・９竪穴住居跡は、カマドを主軸とする軸方向がＮ－56～69°－Ｗを示し、カマドは北西の壁に築かれている。また、SI－４・３・10竪穴住居跡は、軸方向がＮ－１～18°－Ｅを示し、カマドは北壁に築かれている。（SI－３竪穴住居跡のカマドはその後東壁に造り変えられている。SI－10竪穴住居跡は、カマドが検出されていないが、竪穴の軸方向がSI－３・４と共通性があるので、北壁に築かれた可能性がある。）竪穴の軸方向とカマド位置で、両群の前後関係を考えると、SI－３竪穴住居跡がSI－２竪穴住居跡を切っていることから、北西カマドのSI－２・６・９竪穴住居跡が古く（Ｉａ期）、北カマドのSI－４・３・10竪穴住居跡が新しい時期（Ｉｂ期）の住居群であると考えられる。

同一時期の建物群に、強い基準の方向性の認められる近隣遺跡には郡山遺跡がある。郡山遺跡では、先に欠ノ上Ⅱ遺跡の非ロクロ土師器坏出土の住居跡群を同期に位置付けたⅡ期官衙の建物群は、真北方向を造営の基準方向としている。また、これに先行するⅠ期官衙（７世紀中頃から７世紀末頃）の建物群は、真北から30～40°東に振れた方向を基準とし、Ⅰ期官衙の段階からⅡ期官衙の段階へ移行する際に、造営の基準方向が大きく転換されている。また官衙内における竪穴住居跡も、掘立柱建物跡と同様に官衙造営の基準にそって建てられており、一般集落と異なる性格が考えられている（木村：1981・1985）。

欠ノ上Ⅱ遺跡の北西カマドの竪穴住居跡群は、カマドを中心とする主軸方向（Ｎ－56～69°－Ｗ）に対して、これに直交する方向の軸を想定すると、真北から21～34°東に振れた方向となり、郡山遺跡Ⅰ期官衙の造営の基準方向と近い数値を示している（注２）。このことは、欠ノ上Ⅱ遺跡の非ロクロ土師器を出土した竪穴住居跡が、全体としては郡山遺跡Ⅱ期官衙の時期に相当するとしても、北西カマドの竪穴住居跡群の時期については、郡山遺跡Ⅰ期官衙の造営基準方向の影響を受ける段階、すなわちⅠ期官衙末期の7世紀末頃に形成されたものと考えられる。また、両遺跡間に建物の軸方向とその変遷に類似性が認められることと、SI－２・６竪穴住居跡から鍛冶に関連する遺物が出土していることを合わせて考えると、北西カマドの住居跡群は、郡山遺跡の官衙と密接な関係のある住居跡群であると推察される。北西カマドの竪穴住居跡群の時期を7世紀末頃に位置付けると、これに後続する北カマドの住居跡群は、郡山遺跡Ⅱ期官衙造営基準方向の影響のもとに建てられたと考えられることから、Ⅱ期官衙と同時期中でも８世紀初頭になってから形成された可能性が高いものと思われる。

上述のとおり、北西カマドの竪穴住居跡群（Ｉａ期）について遺物と軸方向の関連から、郡山遺跡のⅠ期官衙とⅡ期官衙との中間期、すなわち７世紀末頃と考えられる。この場合、口縁部がＳ字状に屈曲し、小型薄手のＣ－17～19／Ｃ－41・42・45のような関東系土師器の年代について、７世紀中葉から８世紀初頭に位置付ける考え（古川：1984・1985）においては、その年代幅の中でとらえることができるが、８世紀初頭に位置付ける考え（長谷



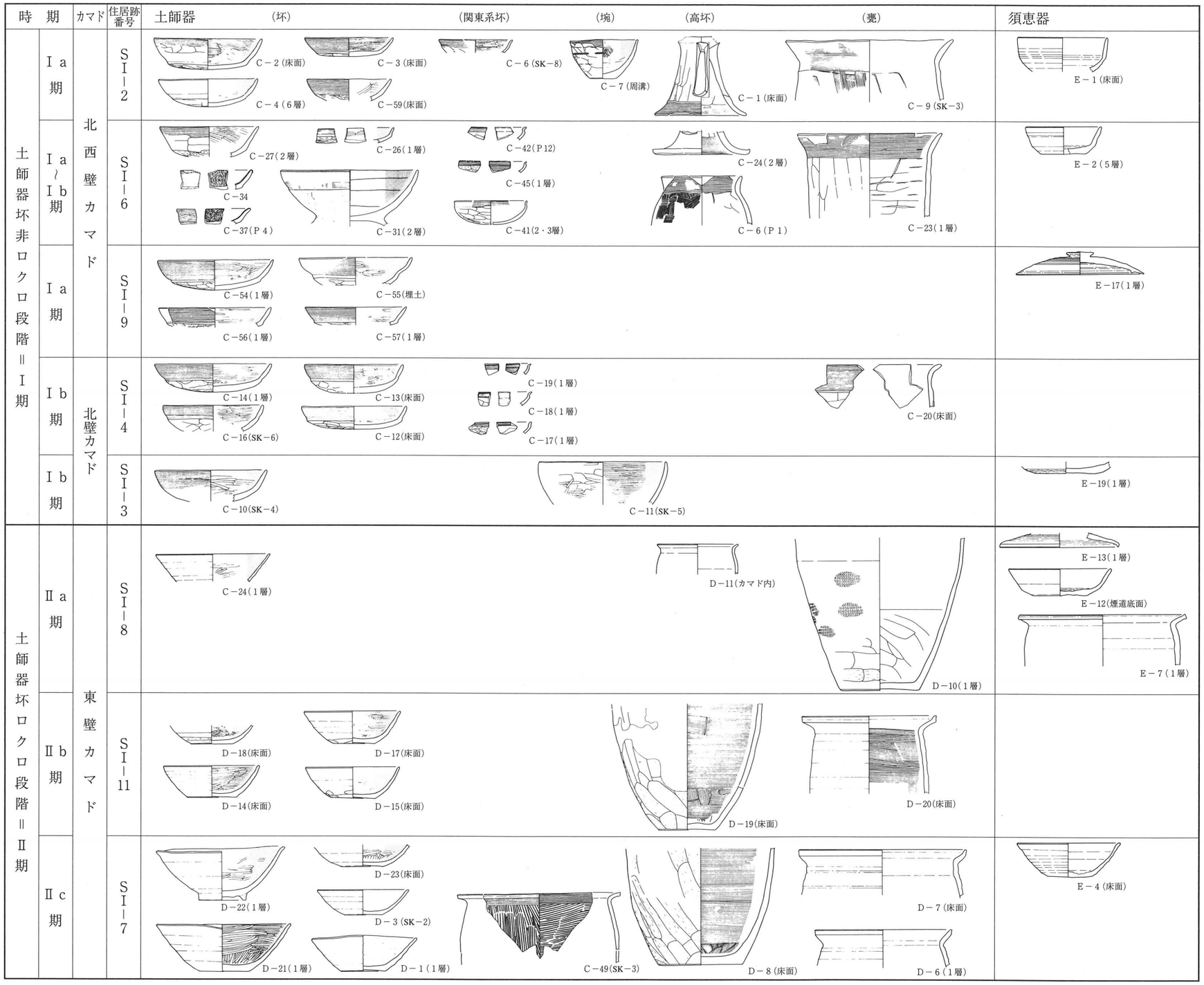
第44図　重複関係及び方向・出土遺物からみた竪穴住居跡の変遷

川：1993）にしたがった場合は、若干の時間差が生じる。後者の立場に立った年代観の理解としては、SI－６竪穴住居跡は、カマドの施設された段階から、鍛冶関連の工房として使用されるような段階まで、４時期程度の変遷を経ていることから、他の２棟北西カマドの竪穴住居跡より存続期間が長かったために、８世紀初頭の遺物が出土するに至ったものと解釈される。北カマドのSI－４竪穴住居跡でも関東系土師器が出土しているので、SI－６竪穴住居跡は、この頃まで存続したと考えられる。

北カマドの住居跡群（Ⅰｂ期）は、郡山遺跡Ⅱ期官衙造営後に前段階と同様に、Ⅱ期官衙造営基準方向を意識して建てられたと考えられる。SI－４竪穴住居跡はほぼ真北を基準として建てられ、郡山遺跡Ⅱ期官衙の強い影響が想定されるが、これを切るSI－３竪穴住居跡の時期になると、方向性はやや崩れ、最初北壁に築かれたカマドも、改築時には東壁へと移される。出土土師器坏も、底部と体部の境が外面の調整の違いで理解できるだけとなり、平底化への移行をうかがうことができる。この時期の年代は、郡山遺跡Ⅱ期官衙の年代から８世紀初頭頃と考えられる。

以上のように欠ノ上Ⅱ遺跡の非ロクロ土師器坏段階の集落は、郡山遺跡と密接な関係を持って形成され、７世紀末頃に、郡山遺跡Ⅰ期官衙の造営基準方向である真北から30～40°東に振れた方向をを意識して、北西の壁にカマドが敷設される住居が形成される。その後７世紀末郡山遺跡Ⅱ期官衙が真北を基準方向として造営されると、欠ノ上Ⅱ遺跡の住居も真北を意識した方向の北壁にカマドを敷設する住居に変化する。やがて８世紀第１四半期末頃に郡山遺跡の官衙が廃されると、欠ノ上Ⅱ遺跡の非ロクロ土師器坏段階の集落も廃される。

なお、この段階におけるSI－６竪穴住居跡は、竪穴内から焼け面や炭片が検出されるとともに、鉄滓（図版21－１～４）・鍛造剥片（図版21－５）・球状滓（図版21－６）・羽口片などが出土していることから鍛冶工房としての機能を果たしていたと考えられる。



第45図　竪穴住居跡の主な出土土器とその変遷

〔土師器坏ロクロ段階：Ⅱ期〕

ロクロを使用した土師器は、東北地方の土師器編年において「表杉ノ入式」と呼ばれ、平安時代のほぼ全体に渡る土器形式と理解されている（氏家：1957)。表杉ノ入式に相当する土師器は、「赤焼土器」と呼ばれる坏内面にヘラミガキ及び黒色処理を施さない土器や、須恵器とともに、その変遷過程の研究が行われている（白鳥：1980・加藤：1982・丹羽：1983・村田：1995他)。各研究によると、表杉ノ入式の土師器は、底部は切り離し後調整の行われるものから無調整ものへ、底径の割合が口径に比して大きなものから小さなものへという大きな変化の流れがあり、その過程の中にさらに法量が一度大きくなってから前段にもどり、さらに小さくなるといううねりが認められている。

本項では、ロクロ土師器の出土したSI－８・11・７竪穴住居跡について、白鳥良一氏の研究及び仙台市中在家南遺跡河川跡の堆積層から出土した遺物との対比において、その年代的位置付けを行う。

検討に先だって、遺構の重複関係を確認すると、SI－８竪穴住居跡は、SI－７・11竪穴住居跡に切られ、両住居跡より古い。SI－７竪穴住居跡とSI－11竪穴住居跡は、接近して存在し、しかも出土土器の様相も異なるので、同時に存在したと考えられないが、重複関係による新旧は不明である。ただし、SI－７竪穴住居跡は、堆積土中から、915年に降下したとされているいわゆる「灰白色火山灰」と観察される白色土粒が検出されているので、SI－７竪穴住居跡の下限を10世紀初頭以前と位置付けることができる。したがってSI－８竪穴住居跡の年代はそれ以前と考えることが可能である。

比較的多数の土器が出土したSI－11竪穴住居跡の土師器坏は、口径に比して底径が比較的広く、底部は切り離し後回転ヘラケズリや手持ちヘラケズリにより再調整され、甕類にはロクロ調整がなされていることから、白鳥良一氏の編年では、９世紀後半代とされるＤ群土器段階に位置付けることができる。ただし、土師器坏Ｄ－18のような、切り離し後回転ヘラケズリ調整されるものは、Ｄ群土器に先行し、９世紀前半代とされるＣ群土器段階の調整に多くみられる特徴とされることから、SI－11竪穴住居跡の年代は、９世紀後半でも９世紀中葉頃として考えることが可能である（Ⅱｂ期)。

次にSI－７竪穴住居跡についてみると、土師器坏の器形全体のプロポーションや甕の器形や調整はSI－11と違いは少なく、また、坏の底部と体部の境が明瞭に角張っている点において、Ｄ群土器の範疇であると理解されるが、土師器坏の底部が回転糸切り無調整のものだけで構成される点において、SI－11竪穴住居跡よりも後出的な要素がある。また、坏Ｄ－21や台付坏Ｄ－22のように、法量の大きな坏形土器が出現しているが、このような大型化の現象は、中在家南遺跡河川跡で灰白色火山灰層（４層）の下層におけるロクロ土師器坏の８～６層から５層への変化と対応している（工藤：1996)。したがって、SI－７竪穴住居跡については、SI－11竪穴住居跡より新しく位置付けて、９世紀後葉から灰白色火山灰降下以前の10世紀初頭までの間の遺構と考えられる（Ⅱｃ期)。

SI－８竪穴住居跡は、重複関係においてSI－７・11竪穴住居跡より古いことは先に述べたが、この住居跡も土師器の甕にロクロが使用されている点において、Ｄ群土器の段階と重複していると考えられる。ただし、９世紀中葉に位置付けたSI－11竪穴住居跡に切られていること、及び須恵器坏Ｅ－12のような、口径の割に底径が大きく、底部と体部の境が明瞭に角張り、底部の切り離しが回転ヘラ切り無調整のＣ群土器段階の特徴を具備している須恵器坏が出土していることから、９世紀中葉でも前半頃と考えるのが妥当であろう（Ⅱａ期)。

② 竪穴住居跡の歴史的性格

今回発見された竪穴住居跡は上述したとおり、非ロクロ土師器の時期とロクロ土師器の時期の大きく２時期がある。前者は、7世紀末頃から8世紀初頭に位置付けられ、竪穴の主軸の基準方向が真北から56～69°西に振れ、カマドが北西の壁面に敷設される段階から、竪穴の主軸の基準方向が南北方向となり、北側の壁にカマドが敷設される段階への変遷があり、その変遷時期と基準方向は、郡山遺跡におけるⅠ期官衙からⅡ期官衙造営の時期と基準方向

の変化と概ね一致している。このことは、この時期の欠ノ上Ⅱ遺跡の竪穴住居跡群は、郡山遺跡の官衙と密接な係わりを持ち、その規制を受けた集落の可能性があると考えられる。この時期の集落は、Ⅱ期官衙の多賀城への移転とともに廃されている。

今回の調査成果で見る限り、欠ノ上Ⅱ遺跡ではSI－３竪穴住居廃絶後、約100年ほどの空白期間があり、９世紀中葉頃に再び集落が形成される。この集落については、一般の農村集落と考えられる竪穴住居跡と遺構・遺物の点で相違は認められないことから、農村を形成する竪穴住居跡と考えられる。この時期の３棟の竪穴住居跡には、重複や遺物に時間差が認められることから、同時に存在したと考えられないので、散村的な農耕集落であったと推定される。この集落も10世紀初頭以降の動向は不明である。

2　遺物の総括

本調査においては、土師器・須恵器・鉄製品など多数の遺物が出土したが、本項ではこのうち主にSI－６竪穴住居跡から出土した溶解物の付着する土器と、漆状の樹脂の付着した土器について簡単に総括することとしたい。

１）溶解物付着土器について

溶解物の付着した土器は、高熱によって土器全体が灰色に変色しているが、ヨコナデ・ヘラケズリ・ヘラミガキ・ハケメ調整などの製作技法や器形の特徴（第30図）から、土師器が転用されたものと観察される。器種としては坏が多いが、甕の底部付近も利用されている。坏の場合、口縁部がそのまま使用されたもの（第30図１～４）と、口縁部を連続的に欠いて口縁を再生し、浅くして使用したもの（第30図５・６）がある。溶解物は黒褐色から暗赤褐色を呈し、ガラス状に溶けている部分と発泡して白濁している部分があり、土器の内面の全体または一部に偏って付着している。口縁部及び外面には部分的に付着しているだけである。このような土器については、溶解物が鉱物起源の物質と観察されることから、トリベとして使用されたものと理解される。鉱物の成分としては、溶解物の色調が赤みを帯びていることから、銅を主成分とする金属に由来する可能性がある（注３）。したがって、溶解物付着土器については、銅製品の鋳造にあたってトリベとして使用されたもの考えられる。

溶解物の付着した土器が出土しているのは、SI－６竪穴住居跡と同期頃の住居跡では、SI－２＝２点・SI－３＝１点・SI－４＝10点・SI－６＝66点・SI－９＝５点で、SI－６竪穴住居跡からの出土点数が圧倒的に多い。SI－６竪穴住居跡では、前項で述べたように、鍛冶工房としての役割を果たしていたのみならず、銅製品の鋳造も行っていたと考えられる。

２）漆状樹脂付着土器について

漆状の樹脂の付着した土器は、SI－６竪穴住居跡の2層中に埋め込まれた状態で出土した高台付の坏である。高台は欠損しているが坏部は完形である。漆状の樹脂は、内面は全体に薄く付着し、外面は液垂れして流れたような状況で付着している。内面には、水平方向にヘラ状の道具で撫でて、丁寧に樹脂を掻き取ったような痕跡が残る。

漆状の樹脂が付着した土器は、郡山遺跡でも多数出土しており、官衙や寺院造営にあたり、塗料をはじめとし様々な用途に利用されたと考えられる。今回、鍛冶工房と考えられるSI－６竪穴住居跡から、このような土器が出土したことは、この工房において鍛冶に係わって漆が使用されていたことを推定させるものである。

３）Ⅲ・Ⅳ層出土土器について

Ⅲ・Ⅳ層から出土した土器は、前章のとおり、２個体からの破片が出土している。そのうち模様の付されているB－１は、幅が広く浅い沈線と縄文及びミガキ調整の帯状の無文部分によって模様が構成されているが、全体的な模様の意匠は不明な土器である。これに類似する土器については資料を得ていないが、縄文の原体が細かいものであることから、弥生土器の可能性が高いものと推定される。弥生土器とした場合、沈線の幅が広いことから中期前半以前のものと考えられる。なお、Ⅲ層及び出土土器の年代については、今後の発掘調査において同層から型式決

定できる良好な資料の出土を待って正式な判断をしたい。

3 まとめ

① 欠ノ上Ⅱ遺跡は、仙台平野中央部の広瀬－名取川が形成した沖積地の、標高約８mの自然堤防に立地する。

② 欠ノ上Ⅱ遺跡では、耕作土を除去したⅡ層上面で遺構が検出され、その面から約80cm下がったⅢ層中からは弥生土器と推定される土器片が出土した。

③ Ⅱ層面で検出される遺構は、大きく区分すると近世・平安時代・飛鳥～奈良時代の３時期のものがある。

④ 近世の遺構は18世紀頃を中心時期としたもので、掘立柱建物跡・溝跡・石組み井戸枠の井戸・井戸の可能性のある大型円形土坑などがある。

⑤ 平安時代の遺構は、９世紀中葉から灰白色火山灰が降下する前の10世紀初頭頃のもので、竪穴住居跡が３棟検出された。３棟の住居は東壁にカマドが敷設されるという共通性があるが、重複関係と出土遺物の検討から、それぞれ異なる時期の住居跡であると判断された。

⑥ 飛鳥～奈良時代の遺構は、７世紀末から８世紀初頭のもので、竪穴住居跡が６棟検出された。６棟の住居跡のカマドは、北西壁に敷設される段階から、北壁に敷設される段階へと変化しており、この変化は郡山遺跡のⅠ期官衙からⅡ期官衙の造営基準方向の変化に対応する。建物の軸方向の対応関係は、郡山遺跡の官衙による、欠ノ上Ⅱ遺跡の集落跡への規制によるものと推定できることから、両遺跡に密接な関係が存在したと推察され、官衙と周辺集落との関係を理解する上で貴重な発見となった。

⑦ 飛鳥～奈良時代の住居跡のうち、SI－６竪穴住居跡は、住居から工房へ改築されたと考えられる遺構で、鍛冶及び銅製品の鋳造の工房と推定される遺構・遺物が検出された。

注　記

注１　欠ノ上Ⅱ遺跡出土の須恵器坏E－１・蓋Ｅ－17は、郡山遺跡第65次調査における須恵器の分類に当てはめると、それぞれ坏Ⅰ２類・蓋Ⅰ２ｂ類に相当する。

注２　桑原滋郎氏は、郡山遺跡のⅠ期官衙の基準方向について、調査報告の見解（「真北から30～33°東に偏している」という見方）に対して、「真北から60°西に偏している」という指摘（石松好雄・桑原滋郎：『大宰府と多賀城』岩波書店　1985）をされている。カマドを基準として考えた場合、欠ノ上Ⅱ遺跡における北西カマドの竪穴住居跡の基準線は、真北から60°西に偏していることになり、同氏の指摘に一致する。また郡山遺跡では、Ⅰ期官衙の中枢部は、約120m×約90mの長方形に区画されると推定されているが、その短辺の一つに当たる南東辺の中央部付近で、板塀の接続する門跡が発見されており（長島：1998・1999）、本遺跡SI－２竪穴住居跡が北西壁にカマドが造られ、南東辺の中央に出入り口に伴う梯子の据え方と考えられるピットが検出されている状況とに、基準方向に類似性が認められる。

注３　類似した赤色を呈する溶解物が付着した土師器は郡山遺跡第117次調査において多数出土しており、同資料については、国立歴史民族博物館の今村峯雄氏により、銅の成分が多いため赤色を呈するという教示が得られている（長島：1999）。

参 考 文 献

氏家 和典　1957：「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

太田 昭夫　1994：「中田南遺跡」仙台市文化財調査報告書第182集

小川 淳一　1980：「塩沢北遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第69集

加藤 道男　1989：「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢』Ⅱ　寧楽社

加藤 道男・阿部 博志
1980：「観音沢遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅳ』宮城県文化財調査報告書第72集

木村 浩二　1981：「郡山遺跡Ⅰ」仙台市文化財調査報告書第29集
1985：「郡山遺跡Ⅴ」仙台市文化財調査報告書第74集

木本 元治　1990：「南東北地方における歴史時代の須恵器編年位置」『考古学古代史論攷』伊東信雄先生追悼論文集刊行会

工藤 哲司　1996：「中在家南遺跡　分析考察編　第６章　出土土師器について」仙台市文化財調査報告書第213集

小井川和夫・小川 淳一
1982：「御駒堂遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ』宮城県文化財調査報告書第83集

佐藤 甲二　1985：「欠ノ上Ⅰ遺跡」仙台市文化財調査報告書第79集

篠原 信彦　1993：「大蓮寺窯跡　第２・３次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第168集

白鳥 良一　1980：「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』宮城県多賀城跡調査研究所
1982：「多賀城跡　政庁本文編　第Ⅶ章考察　２遺物　（２）土器」宮城県教育委員会　宮城県多賀城跡調査研究所

長島 榮一　1998：「郡山遺跡ⅩⅧ」仙台市文化財調査報告書第227集
1999：「郡山遺跡ⅩⅨ」仙台市文化財調査報告書第234集

丹羽　茂　1981：「清水遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第77集

長谷川 厚　1993：「関東から東北へ－律令成立期前後の関東地方と東北地方の関係について－」『二十一世紀への考古学　櫻井清彦先生古希記念論文集』雄山閣出版

早坂 春一　1981：「日向前横穴古墳」『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第77集

古川 一明　1984：「色麻古墳群」『宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書』宮城県文化財調査報告書第100集
1995：「色麻古墳群」『昭和59年宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書』宮城県文化財調査報告書第103集

村田 晃一　1995：「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古』36号

写　真　図　版

図版１　遺跡の位置と周辺の環境　（昭和36年：国土地理院）

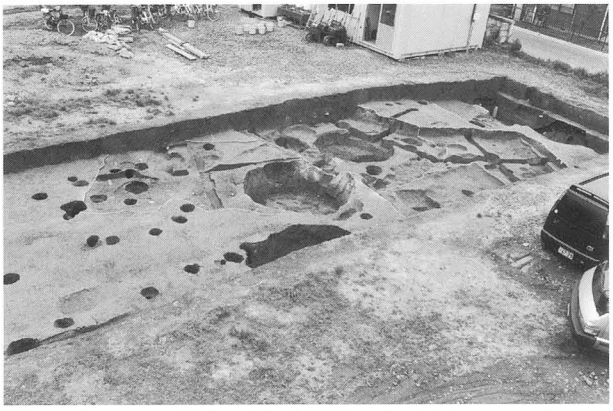
1　遺構検出状況（調査区西部：南より）

2　遺構検出状況（調査区東部：南西より）

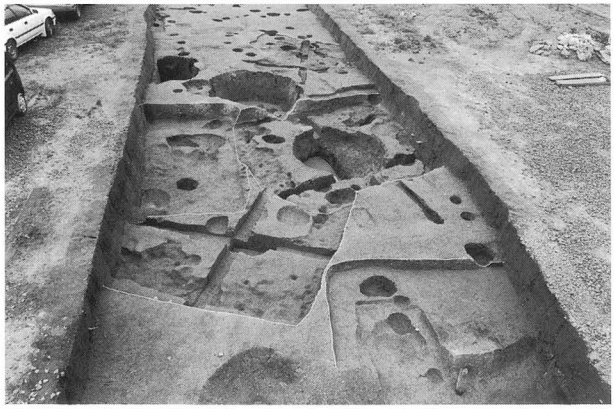
3　調査区全景（西より）

4　調査区西部完掘状況（南より）

5　調査区中央部完掘状況（南より）



6　調査区東部完掘状況（南より）



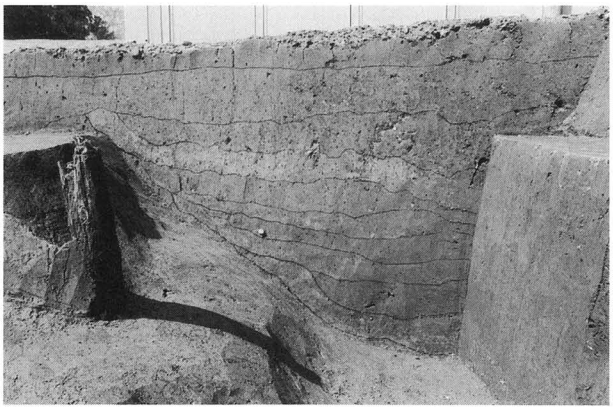
7　調査区東部完掘状況（東より）

8　深掘り調査区全景（南より）

図版２　遺構の検出と調査状況

1　SD－1溝跡全景（南より）

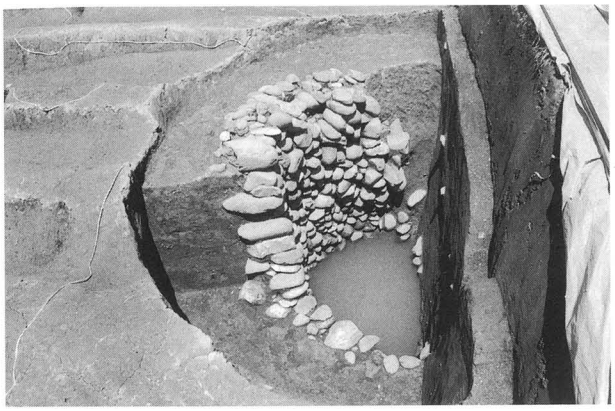
2　SD－2溝跡全景（南より）



3　SD－2溝跡北壁土層断面

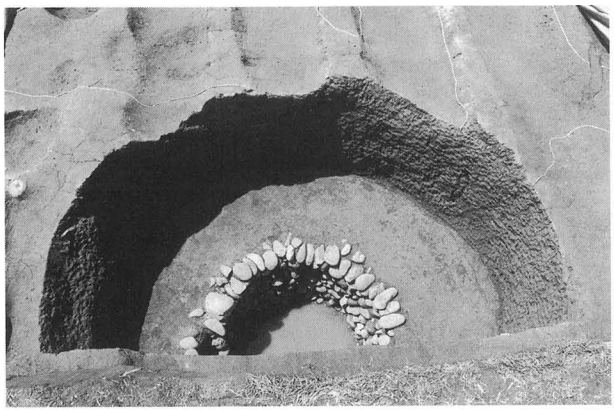
4　掘立柱建物跡全景（南より）

図版3　溝跡と掘立柱建物跡



1　SE－１井戸跡掘り方上部断面（南より）

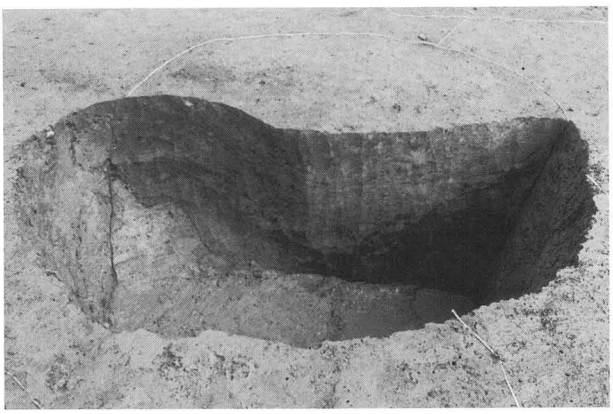
2　SE－１井戸跡石積み井戸枠（東より）



3　SE－１井戸跡中部付近の石組配列（東より）

4　SK－１土坑跡全景（東より）

5　SK－１土坑跡土層断面（東より）



6　SK－３土坑跡土層断面（南より）

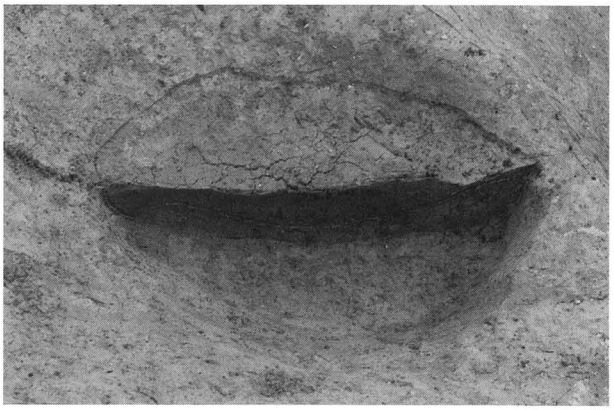
7　SK－３土坑跡全景（南西より）

図版４　井戸跡・土坑跡（SK１～３）

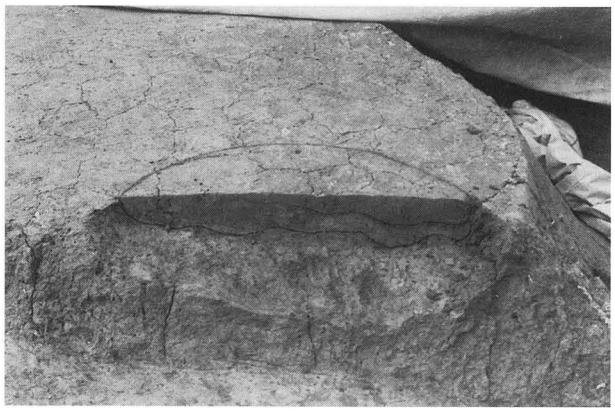
1　SK－４土坑跡（南より）

2　SK－５土坑跡（北より）

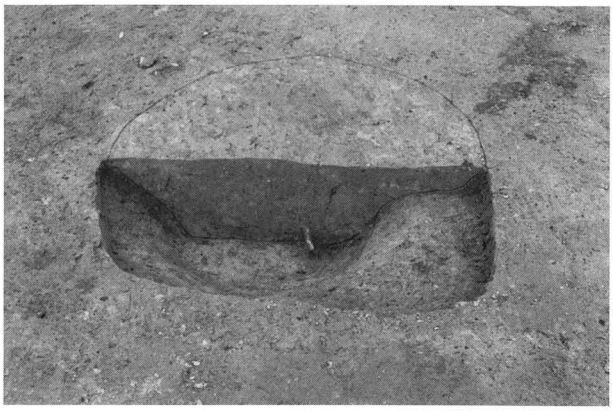
3　SK－７土坑跡（南より）



4　SK－10土坑跡（南より）

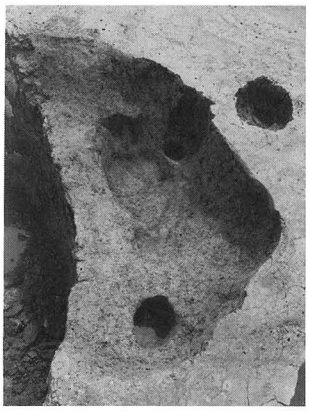


5　SK－11土坑跡（南より）



6　SK－12土坑跡（南より）

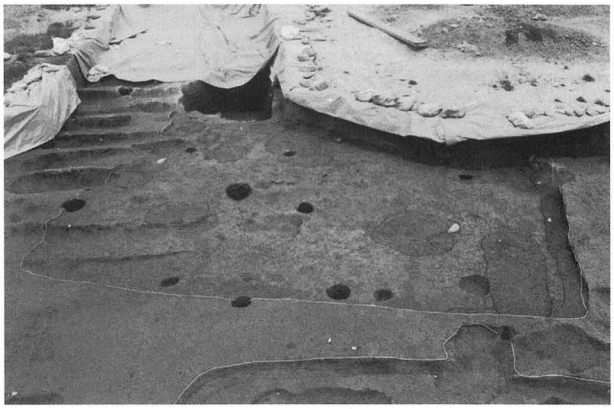
7　SK－13土坑跡（南より）



8　SK－14土坑跡（西より）

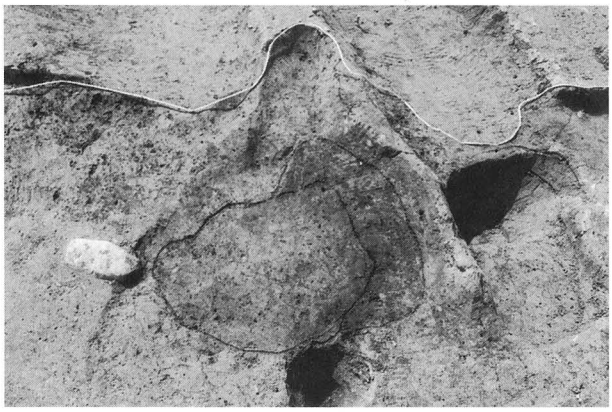
図版５　土坑跡（SK４～14）

1　SI－1竪穴住居跡（南より）

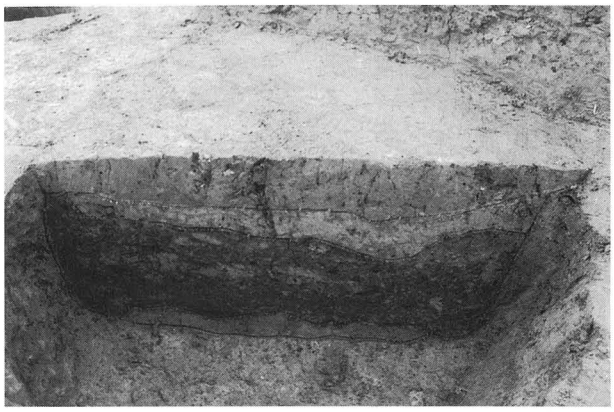


2　SI－2竪穴住居跡床面検出状況（南より）

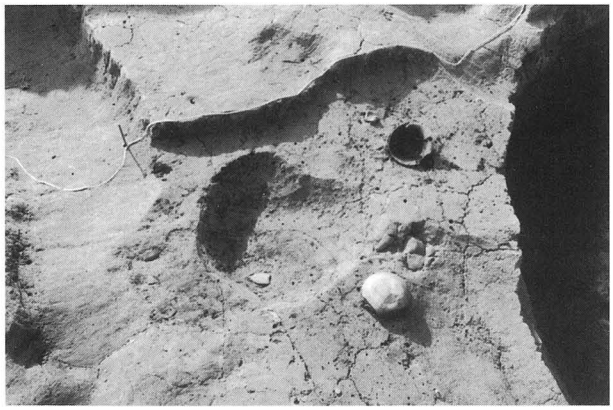
3　SI 2竪穴住居跡完掘状況（南より）



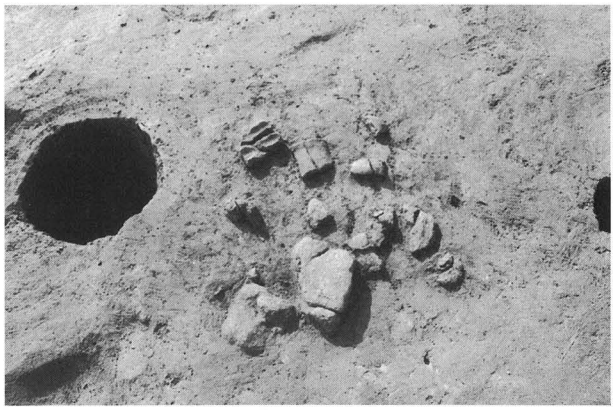
4　SI－2竪穴住居跡カマド（東より）



5　SI－2竪穴住居跡 SK－2土坑土層断面（南より）

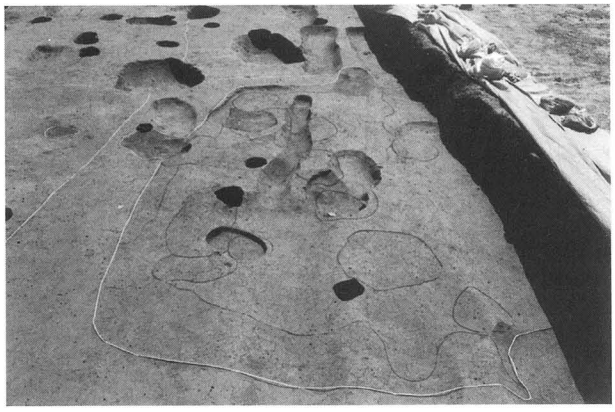


6　SI－2竪穴住居跡カマド右側の遺物出土状況（東より）

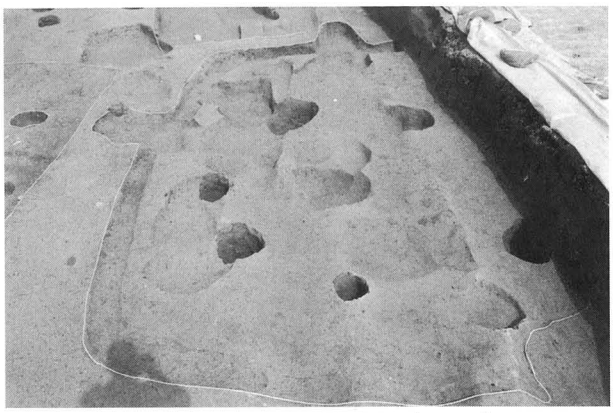


7　SI－2竪穴住居跡床面中央の遺物出土状況（東より）

図版6　竪穴住居跡（SI－1～2）

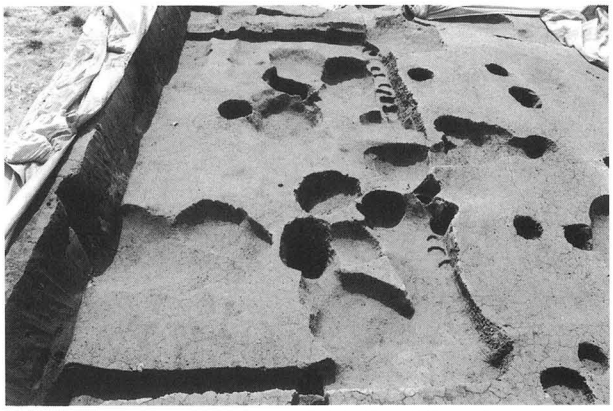


1　SI－３竪穴住居跡床面検出状況（西より）

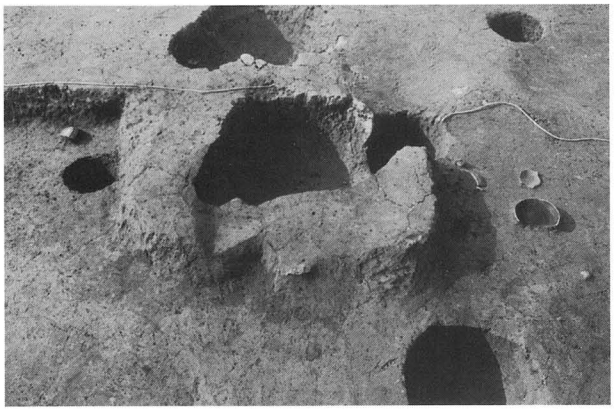


2　SI－３竪穴住居跡完掘状況（西より）

3　SI－４竪穴住居跡床面検出状況（東より）

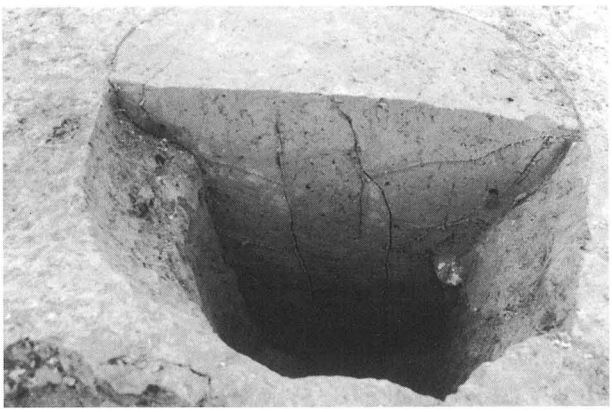


4　SI－４竪穴住居跡完掘状況（東より）

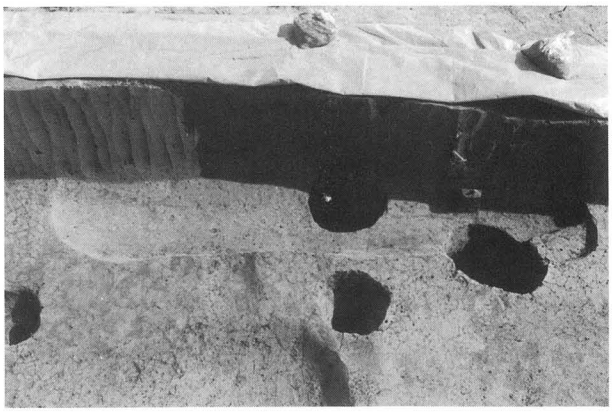


5　SI　－４竪穴住居跡カマド（新期：南より）

6　SI－４竪穴住居跡（古期：南より）



7　SI－４竪穴住居跡　Ｐ２柱穴断面（西より）

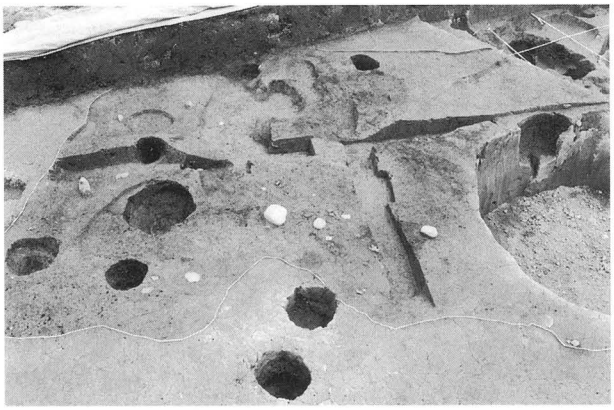


8　SI－５竪穴遺構（北より）

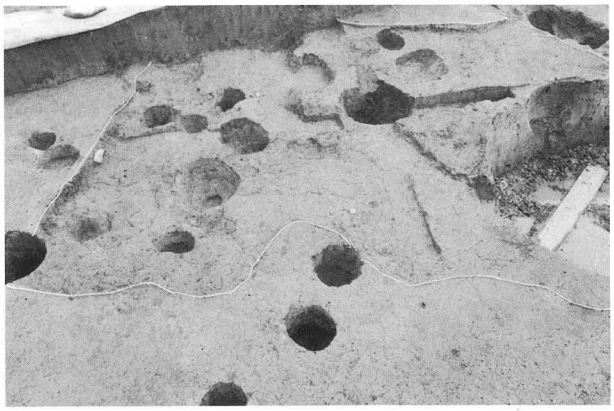
図版７　竪穴住居跡（SI－３～５）

1　SI－６竪穴住居跡 SK－２土坑検出状況（南西より）

2　SI－６竪穴住居跡２層中からの土師器出土状況（南より）



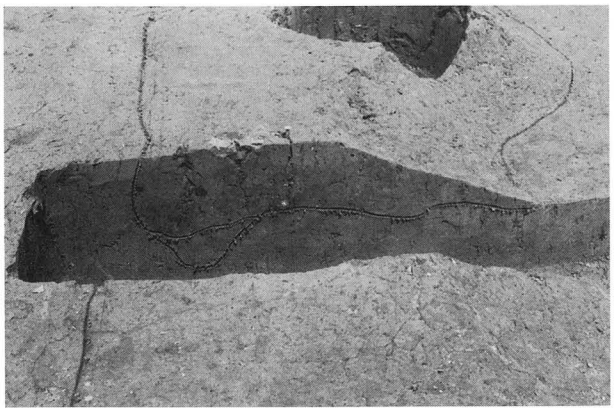
3　SI－６竪穴住居跡 SK－２土坑調査状況（南西より）



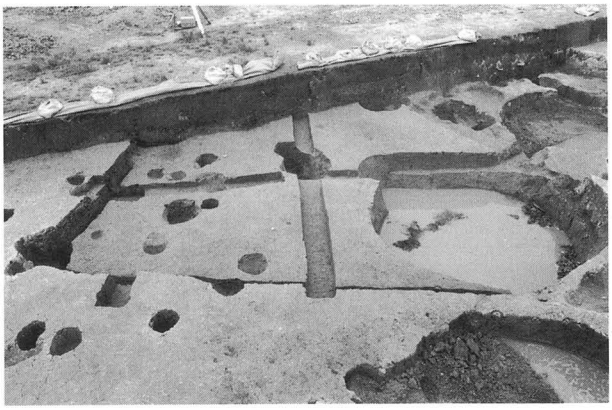
4　SI－６竪穴住居跡２層上面（南西より）

5　SI－６竪穴住居跡４層上面検出状況（南西より）

6　SI－６竪穴住居跡５層検出状況（南西より）



7　SI－６竪穴住居跡周溝　５層断面（南より）

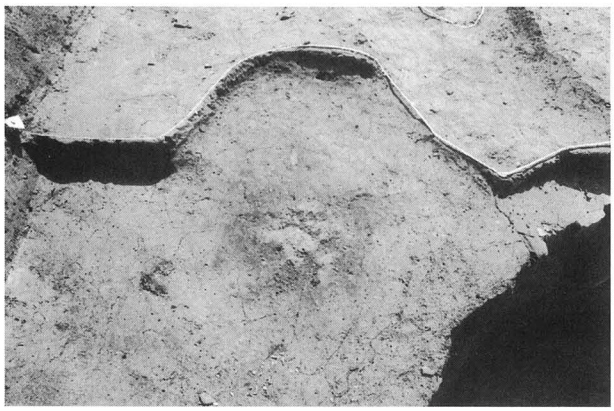


8　SI－６竪穴住居跡５層底面（南西より）

図版８　竪穴住居跡（SI－６）

1　SI－７竪穴住居跡完掘状況（西より）

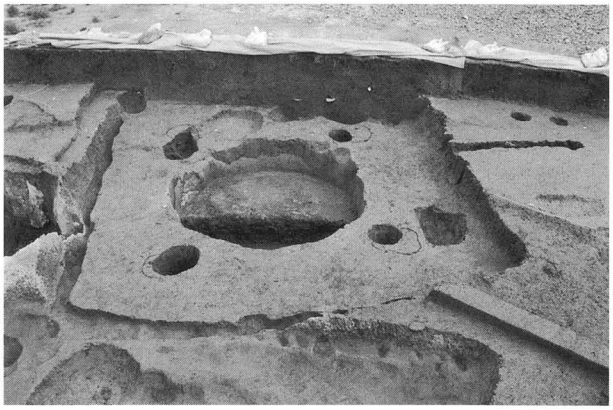
2　SI－７竪穴住居跡カマド周辺遺物出土状況（北より）



3　SI－７竪穴住居跡カマド（西より）

4　SI－７竪穴住居跡 SK－３土坑土層断面（東より）

5　SI－８竪穴住居跡床面検出状況（南より）



6　SI－８竪穴住居跡貼床除去後の柱穴検出状況（南より）

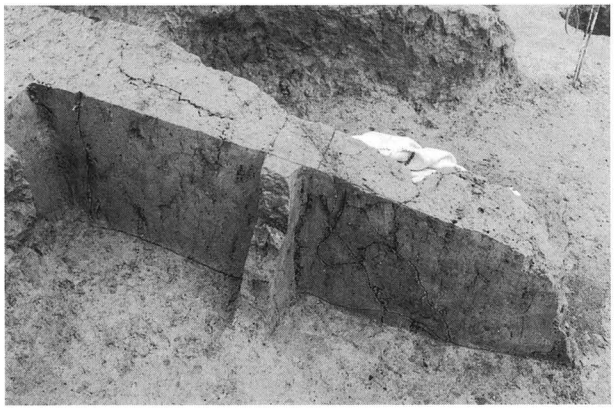
7　SI－８竪穴住居跡掘り方検出状況（南西より）

8　SI－８竪穴住居跡掘り方完掘状況（南より）

図版９　竪穴住居跡（SI－７～８）

1　SI－８竪穴住居跡カマド

2　SI－８竪穴住居跡煙道端部

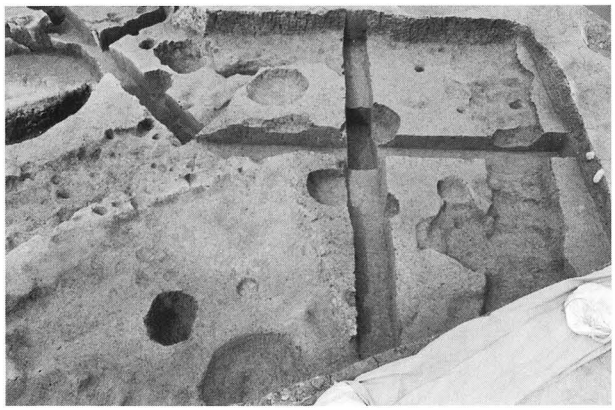


3　SI－８竪穴住居跡カマド左袖断面（北より）

4　SI－８竪穴住居跡カマド右袖断面（南より）

5　SI－９竪穴住居跡床面検出状況（南西より）

6　SI－９竪穴住居跡柱穴配置（北東より）

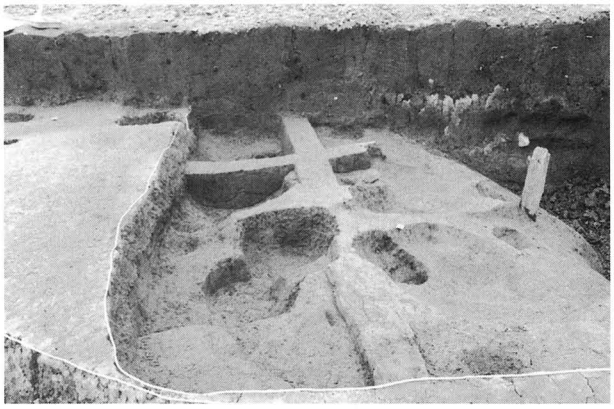


7　SI－９竪穴住居跡掘り方除去状況

8　SI－９竪穴住居跡　Ｐ２柱穴（北より）

図版10　竪穴住居跡（SI－８～９）

1　SI－10竪穴住居跡床面（東より）

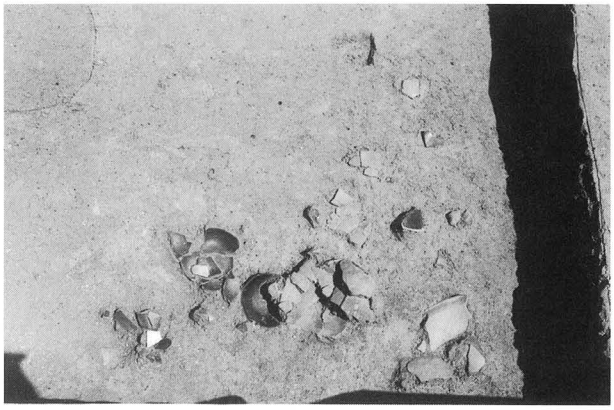


2　SI－10竪穴住居跡掘り方埋土土層断面（南より）

3　SI－10竪穴住居跡掘り方完掘状況（東より）

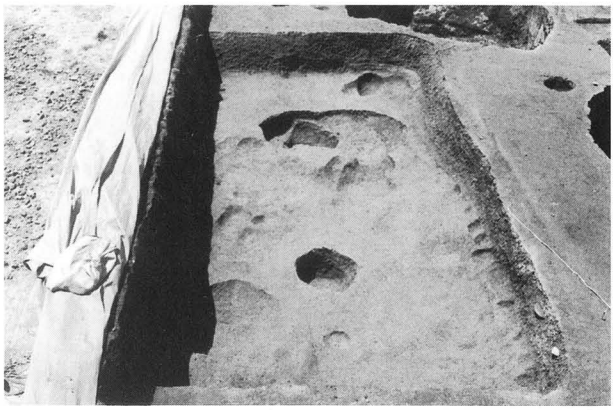
4　SI－11竪穴住居跡堆積土層断面

5　SI－11竪穴住居跡床面（東より）



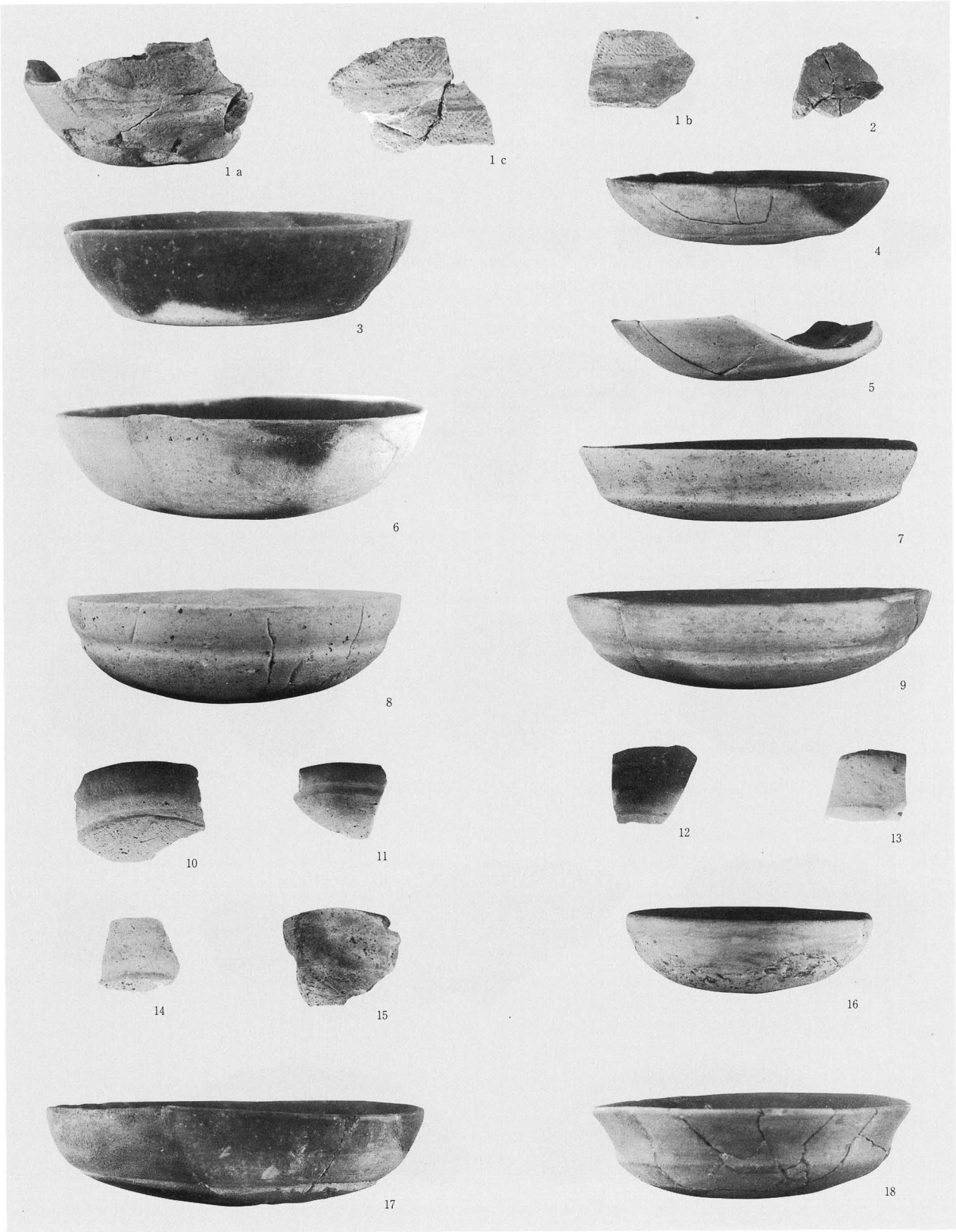
6　SI－11竪穴住居跡東壁際からの遺物出土状況（東より）

7　SI－11竪穴住居跡床面完掘状況（東より）



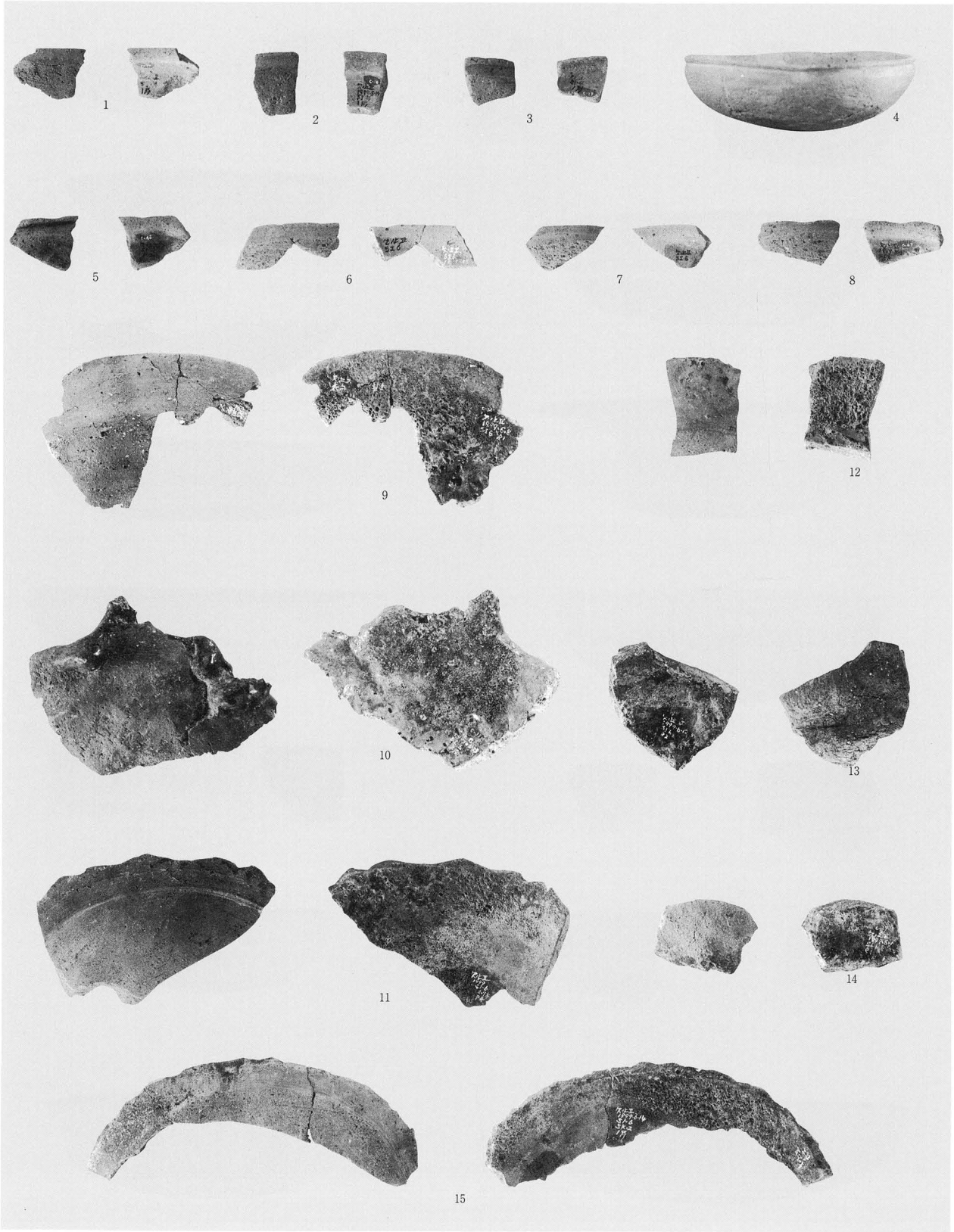
8　SI－11竪穴住居跡掘り方除去状況（東より）

図版11　竪穴住居跡（SI－10～11）



1	鉢	B－1（Ⅲ・Ⅳ層	第42図1）	2	鉢	B－2（Ⅲ層	第42図1）	3	坏	C－2（SI－2 床面	第21図3）
4	坏	C－3（SI－2 床面	第21図2）	5	坏	C－4（SI－2 P 3	第21図5）	6	坏	C－10（SI－3 SK－4	第23図2）
7	坏	C－12（SI－4 床面	第25図1）	8	坏	C－13（SI－4 床面	第25図2）	9	坏	C－14（SI－4 1層	第25図4）
10	坏	C－15（SI－4 SK－3	第25図5）	11	坏	C－16（SI－4 SK－6	第25図3）	12	高坏脚	C－24（SI－6 SK－2	第29図12）
13	坏	C－28（SI－6 P 5	第29図1）	14	坏	C－29（SI－6 2層	第29図3）	15	坏	C－27（SI－6 2層	第29図4）
16	坏	C－51（SK－4 4層	第17図3）	17	坏	C－54（SI－9 1層	第37図4）	18	坏	C－61（P22埋土	第43図1）

図版12　弥生土器・非ロクロ土師器（坏）

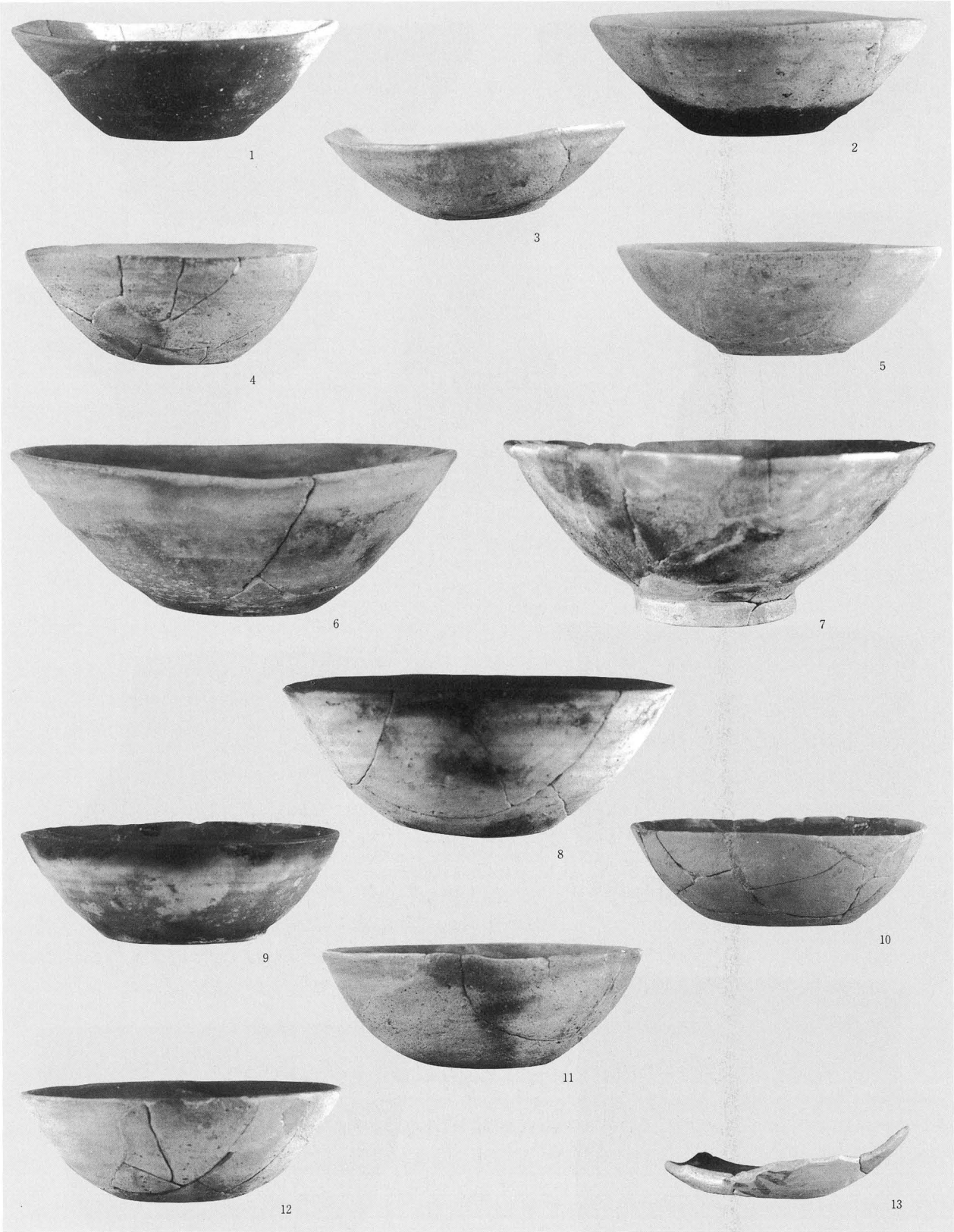


1　坏 C－17（SI－4 1層　第25図6）　2　坏 C－18（SI－4 1層 第25図7）　3　坏 C－19（SI－4 1層 第25図8）
4　坏 C－41（SI－6 2・3層 第29図11）　5　坏 C－42（SI－6 P12 第29図7）　6　坏 C－43（SI－6 1層 第29図10）
7　坏 C－44（SI－6　第29図8）　8　坏 C－45（SI－6 1層 第29図9）　9　坏 C－32（SI－6 1層 第30図3）
10　坏 C－33（SI－6 2層　第30図4）　11　坏 C－35（SI－6 P 4 第30図6）　12　坏 C－34（SI－6　第30図1）
13　甕 C－38（SI－6 2層　第30図8）　14　甕 C－39（SI－6 1層 第30図7）　15　坏 C－36（SI－6 2層 第30図5）

図版13　関東系土師器・トリベ

1　埦　　C－7（SI－2 周溝　第21図7）　　2　埦　C－11（SI－3 SK－5 第23図1）
3　台付坏 C－31（SI－6 2層　第29図5）　　4　高坏 C－1（SI－2 床面　第21図8）
5　高坏　C－50（SK－3 1層　第17図1）　　6　甕　C－52（SK－4 3層　第17図4）
7　甕　　C－8（SI－2 SK－1 第21図9）　　8　甕　C－9（SI－2 SK－3 第21図10）
9　甕　　C－21（SI－6 1層　第29図16）　　10　鉢　C－30（SI－6 5層　第29図13）

図版14　非ロクロ土師器（埦・台付坏・高坏・甕）

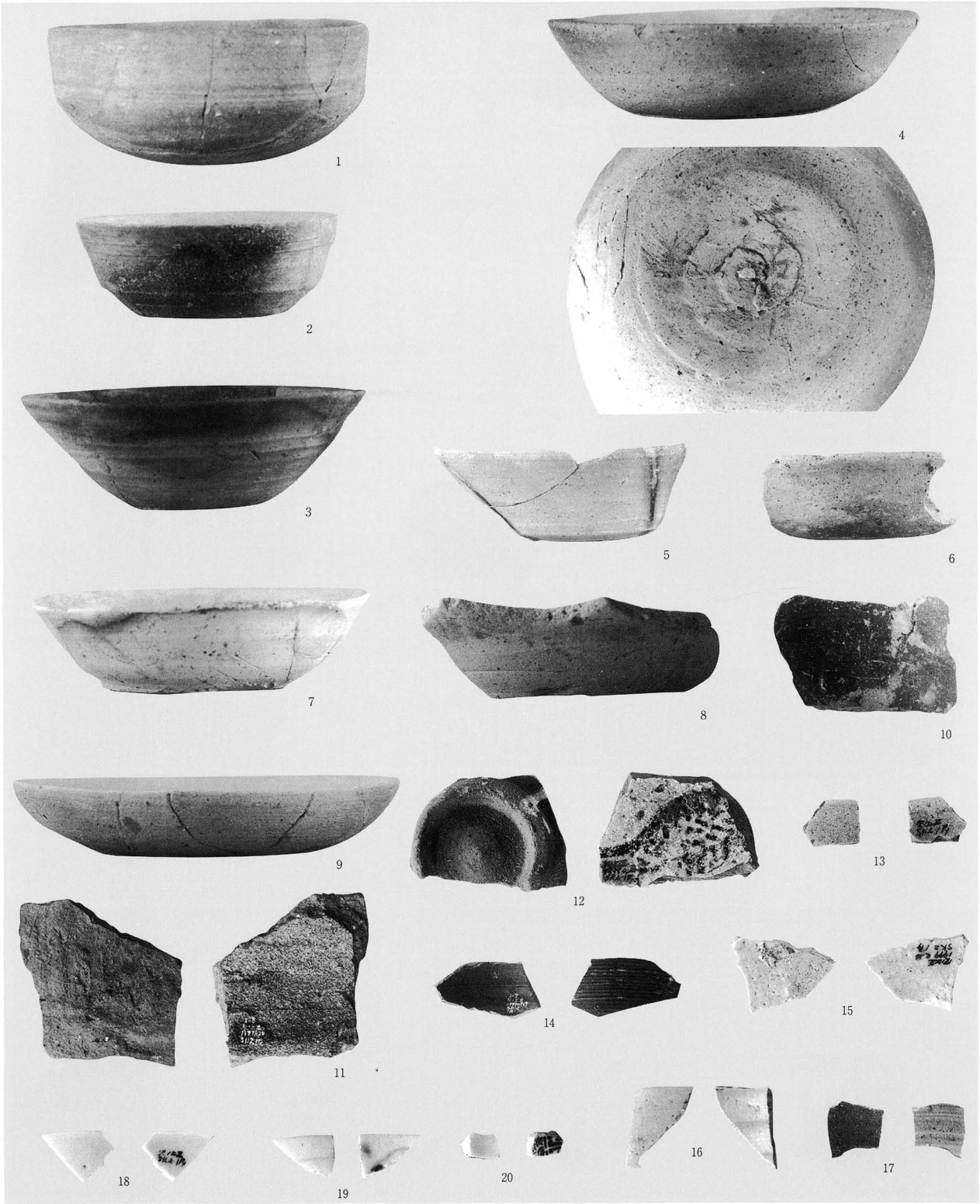


1　坏　　D－1（SI－7 1層 第32図5）　2　坏 D－2（SI－7 1層　第32図8）　3　坏 D－3（SI－7 SK－2 第32図7）
4　坏　　D－4（SI－7 1層 第32図9）　5　坏 D－5（SI－7 1層　第32図6）　6　坏 D－21（SI－7 1層　第32図3）
7　高台付坏 D－22（SI－7 1層 第32図4）　8　坏 D－13（SI－11 掘り方 第41図5）　9　坏 D－14（SI－11 床面　第41図6）
10　坏　　D－15（SI－11 床面 第41図3）　11　坏 D－16（SI－11 1層　第41図4）　12　坏 D－17（SI－11 床面　第41図2）
13　坏　　D－18（SI－11 床面 第41図1）

図版15　ロクロ土師器（坏）

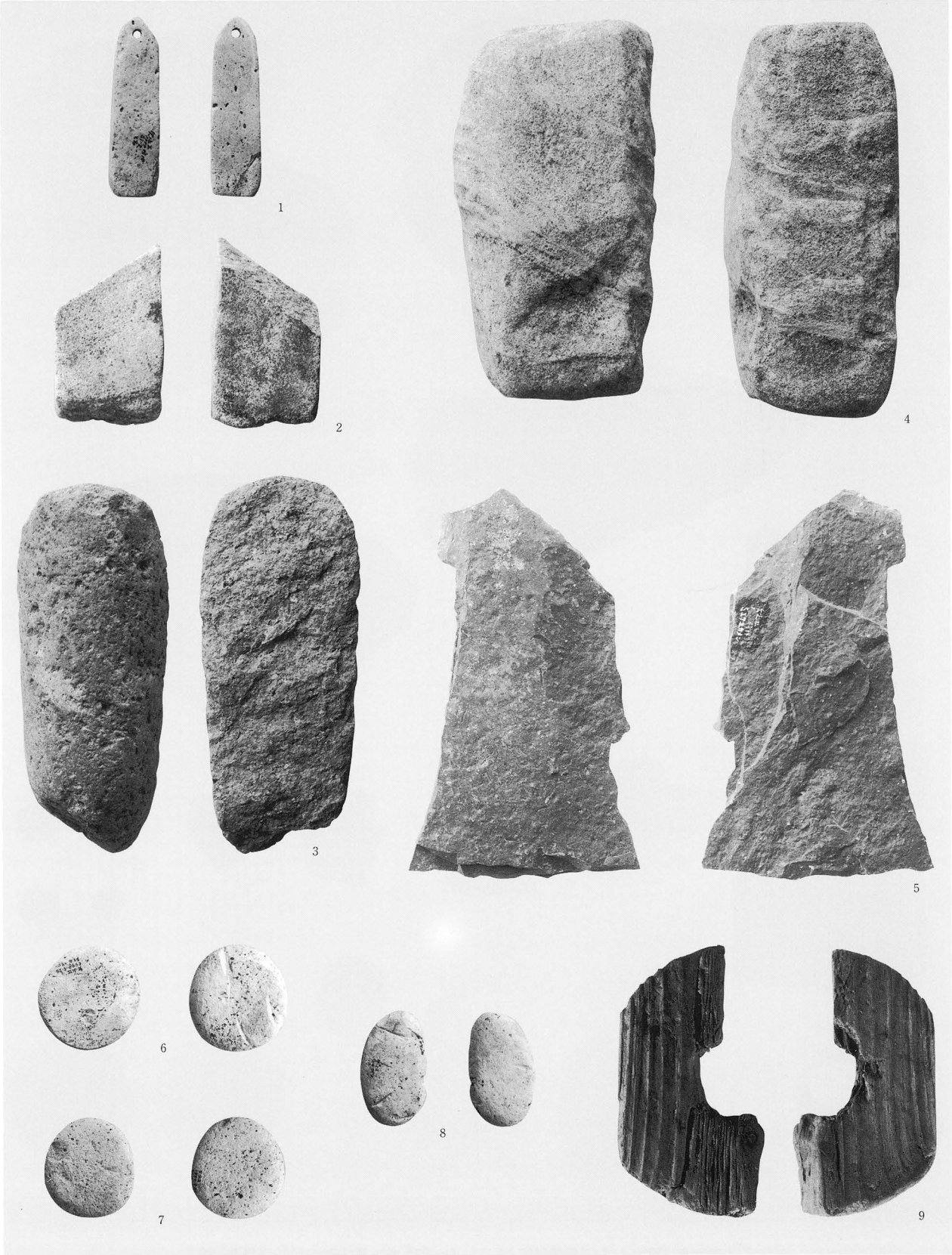
1　甕　D－9（SI－7 SK－3 第33図1）　2　甕　D－11（SI－8 カマド 第35図2）　3　甕　D－10（SI－8 1層　第35図3）
4　甕　D－20（SI－11 床面　第41図8）　5　甕　D－19（SI－11 床面　第41図9）　6　甑？　D－12（SI－8 掘り方　第35図4）
7　蓋　E－17（SI－9 1層　第37図6）　8　蓋　E－20（SI－9 1層　第37図5）　9　蓋　E－13（SI－8・9 検出面 第35図11）
10　蓋　E－14（SI－8 1層　第35図12）　11　瑳　E－15（SK－3 3層　第17図2）　12　甕　E－6（SI－7 床面　第33図4）
13　甕　E－7（SI－8 1層　第35図13）　14　坏　E－18（SI－8 カマド 第35図9）　15　坏　E－19（SI－3 1層　第23図3）

図版16　ロクロ土師器（甕他）・須恵器（蓋・瑳他）



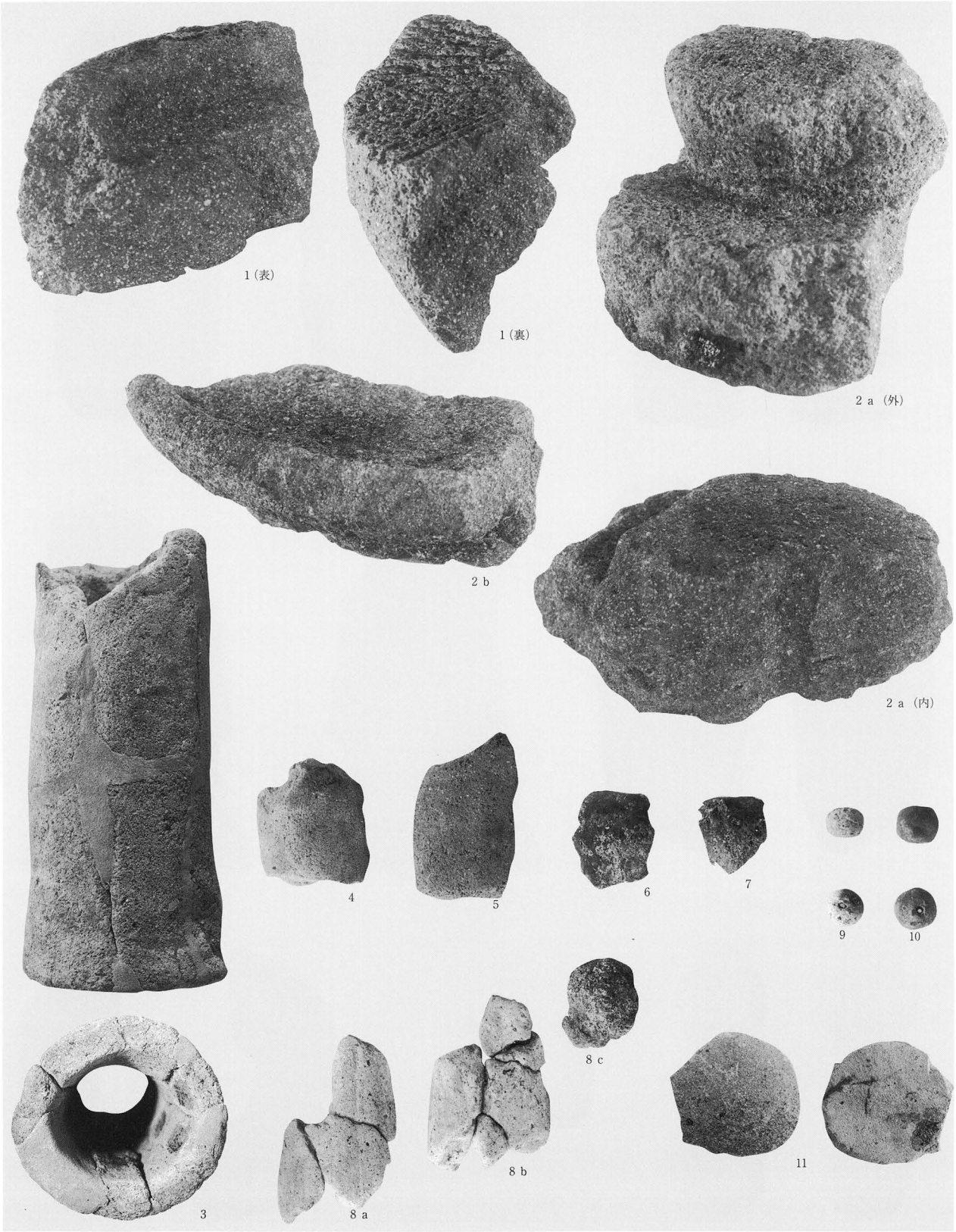
1	坏	E－1（SI－2 床面　第21図11）	2	坏	E－2（SI－6 5層　第29図18）	3	坏	E－4（SI－7 床面　第33図3）
4	坏	E－12（SI－8 煙道底面 第35図5）	5	坏	E－9（SI－8 14層　第35図10）	6	坏	E－10（SI－8 1層　第35図8）
7	坏	E－16（SK－4 4中層　第17図5）	8	皿	I－1（SK－1 2層 第16図1）	9	皿	I－2（SE－1 掘り方第14図1）
10	鉢？	I－9（SD－2 1層　第12図2）	11	甕	I－8（SD－2 1層 第12図1）	12	埦	I－4（SE－1 1層）
13	埦	I－6（SE－1 1層）	14	鉢？	I－7（SD－2 1層）	15	皿？	I－5（SE－1 1層）
16	壷	I－10（SD－2 1層）	17	皿 or 埦	I－11（P95 埋土）	18	埦	J－1（SE－1 1層）
19	浅鉢？	J－2（SD－2 1層）	20	埦	J－3（SD－2 1層）			

図版17　須恵器（坏）・陶器・磁器



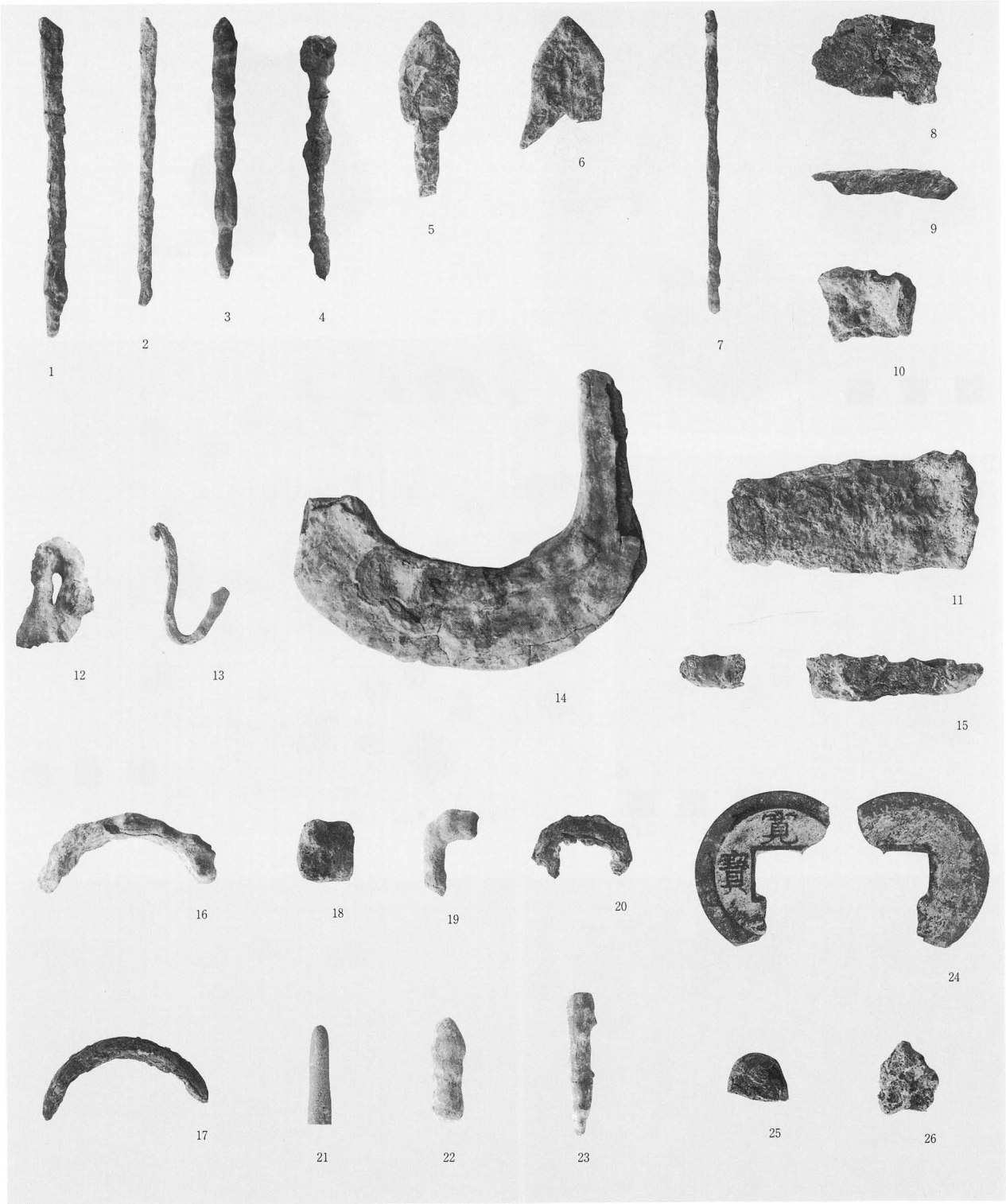
1　砥石　K－1（SI－2 床面　第21図16）　2　砥石 K－10（SI－9 掘り方 第37図7）
3　叩石　K－5（SI－6 SK－3 第30図11）　4　不明 K－2（SI－2 カマド 第21図15）
5　砥石？ K－7（SI－7 床面　第33図5）　6　不明 K－3（SI－4 SK－7 第25図12）
7　不明　K－4（SI－4 SK－7 第25図11）　8　不明 K－6（SI－6 SK－2 第30図12）
9　不明　L－1（SD－2 1層　第12図4）

図版18　石器・石製品・木製品



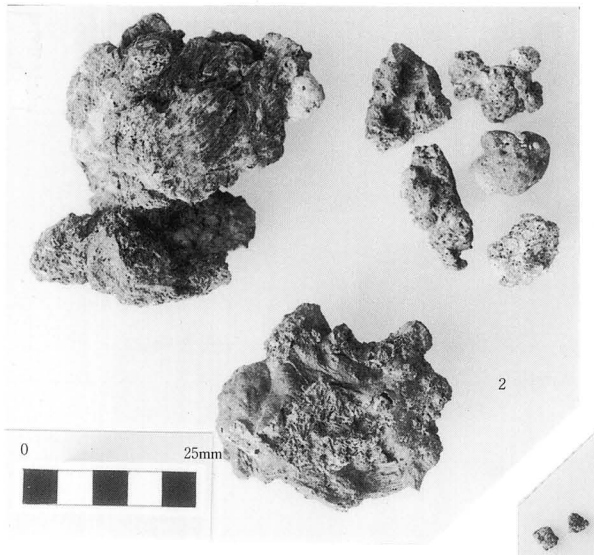
1　上臼 K－8（SE－1 1・2層第14図2）
2　下臼 K－9（SE－1 1・2層第14図3）
3　羽口 P－3（SI－2 床面）
4　羽口 P－1（SI－2 6層　第21図12）
5　羽口 P－2（SI－2 周溝　第21図13）
6　羽口 P－4（SI－4 1層　第25図10）
7　羽口 P－6（SI－6）
8　羽口 P－5（SI－6 SK－2 第30図9）
9　土玉 P－7（SI－6 検出面 第30図10）
10　土玉 P－10（Ⅰ層　第43図8）
11　円盤 P－8（SD－2 1層　第12図3）

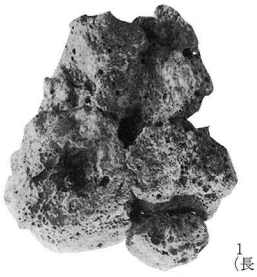
図版19　石臼・土製品

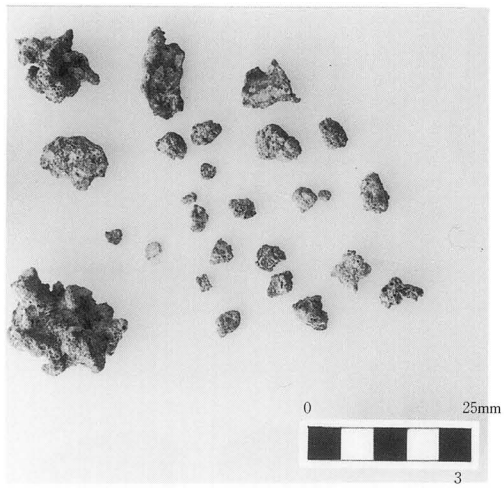


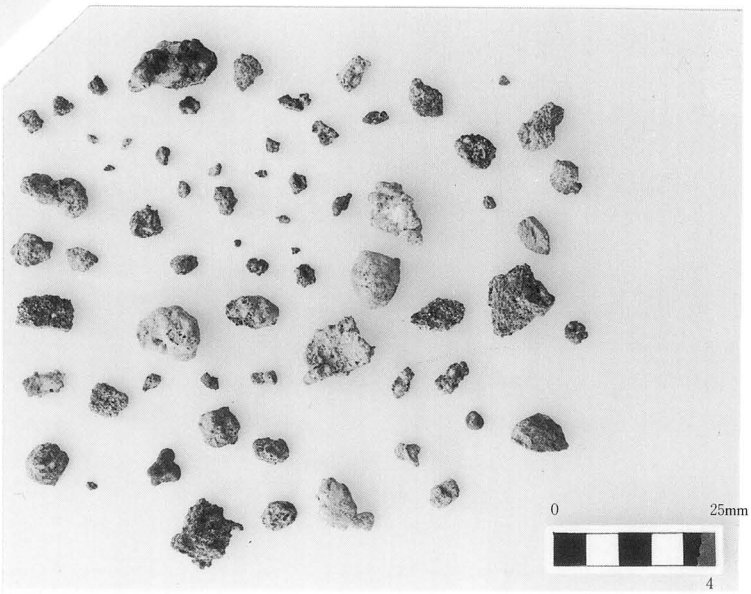
1	鏃	N－1	(SI－2 6層 | 第21図17)	2	鏃	N－18	(Ⅰ層 | 第43図3)	3	鏃	N－14	(SI－9 1層 | 第37図8)
4	鏃	N－15	(SI－9 掘り方 | 第37図9)	5	鏃	N－13	(SI－10 埋土 | 第39図2)	6	鏃	N－23	(Ⅰ層 | 第43図5)
7	鏃？	N－19	(Ⅰ層 | 第43図4)	8	鎌？	N－9	(SI－8 1層 | 第35図14)	9	鎌？	N－3	(SI－2 周溝 | 第21図18)
10	不明	N－4	(SI－4 1層 | 第25図13)	11	鎌	N－12	(SI－10 掘り方 | 第39図3)	12	不明	N－5	(SI－4 SK－6 | 第25図14)
13	釣針？	N－27	(SI－6 1層 | 第30図16)	14	U字鍬先	N－20	(SI－6 2層 | 第30図13)	15	刀子	N－25	(P.112 埋土 | 第43図2)
16	不明	N－8	(SI－6 1層 | 第30図15)	17	不明	N－21	(Ⅰ層 | 第43図7)	18	不明	N－2	(SI－1 貼床 | 第21図19)
19	不明	N－26	(SI－7 1層 | 第33図6)	20	不明	N－22	(Ⅰ層 | 第43図6)	21	不明	N－10	(SD－2 1層 | 第12図5)
22	不明	N－7	(SI－6 1層	第30図14)	23	不明	N－11	(SD－2 1層	第12図6)	24	古銭	N－24	(Ⅰ層)	
25	不明	N－17	(SI－11 1～2層 | 第41図10)	26	銅滓？	N－16	(SI－9 掘り方)						

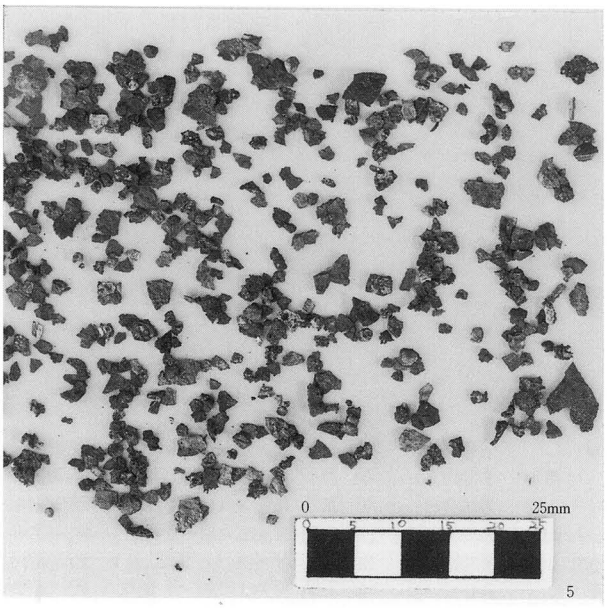
図版20　鉄・銅製品

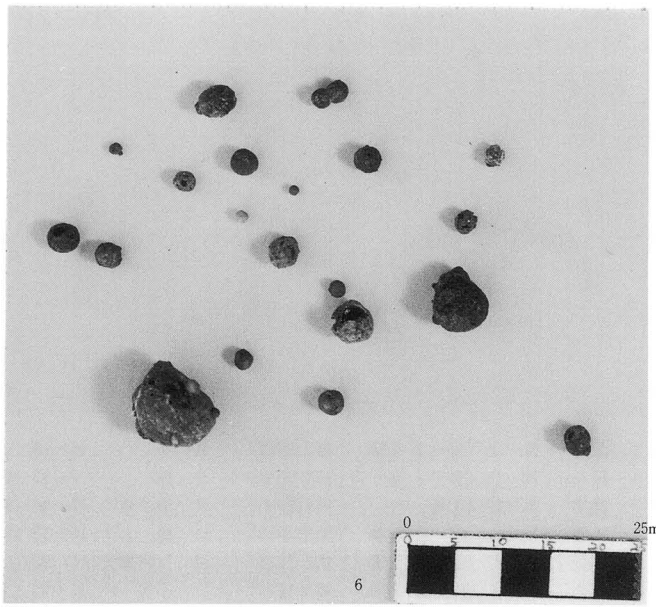












1　鉄滓（炉壁付着）（SI－6 SK－2）　2　鉄滓　（SI－6 層）
3　鉄滓　（SI－6 SK－2）　4　鉄滓　（SI－6 SK－2）
5　鍛造剥片　（SI－6 SK－2）　6　球状滓（SI－6 SK－2）

図版21　鉄　滓

報告書抄録

ふりがな	かけの　うえに　いせき
書名	欠ノ上Ⅱ遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第246集
編著者名	工藤哲司
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-8671　宮城県仙台市青葉区国分町３丁目７－１　電話 022-214-8893
発行年月日	2000. 3. 31

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡No.	北緯	東経	調査期間	調査面積m²	調査原因
かけのうえにいせき 欠ノ上Ⅱ遺跡	せんだいしたいはくく 仙台市太白区 こおりやまあざかけのうえ 郡山字欠ノ上 ２－10	04100	10269	38°12′36″	140°54′03″	1999.04.12 ～ 1999.06.30	340	宅地造成

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	
欠ノ上Ⅱ遺跡	集落跡	弥生時代 飛鳥時代 奈良時代 平安時代 中・近世	包含層 竪穴住居跡 掘立柱建物跡 井戸跡	弥生土器 土師器 須恵器 陶器・磁器 鉄製U字鍬先・鏃	

仙台市文化財調査報告書第246集

欠ノ上Ⅱ遺跡

── 発掘調査報告書 ──

２０００年３月

発行　仙台市教育委員会
〒980-8671 仙台市青葉区国分町三丁目７－１
文化財課 022（214）8893～4

印刷　株式会社 百般印刷工芸社
仙台市若林区六丁の目西町２－11
TEL 022（288）5251